

山田氏は臨水亭へ記者を伴ひ行かれたが、他の宴會に来て居た高橋慶太郎氏にも邂逅した▲酒席で雑妓の唄たのを聴ば、『安來千軒名の出た處、社日櫻に十神山、十神山がら沖見ればいつくの船や知らねども、三味の絲ほど帆をまいて、風に任せて鐵積んで上のぼり』と此上のぼりは上方へのぼる意味ぢやが、『鐵積んで』と早口に挿むのが曲折あり波瀾あつて餘程面白いのぢや▲モ一つのは斯うぢやつた、『松江大橋流りよと焼よと、和田見通ひは舟でする』和田見は新地と改名してるが言ふ迄もなく遊廓ぢや▲出雲の言葉は多少奥州に似てるので、十をづうと言ひ順をつんと言つて居る、又ロをフ、シをス、チをツ、ムをモ、リをル、と發音して容易に之を改め得ないゲナ▲雲州訛りを見るべき面白い俚歌がある曰く『わたしやうんすうぶらたのをまれ、づうる、二づうる三づうる、ぶがすのはてからぬすのはてまで、ふくずりぶつばつて今更ふまとはンリヤもりぢや、元のづう五にしてうくれ』

十月二日 雲州松江 皆美館にて

今日は山田氏に案内されて島根縣廳を襲ふたが、金尾知事は勸業課長村上壽夫と云ふ人に命じて、當縣の主なる産物の生産額及び價額の調べを呉れた▲最近の調査で、米は六十九万三千六百三十五石、麥は二十五万五千三百八十五石、生絲は二万九千三百五十五貫其價額百〇八万九千七百七十六圓、清酒は六万五千二百四十七石其價額二百二十一万六千三百七圓、水産漁獲は鹹水産が千〇三十八万六千四百四十四貫其價額八十八万六千八百八十四圓淡水産が十一万四千四百九十三貫其價額四万三千五百五十四圓、水産製造は鹹水産が百二十三万千五百五十一貫淡水産が三千四百九十五石、雜が八万八千九百二十個其總額六十二萬四千五百二十七圓▲縣廳を出てから城山の公園へ行つた、山は龜田山と云ひ城は千鳥城と云ふのぢやが、天守閣へ登つて宍道湖を瞰し、大山を東南に、三瓶山を西南に望んだ美觀は、記者をして端なく雲州は一大公園なりと感ぜしめた▲雲州は一體に江河溝渠縱横に疏通してる上に宍道湖があるので、何處へ行くにも舟で行く、貨物を運搬するに人の肩や牛馬の背を勞しないうて、大概舟楫の便に依つて居る、てあるから三尺か四尺の飛越を得らるゝ溝でも、へんの字形の橋を架けて居る、言ふ迄

愚なんて、松江と改稱したのぢやゲナ▲劇場は榮徳座、旭座、千鳥座などで青樓は北増田、南増田、和田屋、稻田樓等ぢやが、藝妓は卅二人、娼妓は卅四人さうぢや▲眞屋も六七軒あるが、殿町の大野政助氏は記者と山田金太郎を招いて撮影し自分も其傍に加はつた▲雲州は人物に乏しいとは言ふものゝ、梅法學博士、北尾理學博士、大谷文學士、其他の博士學士は多く松江から、陣幕久五郎は意東、市川女寅は揖屋、伊原青々園は大津から出てるゲナ▲伯耆の大山は出雲から觀た方が形狀が餘程好くて富士に似て居る、之を出雲富士と呼んで居る、富士の寶永山のやうに七合目あたりに凸起のあるなど最も妙ぢや、米子へ來て見ると、山勢益々雄大ではあるが、少しく美を損じて居る、淀江から觀れば最早峰勢崩れ了つて嶺勢となつてるさうぢや▲今日は山田金太郎氏に町端れまで送られ、早かつたが揖屋で晝飯を食ひ、陣幕の産地意東から小橋を越えて直に東隣なる荒島に饅頭を食ひ、大山の漸々高く大きくなるのを樂みつゝ歩いた▲飯梨川に架つてる飯梨橋を渡ると、不等邊三角形の茂つた小山が見える、これが安來節で名の出た十神山である、安來警察署で證明を取つて、伯州へと急いだが、

電信柱の數字を見て米子は案外近いと思つた、けれども此の數字は雲伯の國境へ來て『壹』と爲り更に『五〇』と出た、山口島根二縣の界では、電信柱の數字が變らざつたのに、今度は『五〇』と改めて出たので少々アテが違つた、併し日輪様は未だお休みにならないので、一里足らずの道は譯なく來て仕舞つた、

十月四日

伯州淀江

松岡方にて

米子は大に膨脹すべき運命を有つて居る、言ふまでもなく境港は山陰道唯一の要港で、新潟、敦賀と共に日本海の三要港である、米子とこの境港との距離は京濱距離の半分で、今てこそ一望棉畑ばかりで暢氣な軟沙地ぢやが、早晚三十分間の鐵道となつて仕舞ふに相違ない、爾うして姫路鳥取間の鐵道が通じ、津山倉吉間の鐵道（これは當分の六ヶ敷からうが）が通じ、鳥取赤崎間の鐵道が出来上つて仕舞へば、米子は山陰道の中心と爲り一大都市と爲り、松江は一大公園と爲るに相違ない、即ち此は一大商業地と爲り彼は一大遊樂地となるのぢや▲松江に集る水産物は、大抵松江で需用する分だ

けぢやが、米子は各漁業地から集まつた水産物を遠く蕨備の界まで配布するので、魚類を腐敗せしめない用意が肝腎ぢやから、製氷場あり氷室ありて魚類野菜の防腐術を遣つて居る▲今日は陰雨濛々で、大山の雄姿が見られないが、大山の半腹に昔しあつた二十餘個寺は今や七八ヶ寺となつて居る、此等寺院から下の方に伯樂座と云ふ原があつて、年に四回牛市が立つ、其牛市には十ヶ國ぐらゐの伯樂が集まるので、三備州の伯樂が来れば景氣が好い、三備州が来なければ景氣が好くない▲出雲、伯耆、但馬は牛の質が最も好い處で、耕牛としても荷駄牛としても乳牛としても食肉としても一番優つて居る、有名なる神戸牛の出所は即ち伯雲但の三國ぢや、それで庭前に牛馬を飼ひ、座敷と厩と相對してゐるのが多いケナ▲牛は伯州の名産に相違ないが、鐵も特産物である、伯州には昔から刀鍛冶が多いので、鍛冶が上手な故でもあらうが、日野の鐵が最も刀に適して居るからぢや▲今日は十一時に米子を立つて二時に淀江の有田嘉二郎氏方に着いた、同氏は松原二十三階堂の實兄なので、百方記者の旅情を慰められ、此家へ案内されたが、雨天に關らず、谷尾範吾、足立正、吹野政一、有田嘉二郎諸氏

て宴を催された、記者は例の通り旅中の見聞など秩序も首尾もなく喋舌り散らした、議會の腐敗を罵倒した所が、谷尾氏は議會を撲潰すより外ありませんかナアと歎息せられた、ソコで記者は今の政府の先生方に一任したら益、其弊に堪へない、國民を教育して漸々議會や政府を改善するの外ありませんまいとて教育家たる足立氏に重荷を負はして仕舞つた、

十月五日 伯州赤崎 草野氏方にて

西伯郡は一味に醸酒業の盛な處で、一昨夜も米子に於て西伯郡酒造家の大宴會があつた程ぢやが、米子よりも淀江の方が酒造家が多いので、高島清太郎、石原慎吾、田原治太郎、吹野儀三郎、太田市太郎の五氏は其重なるものぢやケナ▲淀江の藝妓兼娼妓(二枚鑑札)は十人ばかり俵は五十輛ばかり、荷車は百輛以上、新聞紙の入るものは大阪朝日二三十、大阪毎日十四五、其他は東京、鳥取、松江のを合せて十四五さうナ、山陽道に於て阪朝の優勢なるに反して、萩以東阪毎の方が優勢ぢやが、この淀江は例

外で阪朝が優勢なんぢや▲「よう知らんケニ、チヨッヨリのきて、さいて来る」は淀江の言葉ぢやが、之を姫路邊の言葉に譯すると、「よう知らんサカイ、チヨッヨリきて、さいて来る」と爲り、東京語では「能く知らないからチヨッヨリ行つてきて来る」と爲るのぢや、東京と淀江と同じ點は問ふとを聞くと云ふに在る▲淀江を少し離れて高麗山と云ふがある、此の山の麓を繞る十ヶ村には随分規模の大きい岩窟があつて、中には三四室ぐらゐに分かれてゐるものもある、爾うして朝鮮の土器や埴輪や古代の石器を多く掘り出すが、特に上淀村から掘り出した石馬は長さ五尺ぐらゐの石を彫刻したので、筑後から出た石人と同時代の物ぢやが、神馬と名けて居るケナ▲大山の麓からも石器時代の石斧、石鏃など澤山出るので、新に開墾するに就き鏃の先などに掛るのが幾つもある、或る古物好きの如きは石鏃を三百も拾つたと云ふ話ぢや、先々月坪井博士が来て、多くの材料を持つて歸つたさうナ▲今日は風雨晦暝で仙岳も姿を隠し、隠岐島も船上山も見えなかつたが、日本海は黒雲に壓せられて、滔天の怒潮濤々洶々として岸を拍ち来る凄じさは、元弘帝が蒙塵された當時を憶ふの感愈々切なるを覺えた、御來

屋て晝食して聞く所に據れば、其海濱の石垣に、元弘帝御着船所の標柱があつたが、同地の火災で焼けて仕舞つて、今は礎石のみ存して居るケナ▲尊王賤弱の空氣が士人の間に行き渡つて、未だ農商の間に行き渡らざつた頃、船上山に登つて碑を建つた者は廣瀬旭莊ぢやさうで、因伯の士人は大に之を徳とし、水戸の義公が「嗚呼忠臣楠子之墓」を淡川に建つたのに比したさうぢや▲今日十時に淀江を立つて來たが、風雨晦暝で何も見ざつた、何も見ないので益々大溟の嵩高偉大を感じた、下中山と赤崎の間で蝙蝠傘を滅茶くんに毀されて、杵築で修繕したのが水泡に歸した、草野雄太郎氏方へ着いた頃は濡鼠の様ぢやつた、

十月六日 伯州橋津 大橋方にて

記者の異装と濡鼠然たるとに因りて、草野氏の車夫はケマシな顔して「何ですか」と言つたが、名刺を奥へ持ち行きて主人と共に出て來た時は草鞋の紐まで解いて呉れた▲主人は挨拶後廻しと宣言して直に記者を二階へ導き、茶を出し珈琲を出し山海の珍珠

を列ねて酒を飲まされた、聽て二十三階堂の岳翁恬齋翁が二階へ來られた、翁は二三語交ゆる中に涙を催され、八十の老翁嬉しいに付け懐かしいに付け涙が出ますと言はれた、主人は傍より年取りまして頃日は宛然小供のやうですと言はれた、主人は翁の嫡子である▲主人の令室は明治女學校の出身ぢやつたが、先月十七日病歿されて、巖本善治氏及舊同窓者の弔辭を贏得された、記者は主人の二女一男を見て涙を催した▲赤崎の少し西に徳川時代から菊港と云ふがあつたが、今は填塞して役に立たぬ、それで松ヶ谷の龜崎港と云ふのが縣港と爲つて居る、淀江は年々海が埋まつて徳川の初め海濱にあつた道路は後に海濱から十丁以上も離れたので、今の道路は數十年前付け改へたものぢや、であるから逆も港は出來ない處さうナ▲御來屋の名和神社を別格官幣大社としたのは、粕谷上枝はづまと云ふ有志家ぢやさうナ▲下市に橋井半雲と云ふ老人があつて、書畫骨董を好み、庭作を好み、貴賤貧富に關らず、大凡名ある者學ある者才ある者藝ある者をば必ず歓迎する、小松宮殿下が通られた際に赤崎で御晝食の準備をして居たが、下市で上るとになつたのは、殿下の御都合にも原因して居るが半雲が庭道樂の功も

多きを占めて居つたゲナ▲赤崎の寺は眞言宗二つ(一は衰廢)、曹洞宗一つ、禪宗一つで、眞宗の信者は穢多ばかりさうナ、眞宗は伯州に於て大に侮辱されたものぢや▲赤崎の人力車は五十輛ぐらゐる、荷車は百以上、藝妓兼娼妓三四名、新聞は阪朝阪毎各五部、鳥取新報、因伯時報各二三部、其他東京新聞と山陰新聞合せて六七部ぢやゲナ▲今日十一時に草野氏を辭した、實はモ少し早く立つ積りぢやつたが、主人の北堂に脚絆を奪はれて、酒食を強られたのである、八橋警察署やばせに證明を取り、降らず露れざる空に菅笠を戴いてズン／＼歩いた、倉吉へは寄らざつたが、同地の生絲は産額の少いに關らず其品質は日本一ぢやゲナ、又同地の稻扱は他處の稻扱と形狀を異にしないに關らず、鐵が好くて堅固に出來てるので専賣特許になつて居るのぢや、

十月七日

因州濱村

煙草屋にて

昨夜泊つた橋津の宿屋で生憎風呂をたてざつたので、女中につれられて湯屋へ行つた、女中は記者を湯屋へ導くのを無上の名譽とても思つたか、番傘を差し掛け紋付の弓張

提灯を點して意氣揚々、逢ふ人毎に御客様を風呂へお連れ申すのぢやと吹聴した、尤も冷かされない様に防禦線を張つたのであらう▲意氣揚々たる女中に相合傘で色男然と連れられたは可かつたが、其の湯屋の穢くて其のランプの薄暗くて、乞食然と筵の上に乗つて先客のあがるのを待つてる者や、男客の無いのを幸として男湯へ侵入せる者や、實に亂暴狼藉を極めて居つた、サスガの非文明主義記者もこれには茫然たるゝと十分ばかり、女客の男湯を出て去るを待つてはいり、鴉の行水のやうにガサ／＼と洗つて直に出で仕舞つた▲記者が此の湯屋に於て昨夜來の疑問を解釋し得たと云ふは外でも無い、草野雄太郎氏が百方歡待せられたに關らず、數里の風雨を冒して徒歩し來つた記者を入浴せしめなかつたのは、赤崎湯屋の不取締を責かるゝことを恐れたのであらう、赤崎の湯屋は橋津の比ではあるまいが、逆も雲泥の差とは行かない五十歩百歩だらうから▲橋津の分署長は、巡查の通知によりて平服の儘朴齒の下駄で出署したが、記者の旅情を慰めて呉れるなどナカ／＼行き届いたものぢやつた▲瑞穂村で『其處を通るは何者ぞ』など、記者を冷評して二三人笑ひどよめいた少女があつたが、其

態度は女學生では無かつた▲今日は東郷温泉に一浴する積りぢやつたが朝來の降雨で二里の寄道がイヤに爲り、折角の企てを中止した▲泊から青谷、青谷から船磯あたり海岸は、強風に激した怒濤が雪を蹴し來つて、漁家漁船などを呑み去らんずる勢、實に凄まじかつた▲因伯の境に標柱が無いから人に問くと、新道ぢやから無いと言つた、それでは舊道に在るかと問くと、舊道には在つたが今は無くなつてるとの事▲青谷分署で聞く所に據れば、青谷の産物は、木綿、烏賊(白い方)雲丹ぢやゲナ、越前の雲丹は煉つた物ぢやが、此地のはドロリとした物との話▲青谷邊の宗教は禪宗、曹洞宗などが多く、其次が眞宗さうナ、赤崎のやうに眞宗を穢多の宗教として仕舞はないが、まだしもぢや▲伯州では、東京の「何か彼か」を「何ぞかんぞ」と云ひ、「急いで居る」を「セツク居る」と言ふのぢや▲今日の強風には、幾度か帽子を吹飛ばされた、一度は土手下の稻田へ吹飛されて、記者は正直に畦へ下りウロ／＼して居たが、荷車を推して來た男が、土手から下りて取つて呉れた、強風に閉口した譯でもないが、東郷の温泉へ行かざつたから、せめて濱村の温泉へはいらうと決心し、三時半に泊つて

仕舞つた、

百九十二

十月八日

因州鳥取

小錢屋にて

漸く鳥取まで来た、鳥取は米子と反對で、商業には不向の地である、鳥取のみならず因州全體が商業に不向の地なのである、故に伯州人は毎々誇りに吹聴して居る、鳥取縣の經費は七分通り伯州で持つてゐるのぢや、伯州が鳥根縣に屬する事になつたら、因州は逆も立ち行くまいと▲由來舊鳥取藩士は名を重ずる方で、勤王家には糟谷末枝、河田景興あり、能吏には松田道之、北垣國道あり、實業家には原六郎あり、法律家には岸本辰雄、奥田義人あり、愛知縣知事沖守固、愛媛縣知事本部泰あり、陸軍少將内山小二郎、理學博士村岡範爲馳、醫學博士伊藤隼人、文學士野村直太郎、坂本四方太、梶川重吉、醫學士田中民夫、工學士梶浦重藏あり、之に反して伯州は利を重んずる方で、虛名などは如何でも可いと心得てると見えて加藤正義、頭本元貞の二人が日野の山間から出たのと、富家に生れて社會問題に興味を有せる桑田熊藏が倉吉から出たのと、

思軒に怪醜不通と罵られ蘇峰に溫良謙退と煽てられた二十三階堂が淀江の海濱から出たばかりぢや、花より團子とは言ふものゝ、鳥取縣經費の七分を負擔してゐる伯州にしては餘り花が少過るぢや無いか▲雲州と伯州は國道に山のない處ぢやが、因州へ來ると坂又坂である、併し大抵チョット登つたと思ふと降りになる坂なんて、長州の宗頭から萩、萩から福川へ越える様な長い坂路は無い、尤も鳥取以東但州へ越える方にはあるだらう▲伯州は雲州より地質も水質も好いので、收穫も多く酒造家も多い、因州は石逕が多くて土地の礫瘠を證して居るが、水質は伯州と同様に好いので、矢張り酒造家が多い▲因伯は一體に水と空氣の好い爲めか、流行病も少く肺病心臟病なども少い、日本全國に於て、人口一萬に對する一年の死亡數二百三十以上の分が東京、大阪の二府と富山縣で、百七十以下の分が茨城、熊本、宮崎、鹿兒島、鳥取の五縣ぢや、南洋の暖潮ばかり受けてゐる九州南部の三縣、及び寒潮暖潮の交會所たる茨城縣に惡疾の少いのは當然ぢやが、鳥取縣に惡疾の少いのは不思議である▲今朝、濱村の溫泉宿を立つてから、當市へ來るまでは、強風に吹きまくられつゝ三つ四つの坂を越えたのと、

百九十三

風歇みて雨となりたる後、紐のないクラクラする菅笠を被つて二里ばかり歩いたのと、吉岡村で警察署及び氣高郡役所を襲ふただけである、吉岡警察署長及び氣高郡書記の話は、兩三日來の紀行中に書いて仕舞つた事柄が多いので珍しく無い、此處には書かずに置かう▲午後四時半頃當市へ着いて、先づ因伯時報を訪ひ、荒川完氏に逢つた、それから鳥取新報社を訪ひ、鳩谷兼次氏に此家へ伴れられた、今夜雨を冒して來訪せられ、記者の旅情を慰められたのは、右二氏と鳥取新報社の山部小次郎氏である、

十月九日

因州鳥取

小錢屋にて

今日午後一時、鳥取縣廳を襲ふて、廣島以來有名なる寺田知事に逢つた、世人が光菊の名と共に記憶して居る彼は、記者が想像した通りの貌と云ふては無い、記者はそれほど深く彼を想像せざつたから、けれども、彼の一舉一動は先づ記者の想像した通りぢつた▲彼のテーブルには、未決書類と既決書類を分けて抽匣ひきだし様の箱へ飾り、其傍に陵墓一覽と云ふ袖珍折本（縦三寸五分、横二寸五分）を置いて居つた▲談話が政黨の上

に涉つたとき、彼は成るべく虚心平氣を裝つて居たが打解けた調子は確かに一變して居た、併し鳥取縣と島根縣とは政友會と帝國派の對立せる處で他に類がない、熊本縣になると帝國派の勢力が七分を占めてる位の事實談は遠慮なく遣つて除けた、爾うして鳥取は昔から尙武の地即ち名節を砥礪する方て武士は食はねど高楊枝、米子倉吉などは實業に重きを置き學者官吏政客などに爲ることを望まないと脱くなど、サスガ官海游泳に長けた男だけに談話はチョット面白い▲知事が第四課長に記者を紹介する時記者の名刺を見せて、これは有名なる徒步旅行記者と言つた、知事の有名なると記者の比にあらざるを誇る如く▲因州因幡云々の鄙猥極まる俚歌は頗る鳥取を侮辱して居るが、鳥取は比較的風俗の善い方て、賭博なども郡部には随分あるが當市内には餘り無い、縣下には岩井、吉岡、濱村（以上因州）、東郷、三朝、關金（以上伯州）などの温泉があるが、風俗紊亂と云ふほどのは餘り無い▲今夜、借考亭に宴會を催され、鳥取新報社、因伯時報社の諸君が美酒佳肴もて饗された、岡田機外氏の作『蝙蝠を杖に二六の徒步旅行、秋風さつと洋服の、鞆もたき旅日記、君が譽はいつまでも、千代川に

うつす姿繪』を秀吉と云ふが絃歌にのぼせ、小稻と云ふが舞ふた、また小稻は數番の
 劍舞を遣つたが、姉さん株の秀吉は『やんちやたすさかいナァ』と笑つて居た▲竹内
 吉次郎氏が呉られた詩に曰く『炎雨醒風往又回、雙鞋短杖幾崔嵬、知君健脚堅於鐵、
 踏破江山千里來』、機外氏の句に曰く『草臥を夢に紅葉の旅枕』、

十月十日

因州智頭

榊屋にて

山陰道は一體に迷信の強い處ぢやが、因州が一番甚しいやうぢや、家の入口に出雲大
 社守護、一畑薬師如來、天神地祇八百萬神守護などの貼紙頗る多く、中には十枚以上
 貼り付けて居るものもある▲周防の山口には、池の月、園の露、外郎つららなど云ふ菓子があ
 るけれども、餘り氣の利いた物でなく、馬關の淡雪と云ふ菓子も餘り感心しない、所
 が萩や濱田や松江や米子よなこには随分氣の利いた菓子がある、併し菓子脈は米子あたりで
 止まり、海を越えて越前から加賀へ行つて居ると見えて、鳥取へ來てはサツバリ駄目
 ぢや▲山陰道は名士の少い處ぢやが、鳥取は先づ名士の多く出た方らしい、出石いし、豊

岡、津和野、松江など之に次ぐのである▲因伯は生活の程度の低い處なので、下駄も
 草履もなしに跣足はだしの人が多し、特に因州に多い、十七八の娘盛りが雨の路を跣足で歩
 いてるのを見ると可愛想てならぬ▲鳥取に「イカサマ」と云ふ言葉があつて、成程と
 言ふ場合に使はれて居る、何か言ひ出で、イカサマと應へられると冷遇された心持
 がする▲鳥取の小錢屋は、孔方樓と云ふ拈つた、名を付けて貰つて、玄關に大きな額
 を掲げて居るが、誰も孔方樓などと呼ぶ者は無いゲナ▲去る四日から昨日迄六日間の
 陰雨若くは風雨で大閉口ぢやつたが、今日は漸く日光を見てイッ／＼宿屋を立つた、
 鳥取新報社と因伯時報社へ謝辭を述べに寄つたが、新報社へ大山秋子氏から記者へ宛
 て、何日頃豊岡へ寄るかとの端書が來て居た▲豊岡の「木兎」と云ふ雜誌から田中寒樓
 氏を想起したので、河原村へ來たとき警察署で問ふたけれども、此村には未だ詩歌俳
 諧を遣るやうな風流人がないとの答であつた▲所が警察署を出て二三四歩くと、田中
 虎藏と云ふ標札の家を發見した、チヨット立寄つて、寒樓さんはコチラてすかと問ひ
 老嫗がニコ／＼笑つて奥を顧みくま此家ヤナアと言ふのを見た、けれども出て來られたの

は寒樓氏でなく兄上か叔父君かと思はるゝ年頃の仁で、『彼は今朝鳥取へ行きました多分途中で御逢ひで御座りましたでしやうが……』と言はれた▲河原から四五丁來た處で、一個の醉漢車上で叱咤しながら行くに逢ひ、豪い勢ひぢやナアと擲擻した所が、先生車上より顧みて君は學者僕は樂者と洒落れつゝ、車を止めさせ一丁餘り還り來て『伴が慶應義塾へ入つて居る……君に一杯差上げたい』と言つた、偕は先生、徒歩旅行を知つて居るかと思つて名刺を遣ると、俄に恐縮して今まで被つて居つた帽子を取り、頻りに叩頭して『何卒拙者を撲つてつかさい無禮を致したケニ』と詫入り、丁寧に道を教へて、サア御急ぎでしやうケニ早く〜と促した、彼の帽子の中に「石田」と書いてあつた▲用瀬から智頭までの道は、翠壁一重雲一重の間を迂回して、千代川の上流涇々たる邊り綸を垂るゝ人多く、宛然木曾路のやうぢや、

十月十一日

作州古町

高田屋にて

因州の智頭から作州の坂根への間は仙境である、眞直に伸びた質の好い杉は此邊の特産ぢやさうで、坂根から東に當る字大茅と云ふ處は、幾千町の高原に毎年三万本づゝの杉苗を向ふ三十箇年間植ゑる筈ぢやケナ▲言ふ迄もなく、杉は陽地を嫌ひ陰地を好むものなので、陽地に作つた杉は樹心が黒くなつて仕舞ふ、尤も樹心の黒くなつた杉でも伐採後板にして雨露に晒して置けば漸々黒味の剝げるのもあるが、先づ黒味の抜けぬ方が多部分を占めて居るさうナ▲因州作州の境、伯州作州の境あたりは、女が股引を穿き筒袖を着て手拭を被り、男同様に柴を刈り薪を脊負ひて荷車の通ずる處まで降る、近寄り見れば顔や手が少し優しいので女と判るが、遠くから見れば男だが女だかサツバリ判らない、爾うして女で肥桶を擔ぎ歩く者さへ随分見受けるのである▲因州駒返から峠にかゝるが、これは甲州笹子峠ぐらゐの坂路で、餘り骨は折れない、因作の界は脆弱な岩を切開いて、大分古びた境界標が立つて居る、けれども是より北鳥取縣因幡國など、書かないで、從鳥取縣應十一里十八丁三十一間、從岡山縣應二十六里何丁何間とか書いてあつた▲因州河原は小さい處ぢやが酒造家が四軒ある、製紙業も大分盛で南山北嶺最も楮に富んで居るとの話▲伯州赤崎では眞宗の信者は穢多ばかりと云ふ珍

談を過日紹介して置いたが、因州の河原、智頭、作州の古町も矢張り爾うて、この古町には真言宗が多いがナ▲山陰道は一體に警官が丁寧で、無暗に威張るとは無いが、此古町も矢張り丁寧な方である▲山陰山陽兩道では犬の吠えるのが極めて少い、畿内邊で毎々吠えられて閉口した記者は山陰道で一度も吠えられなかつた、山陰では糸だて杯着て歩く者が多いからであらう、


十月十二日

播州三日月

乃伊野屋にて

古町の警察署には老實な警部が二三人居つて、頻りに殖林談を聴かして呉れた、爾うして同地の高畑展成、有元莊之助二人が殖林事業に熱心であると話して紹介して呉れた▲ソコで好奇な記者は先づ有元氏を尋ねたが不在、次で高畑氏を尋ねたが偶々來客ありて、後刻貴下の御宿まで出るとの事ぢやつた、記者は晩食後高畑氏の來るのを待たないで訪ふた▲彼の話に據れば、杉の殖林に採木法と種生法とあるが、採木即ち枝を挿すのは幾万の植付には適しない、のみならず、採木は初め十年間の成長は早いが、

十年後は種生杉の成長迅速なるに及ばない、それで杉の殖林は種生法に限るとの事ぢや▲種生の最初は密に蒔き付け、其次に疎に植付け、更に植系換へれば成長が早い、杉の質に剛なると柔なるとあるが、其實の剛いのは風などに折れ易くて不可との事ぢや▲高畑氏は古町郵便電信局長で、山陽殖林株式會社の社長をも兼ねてるさうナ、記者が歸宿して芝居見に行つたあとへ、彼はキリンビールを贈つて來たのぢやが、今朝になつて下女が持つて上つたので、飲まずに宿屋へ遣つて仕舞つた▲芝居見と云ふと、暢氣過ぎるやうぢやが、古町あたりの人が如何位の芝居を見て満足してるかを知る爲に一幕だけ見たのぢや、劇は金毘羅利生配と云ふのであつたが、其所作と臺詞の間抜加減は一生懸命に見て居る人が氣の毒に見えた、併し三錢の木戸錢と十錢の棧敷料に對して餘儀なく満足してるのでなく、心から満足してるのは、地方人の寡慾なるとが判る▲津山と勝山とは學者が澤山出て居る、記者が知つて居るだけでも、故箕作麟祥、箕作佳吉、菊池大麓、津田眞道、馬場不知妓齋、鳩山和夫諸氏がある、此他にも尙あるだらう、記者は彼處へ行つて見たいと思つたが、餘裕がないので止めた▲今日、平福で晝飯を食つたら

旦那さん智頭を立つて昨夜何處へ泊られましたと問ふた車夫があつた、此車夫は記者の寝た下座敷で安來節を唄ひ、松江大橋を唄ひ、關の五本松を唄つた男である、ソコで記者は彼に向て智頭で安來節を唄つたチエと言つた所が、彼の驚き一方ならず、妙な顔して記者の面を穴のあくほど見詰た、其笑止^{やかし}さと云つたら、ヒョットコの面も三舍を避けるばかりぢやつた▲平福から林崎までの間は、小さな圓山續きて、谷間の田畑は△の形が多い、坂路は幾回轉してゐるが、勾配は極々緩かである。

十月十三日

播州安室

六本松一間方にて

因州より作州、作州より播州、其風俗が劇然と異つて居る、因州婦女の質實儉素なるに似ず、作州婦女は絹糸入りの衣服を着け、銘仙の前垂を懸けて居る、播州へ來ると小都會の女ども何れも『妾は何よりも芝居が好きで、誰よりも俳優が好きです』と額に書いてある、男子十中の三四は鈍帳役者然たるノッペリ面で、随分一見嘔吐を催すべき者が居る▲宿屋の奴等は、出發前まで人の手紙書くを見れば入れさせますと言ひ、

草鞋買はうとすれば手前で買はせますと言ひながら、愈々御邪魔様と出掛ける時に、御機嫌ようとも有り難うとも言はない、山陰道では斯う云ふ宿屋は極々少い▲作州播州では「コンチエ」「ソツチエ」と云ふ言葉がある、これは「ソチノ家」「コノ家」と云ふ意味である、又「行かれたら」を「いけたら」と言ひ、「行きませんか」を「いきんか」と言ふ▲三日月から五里ばかり來て、龍野で梅林半子氏を訪ふた、今夜も泊れと勧められたが、前途を急ぐので早速辭し去つた▲田井へ來て往きがけに逢ひ得ざつた川口木七郎氏に逢つた、氏は此前に記者が訪問した後、間もなく二六新報を購讀し始められたと云ふので記者は九日より十二日までのを橡側で借讀しつゝ、氏の歐米漫遊談を聴き、且つ酒をグビ／＼菓子をもシヤ／＼野性を曝露して仕舞つた、併し氏は記者の天真爛漫を賞して、瑞西のコロム畫一葉を贈られた▲今日途上の小兒が、記者の吸筒を指して、アン中へ何入れとつてんやろと話し合ひ、一人が煽煽やろと言つたのを聞いた、呑牛子を評して鎮臺さんが瓢箪さげて云々と言つた小兒と一幅對ぢや▲川口氏で長談したので、此家へ着いた時は眞闇であつて、此家の小供達曰く、誰や知らん來たつた

▲叔父は姫路から歸らないが、例に依て例の如き挨拶して泊つた、土産は大社の盃と箸、

十月十四日 播州甘地 小西屋にて

故郷の山川城郭は幾たび見ても快感を生ずる、汽車で去り汽車で来る人には左程でもあるまいが、西南を指して岡山、尾道、廣島、嚴島、岩國、山口、馬關を跋渉し、更に北して萩、津和野、益田、濱田、杵築、松江、米子、鳥取を経て作州を横ぎり、逆に故郷の空へ還り来りし記者の感は如何ぞや、羨他天性少情人では無くて、憫む他の天性少情の人ぢや▲故郷の山川城廓は、明鏡の如きもので、之に對すると今日まで經過した幾多の出来事が歴々として映出する、人に對して語る所は幾分の虚飾あり、新聞に書く所は幾分の誇張あるも、故郷の山川に映ずる所は悉く眞實で、秋毫の虚飾もなく秋毫の誇張も無いのぢや、嗚呼故郷の山川よ汝は我良心の權化なるか▲從姉の煎た鹽辛さ里芋や氷豆腐、何處にか旨い所があるか、否々依然として粗い、煤けたる風呂、浴り心

地快さか、依然として快からず、糊のゴック／＼した蒲團寢心地快さか否々依然として寢心地悪し、何が故に戀々として来るか、此に映出する經過を見るとの快なるが爲め也ぢや、東京は如何、山川なきを如何せん、記者は平生、バイロンと反對で天然を愛するとの少きに非ず、人間を愛するとの多き也の方ぢやが、如何も我經過を映出して呉れる時だけはバイロン先生に同意して人間よりも天然を愛するのぢや▲斯様な主觀的數字ばかり臚列すると、樂天先生書くのが無いので胡魔化して居るなど、言ふ淺人があるかも知れない、ソコで例の通り俚歌を搜し出した、「佐良へ嫁入りすりや、長持入らぬ、コバシ擔げて葉提けて」、佐良と云ふ處は鹽俵の名所で中等以上の家の亭主は勿論細君までが鹽俵を織つて居る、コバシとは鹽俵を織る器械ぢや▲今朝、叔父の家を辭して、辻井に中山壽氏を訪はうとしたが、途中で逢つて共に其家へ行き、大社の土産を贈り椽側で茶を飲んで別れた▲姫路新聞社を訪ふて矢張り大社の土産を贈り、松田氏に町端れまで送られた▲信州上田の人で姫路に寄留して居る者と道連れになつたが、彼は姫路人、播州人、藝備人などを罵倒して計略の化身とまで言つた、其言ふ所稍詭激で、内鑑先生

の口吻に似て居るが、一二を紹介すれば先斯うぢや、例へば炭を買ひに行ても決して炭を買ひたいと云ふ氣色を見せず、他の用事にて行きたる者の如く粧ひ、先づ其地に於ける炭の相場を問ひ、己れは他の物を持つて來たのぢやが、炭を廉くして置くなら買ふて歸つても可いと持掛ける、又物を賣り歩くに正當の物を正當に吹聴しないで、松茸のメケたのは宜しいかなど、實際はメケて居らぬ物をメケたと言つて廉からうと思はせ、一たび呼込めば買はさないぢや置かぬと云ふ風である▲商人などの話し合つて居るのを聽けば、鮎や鯖の腐つたのは何程でも賣れる、シツカリした眞物を正當の直段で賣るよりは腐敗物を廉く賣るに限る云々である▲信州人の姫路觀、播州觀、藝備觀は先づ以上の如きものぢやが、記者は之を辨護して播州より三備に懸けて地狭く人多きが故に、騙し合はねば食へない、若し餘裕があつたならば、埼玉、千葉、群馬、福島あたりの様に上品に應揚になるぢやらうと言つた、酷評先生これを聽て、成程爾う言はるれば爾うでありますチニと同意した▲酷評先生に別れて、休憩所の少い道路を欠伸しながら歩くと數里、甘地の渡を渡つて奥村へ行き、作州古町で逢つた藤田某の家

を尋ねて傳言して遣つたが、某が誇つた程の家でなく、家の周圍甚だ穢くあつたので、一泊しやうと云ふ野心は消えて仕舞つた、

十月十五日

但馬生野

濱屋にて

今朝、甘地を立つて午後二時半に當地へ着いた、播州神崎郡（飾磨郡の一部も同様ぢやが）の道筋は、大抵陰曆九月九日（來る廿日）が祭なんて、何れも祭の準備に忙しい▲煤けた障子を洗つて干して居る家もあり、煤けた儘で切張して居る家もあり、鹽魚屋を呼び止めて直切つて居る主婦もあり、麴屋に向つて來るとの遅かつたのを詰つてる老爺もあり、先づ／＼顔色怡々たる方何れも豊年を喜んで居る▲關東人は關西人が鹽魚の鮓を食ふのを不思議がつて居るが、鮓や鯖の鹽物を四五日間も水に浸して十分に鹽を抜き、更に一二日間酢に浸して、其頭から尾までの間へ酢飯を詰め、箱の中隙なくギッシリ列べて、蓋の上から重石で二三日も壓迫するとチヨット旨い鮓が出来るとのぢや▲鹽鮓若くは鹽鯖と共に必ず麴を買ふのは醴を拵らへるのである、鮓と

醜がなければ、祭した氣のせぬものは此地方一體の風習である▲生野へ着いて先づ歓迎者九尾光春氏を訪ふた、氏は最早記者が生野へ来ないだらうと断念して居られた(道順が悪い爲め)ので不意打を食つた美人天上より落ちたとて歓迎せられ、一茶して直に銀山へ案内された▲該鑛山は大同二年に開坑したので、源平北條足利時代の歴史は詳かでないが、慶長元和の際幕府の直轄と爲り、明治元年十二月政府の有に歸したが、佛國から技師を聘してから大に規模を擴張し、二十九年十月佐渡鑛山大阪製煉所と共に三菱合資會社の有に歸した、▲鑛區は太盛山、金香瀨山、若林山、加盛山(神兒畑とも云ふ)の四區に別けてあるが、其坪數は、太盛と金香瀨を合せて五百九十二萬七千二百五十三坪、神兒畑及び若林を合せて四百四十四萬六千六百六十坪である▲太盛、金香瀨兩區に於ける金銀鑛採掘高は、卅年度が三百五十五萬一千四百八十五貫八百目、三十一年度が三百二十六萬三千四百六十九貫目、神兒畑若林兩區に於ける金銀鑛採掘高は、三十年度か四十五萬三千五百一十一貫五百目、三十一年度が四十二萬二千二百六十七貫目、太盛金香瀨兩區の三十年度銅鑛採掘高が二百二十四萬二千四百九十貫四百目、鉛

鑛採掘高が二萬六千二百七十七貫六百目、三十一年度銅鑛採掘高が二百三十九萬一千九百六貫目、鉛鑛採掘高が二萬六千二十八貫目、爾して神兒畑と若林兩區には銅鑛鉛鑛が無い▲産出鑛物は半製にて大阪支店へ送り、同所に屬して製煉所に於て精製し、同支店の手を以て内外人に販賣するのぢやが、昨年度に於る金の價額十四萬二千百十四圓五十二錢二厘、銀の價額十九萬四千三百二圓四十五錢七厘、銅の價額二十八萬九千二百五十八圓七十三錢ぢやつたナ▲太盛山の主鑛物は硫化銀鑛で、多少の金分を含んでゐるものは少し褐色を帯びてゐる、副鑛物は硫化鐵黃銅鑛硫化亞鉛等で、皆多少の金銀を含んでゐる▲鑿岩法、支柱法、排水法、通氣法、縱橫坑道の敷及び其延長、橫坑道の延長及び高低、坑内外の運搬、撰鑛の順序、勞働の種類、機械の種類名稱等、一々細説するに於ては數日の紙面を費しても足りない、爾うして採鑛學の片端ぐらゐる知つて居らなければ、チヨット話すとも聴くとも六ヶしいから略して置く▲但だ撰鑛は總て女工であるが、當地の女は幼時より含鑛石と捨石とを識別し得る様になつて居るから、十歳以上三十歳ぐらゐるの婦女は多く撰鑛に雇はれ、毎日六錢乃至四十錢の賃錢を得るか

ら、父兄や夫にばかり頼つて食つて居る都會婦女の比でない▲鑛山全體に於ける坑夫雑役等總て二千人近くあるが、坑夫は晝夜更代して八時間づゝ働き、他の諸職工は十二時間づゝ働き、毎月一日と十五日が休日である、本月は祭禮の爲め明日と明後日休業するので、一日十五日の休日を繰り延べた▲祭禮は屋臺など引廻して騒ぐのが殆んど年々の事ぢやが、本年は和田山村(郡役所、警察署のある)に赤痢が流行してゐるので屋臺など引廻はすとを禁止して居る▲銀山を帝室財産から三菱へ拂下げの際、七万圓下賜されたが、内五万圓は銀山町の基本財産とし、内一万圓と其他寄附に係る一万圓で生野高等尋常小學校を建築したが、兵庫縣に於ける模範的小學校である、他の一万圓は町村の共有財産にした▲恩賜金のあつた時或者は其七万圓を毎戸に配當すべしと喧しく説いたが丸尾八右衛門氏(光春氏の殿君)が大に盡力されて、其金を保存する事になつた、同氏は明治元年の町年寄より四年に戸長と改稱され、二十二年に町長と改稱されてより三十二年の十一月までの長歲月、生野町を治めた仁で、三十一年十二月二十一日に公同勤勉の廉を以て監綬章を賜はつた、本年六十八歳であるが頗る豐饒たる

ものぢや、

十月十六日

但馬八鹿

西村方にて

生野に就て、モ少し書かねばならぬ、先づ第一鑛區太盛山へ行くと、山腹に一大煙突が見える、何故に斯く高い處へ煙突を備へ付けたかと云ふに、鑛物を吹き別ける煙は石炭の煙よりも更に有毒であるから、廣く遠く飛散せしむる爲めに斯く高くしたのである▲この煙突の處から、長さ二間の梯子を三十六個降りた處は、通銅疎水であるが、通銅疎水は圓山村から金香瀬まで達する三里間て、八尺四方に造られてある、尙ほ金香瀬から神見畑まで五里二十丁間、輕便鐵道がある、言ふまでもなく鑛山専用の鐵道ぢや▲鑛山の機械を運轉する原動力は二つある、其一つは生野を距る半里許の上生野村に築てある一万坪の貯水堤で、俗にこれを馬淵貯水と謂つて居る、今一つは播州神崎郡川尻村を起點として備へ付けてある水力電氣機械ぢやが、水力電氣は七百馬力なんで、諸機械を運轉するに餘りあるものぢや、これには二十万圓を投じて居るさうな▲生野

町は近年大に繁殖して、戸數千八百三十一、人口八千七百となつて居るが、昔は一人に三合宛、一家五人なれば一升五合の扶持で坑夫を使つたので、天死する者を知りつゝ坑夫になつて居る者が多く、大抵二十内外で死んで、四十二の賀をする者は極て少かつた、ソコで女一代に男三人と云ふ諺さへあつた程ぢやが、斯く死者の多かつた爲に狭い生野に二十四個寺ある▲生野人は餘程芝居好で年に二十回位の演劇があるが劇場は眞明座、○一軒、龜樂軒ぢや▲宿屋は八軒あつて、何れも料理兼業ぢやが、大きいのは對山館と濱屋、純然たる料理屋は水月樓、柴又樓、春陽亭さうナ▲人力車は今春まで九十四五輛あつたが、播但鐵道延長して新井に停車場の出來た爲め、八十輛ばかりは彼處へ行つて仕舞つた、鐵道の終極點に人力車の需用多きは言ふ迄もない▲乗合馬車は二輛あつて、生野、城崎間を往來して居るが、十八里の道を一日に往復するのは出來ないから、途中でとまるゲナ、運送店は五軒あつて、貨物の過搬には不自由ないとの事▲藝妓は十七人あるさうで、昨夜の晚餐會に玉江、菊江と云ふ二人が來た、安來節の作り換へを唄つたがテヨット面白い、曰く「生野銀山金出る處、加盛金香瀬

太盛山、太盛山から下見れば、妾の好いたる坑夫さん、腰にや尻あて手にランプ、つかみ絞りの浴衣着て、コラサドッコイサと山のぼる」▲今朝、上島玉洞翁に圓山村まで送られたが、翁は本年六十一歳で還曆の賀宴も既にあつたゲナ、翁の從兄股野藍田翁が寄越した絶句は「媮色婉容溢似春、一家和樂見天真、賀君還曆宴仙客、並壽北堂垂白人」ぢやつたとの事▲玉洞翁に別れてから、山口、武田、和田山、養父市場を経て午後六時二十八分に八鹿へ着いた、警察署へ證明を取りに寄つた所が、一警部は「西村淳藏氏が貴下に面會したいと云ふて、ツイ其處の角の宿屋に貼紙して居る」と話した、ソコで其貼紙「二六新報社徒歩旅行記者樂天君に面會を得たし」と書かれてあるのを見、此家即ち西村庄兵衛氏方へ來た、淳藏氏は去る頃佛事を營む爲めに此家へ來て滞在して居らるゝので、至極懇切に饗された、

十月十七日

但馬豊岡

三木屋にて

西村庄兵衛氏の家は、八鹿に於ける門閥家で、代々庄兵衛の名を襲て居る、先代の庄

兵衛氏は先々代の庄兵衛氏に男子が晩かつたので、婿養子に來られたのぢやが、其後淳藏氏が生れたのである、ソコで淳藏氏は別家する事になつたが、所謂生産を事としな
い方で、終に政客となつて仕舞つた▲鳥取便の紀行には、北垣國道、原六郎二氏を鳥
取人士中に加へて置いたが、二氏は勤王家で幕府方の出石兵に窮追されたから鳥取へ
逃げたもので、何れも但馬の生れぢや、原は朝來郡佐中、北垣は養父郡建屋谷▲先代
庄兵衛氏は、一時其家を勤王家の隠れ場所に供したので、平野次郎、南八郎を始め勤
王志士は多く西村方へ出入して居つた▲但馬に勤王家の多いのは、池田草庵と云ふ陽
明學派の先生の薰陶に係るもので、先生は宿南村の青山に青巖書院を開いて居たが、塾
生が政界に奔走するを嫌ひ、北垣に破門を申付けたとがあるゲナ▲前便に書くのを忘
れたが、生野山口間の圓山村岩井村の中間なる路傍に南八郎等十七忠士の墓があつて、
正三位中將公望書とある、今日の西園寺侯は優雅で華奢で氣力が乏しい様ぢやが、當
時の三位中將は却々氣魄凜然たるものぢやつたさうで、西村家にも善く宿泊したゲナ
▲先代庄兵衛氏の未亡人は、幼時より多くの志士を見たので、好尚自ら高く、平野次

郎以下の筆蹟を記者に見せられた、現代の庄兵衛氏は嘉納治五郎氏の塾に居た人で、擊
劍柔術などの心得あり、八鹿青年の牛耳を把つて居るさうぢや▲今日午前、淳藏氏の案
内で八鹿に於ける縣立蠶業學校(兵庫縣には唯だ一つの)を參觀した、校長安藤安氏は
教諭井上伍鹿氏をして蠶業學教授の方法順序など説明せしめたが、其説明を一々此に
書けば冗漫に渉るから略して置く▲同校本年度の經費は、一万六百二圓二十四錢二厘
で内五千六百八圓が俸給、千六百十九圓九錢が雜給、二千四百六十八圓四錢二厘が校
費ぢやゲナ▲今日十一時半に八鹿を立ち宿南、江原、國府などを経て豊岡へ來たが、
九日市と云ふ處へ來ると、大山秋子氏が他の二人と向ふから來られた、言ふ迄もなく
記者を出迎へられたので、他の一人は河合杏軒氏であつた、三人で話しつゝ、豊岡へ着
したのは四時半頃で、直に由利由人氏を訪ひ、同氏の案内で此家へ投宿した▲今夜、
松和亭で晚餐會を催され、秋子、由人、杏軒、遠村、其俠、雲峰六氏が會された、何
れも適意に飲み適意に食ひ、適意に話したが、記者の健啖は、平生健啖を誇つて居ら
れる遠村、秋子二氏をして三舍を避けしめた▲記者が歸宿して、『とろり／＼と眠むた

い時は馬に千駄の金も厭や」的に快眠を貪らんとて、半睡半醒の間に雑誌「木兎」を臥床中に見て居る時、女中が一客を案内した、客は當地の紳士西垣勘二郎氏で、好意的強迫を試みられたが、肥者は同氏の招きに應ぜず、大いに愛嬌を損じた、實以て氣の毒な次第ぢや、

十月十八日

丹後久美濱

古谷屋にて

八鹿は小さい處ぢやが、丁字形を成せる道路の喉に當り、南は生野を経て、姫路、神戸に通じ、東は出石を経て福地山、篠山に通じ、東北は豊岡を経て湯島、久美濱、宮津に通じ、西は村岡、濱坂などを経て、鳥取に通じてるので、自ら貨物の匯集所となつて居る、のみならず、同地は山陰道に於て倉吉と匹敵する蠶業地ぢやから、此處に縣立蠶業學校の置かれてあるのは當然である▲出石は八鹿に比して三倍程の大さであるが、交通不便の爲め商業など餘り振はない、併し同地は銀行家として硬手健腕なる池田謙三氏を出し、學者として研究的精神に富める加藤弘之氏を出し、女子教育家と

して巖本善治氏を出し、官海に名を知られたる櫻井勉氏を出し、政客若くは辯士として櫻井駿、青木匡二氏を出して居る▲豊岡は交通の便に於て多く八鹿に譲らす、商業地として宮津に譲らない、爾うして同地は柳行李を以て鳴らして居るのみならず、養蠶も八鹿に亞ぐ位の處で、西垣勘二郎氏の羽二重工場もある▲豊岡の人物は濱尾新、和田垣謙三、河本重次郎、猪子止戈之助、岡毅、久保田讓、同貫一、同精一諸氏で、見渡したところ學者若しくは學事に縁ある人が多い、金を有つて居るのは中江種造、瀧田清兵衛、佐川義右衛門、西垣勘二郎諸氏、八鹿の西村氏と同じ様な門閥家で山陰諸藩へ遊説に來た三位中將公望卿を泊めたのは由利三左衛門氏ぢや、同家も代々同じ名を襲いて居るのぢやが、今代の主人は春雨會の牛耳を把つて居る由人氏ぢや▲今日は春雨會の諸氏と秋雨十句を課して運坐したが、記者の句は「秋雨や柿賣れ残る駄菓子店」秋雨や茶屋の軒端の拾草鞋「草鞋作る老の欠びや秋の雨」「芥焚く村に這入るや秋の雨」「二人旅を泊めぬ宿屋や秋の雨」などぢやつた▲豊岡の料理屋は、紫雲樓、魚市樓、立花樓、明月樓、觀月樓、三海士屋、出石屋などぢや、劇場は保天惠座と稱するのが一つあつ

て、毎月一回半ぐらゐの割合で興行する▲宗教は曹洞宗が重て眞宗もある、眞言宗法華宗各一寺ある▲藝妓の数は五六十で人力車の数は百を超えてゐる、けれども何か事のある際は忽ち不足するので、直に隣村から借りて来る▲今日は午後三時半に由人、秋子兩氏に出町まで送られ、陰雨冥濛暮近き時、河梨峠を踏えた、高くは無いが随分長い坂ぢや▲山人氏の紹介で當地の稻葉宅藏氏を訪ふたが、女中は紹介状を持ち小提灯を點して他出中の主人を迎へに行つた、纏て主人歸られて記者を此家へ案内された、

十月十九日

丹後峰山

中屋にて

但馬を去るに臨んで、記者が特に感謝するのは、生野の丸尾氏、八鹿の西村氏、豊岡の山利氏が、記者をして旅籠料を費さしめなかつた事である、若し諸氏の恩恵なかりせば、東方の記者勤儉なるに反して、西方記者の贅澤、濫費、不勉強驚くべしとの投書が編輯案上に堆積するであらう▲出石へ寄らざつたので、五歩一米藏氏の厚情に孤負したが、同氏に對しては、前三氏に對すると同様の謝意を表するのみならず、更に疎

懶の罪を謝するのである、豊岡の西垣勘二郎氏は前以て申込なかつたのに、突然好意的強迫を試みられたので、謹厚なる樂天も聊か意地を張つて衝突したのぢやが、よくよく考へて見れば、強迫してまでも御馳走しやうと云ふ人は、實に今世稀に見る所で、最も感謝する所である▲昨夜、久美濱へ着いて、往來の人に稻葉宅藏氏の家を尋ねたが、橋を渡つて行くと大きな家がある直に判ると教へて呉れた、所が橋を渡つて直に警察署があつたので、記者は例の證明を取らん爲めにズン／＼警察署に入つた、稻葉氏の宅を教へて呉れた人はアツ魂消て『其處ぢや無いぞ／＼』と記者を狂漢醉漢田舎漢視して心配して居つた▲久美濱の戸数は四百四十五、人口は二千百十三、人力車は三十四五、荷車二十、船は漁業及び小廻し船を合せて百七十八、荷馬は僅かに二頭、藝妓は一人もないが、二三の曖昧女があるとの事▲宗教は浄土宗が最も多く、次は禪宗、次は眞宗ぢやが、眞宗は西本願寺ばかりさうな、寺は浄土二、眞言二(信徒は極少いが)禪宗一、眞宗一、日蓮宗の庵一、爾うして浄土宗にはチヨット古い寺が一つあり、内務省からの古社寺保護金が下りかけて居るゲナ▲學齡兒童の就學は最も多い方で、男生

は百に付き九十七と云ふ割合であるから、丁稚小僧子守などが不足で、學校から歸らねば使ふとの出来ない丁稚や子守が多いとの事ぢや▲昨夜及び今朝、記者を訪はれて旅情を慰められ、且つ同地の状況を話して聴かせられたのは、山本三四郎、稻葉宅藏、同覺次郎、同喜代二、楠葉品藏、美王寅吉六氏で、美王氏は在京の知人から二六新報を毎日贈られて愛讀して居ると言はれ、懐を探つて十六日の二六新報を見せられた▲今朝、稻葉宅藏氏が山本氏と共に見えて、裏座敷の襖を開き、椽側から久美濱灣の江山舟楫を指點して説かれた、昨夜暗くなつて久美濱へ來たので、此勝景を眼下に控へて居る宿屋とは知らなかつた▲甲山と云ふのは却々形状の好い山で、櫻井兒山(勉)の松江紀行に九月六日、早起開窓、有一山頽而長、風神瀟灑、立在欄右、問之寺主、曰甲山也、との小引あつて、甲嶂新粧代老妻、蛾眉翠黛侍書帷、風神秀似君王后、態度高於晋叔姬との絶句がある、松江とは久美濱を云ふのぢや▲稻葉、山本二氏に送られ、美王氏に立寄つて新聞を返し、赤土山を眺めつゝ雨で柔かになつて居る赤土道を歩いたが、サスが京都府は京都府だけの香ひがすると思つたのは、到る處まつだけ留山の木

標が立つて居る事ぢや▲野中で鯉鮓を食つて、裏庭に梨を見たから二つだけ賣つて呉れませんかと言つたら、『なんぼでも上げますんぢやけど、かこる梨で熟なませんサカイ……』と答へた、關東人ならば熟なませんを賣うれませんと解する處ぢや、

十月二十日

丹後宮津

清觀樓にて

漸く宮津へ來た、此地が山陰道に於て、境、濱田と共に輸出港たるとは言ふ迄もない、其灣内の廣きと、チヨット類が少いのであるから、鐵道を埠頭まで敷設して、其上に港底を深くしたならば、巨艦を横着よこぢする事が出來て、伯州の境港と伯仲するのみならず之を凌駕するであらうに、底の淺いのと鐵道の無いのが玉に瑕である▲「二度と行くまい丹後の宮津縞の財布が輕うなる』の俚歌に據つて、昔の宮津が如何に繁昌したかを知ることが出来る、今日の宮津は昔に比ぶれば大に衰へて居るのぢやが、宿屋料理屋の多いのと菓子比較的好いのを見れば、尙ほ昔のなごりを留めて居るのである、併し宮津の菓子は舞鶴、峰山、福知山に較べて好いと云ふだけで、迎も松江、濱田などには及

はない▲宿屋に新聞のあると否とて、其地の進歩しつゝあるか退歩しつゝあるかを知らずと出来る、偶々進歩的地に在つて新聞を取らぬ宿屋もあらうが、津和野や宮津で第一流の宿屋が新聞を取つて居ないのは、決して有望の證據では無い▲宮津の戸數や人口は年々減少しつゝあるけれども、尙二千二百十九の戸數と一万餘の人口を有して居る、然るに昔し當地大繁昌の原因と爲り、他郷の客をして縞の財布を輕うせしめたる貸座敷は今僅に三十八戸、娼妓の數僅に六十、藝妓の數僅に四十とは情ない▲別莊は田中芳男先生外二三人のがあつて、田中先生のは大黒山と云ふ別莊で、縦覽謝絶と筆太に書いた札を打付けてある、別莊縦覽に行く人があると見える▲會社と云ふやうなもの、何れも合名で三つある、魚問屋が其の一つで、他の二つは丹州汽船會社(敦賀宮津間)と伊根汽船會社(舞鶴宮津間)である、馬車會社二つありて、各々二輛を有し、人力車は百輛内外さうな▲宮津には松岡神社と杉末神社とあつて何れも今日が祭禮ぢや、此の祭禮に藝妓仲間が芝居しやうとて棧敷を結ぶたが、警察で許さないゲナ▲宿屋は荒木、山嘉樓、清觀樓が重なるもので、後二者は料理屋を兼ねて居る▲丹

後の人物と云へば、舞鶴の伊藤雋吉、問人の松本重太郎、岩瀧の小室信夫、石川の神鞭知常四氏さうで、宮津から出て居る新聞記者は、平田(國民)、神谷(日本)、佐久間三氏さうな▲丹後縮緬とて世間に鳴らして居る中にも峰山を始め中郡一躰は厚く織るのを特色とし、宮津を始め與謝郡一躰は薄く織るのを特色として居る▲成相山上から天橋を見るなどは月並的ぢやから止にして文珠の方で和泉式部の墓を吊し、六厘の渡賃を出して切戸を渡して貰ひ、橋立の松の下なる磯清水都なりせば君も汲見ん(和泉式部)橋立や松を時雨の越えんとす(蝶夢)など誦しつゝ、忽雨忽霽定りなき空を仰ぎつゝ、松下沙上を漫歩し、打ち寄する碧濤が此低く狭き天橋を崩して仕舞はないのを不思議に思つた▲文珠の切戸は、陸續となつて居たのを、明治六年排水の爲めに再び切斷したのぢやゲナ、

十月廿一日

丹後舞鶴

靜壽軒にて

今朝、丹後新報社を訪問し、社主佐久間丑雄氏から宮津の概況を新報社の店頭で聴取ら

うとした所が、氏は微笑して「爾う性急に遣られては談話も何にも出来やせん、先チヨット其處まで出掛ましよう」とて、灣頭の江山無盡樓と云ふのへ記者を伴ひ行き、樓上に坐して成相、文珠、橋立の諸勝を對岸に指點し對酌しつゝ種々の材料を與へられた▲聽て同新報記者島谷資規氏も見え、三人鼎坐且つ飲み且つ話したが、記者は酔の廻りかけたのを機に十時半頃辭し去た▲宮津旭橋の際に「舞鶴要塞地區」の第一號標が立つて居る、少し歩いて波路町に例の通り「此ヨリ内許可ナクシテ海陸ノ形狀ヲ測量摸寫撮影録取スルコトヲ禁ズ犯シタル者ハ法律ニ據テ處分スベシ」と揭示してある▲聽て撥雲洞と云ふ二丁ばかりの隧道を通つたが、東の口には農商通利と刻してある▲由良村の海岸は、怒濤に嚙斷された崖や小山が二つ三つあつて、其斷崖絶壁は累々層々積み重ねたる岩石のやうに、宛然不規則な石垣である、爾うして碧波洶々として巖根を洗ひ去る勢は壯快無比で、天橋が女性的絶景ならば、此處は男性的絶景である、此あたりは由良の戸と稱するので、賀茂季鷹の「由良の戸や渡る舟人楫をたへ」云々の和歌があるのぢや、和歌通の香牛君が此處へ來なかつたのは残念である▲由良で菓子

を食つて、亭主に「此菓子は舞鶴のか宮津のか」と問ふた所が、亭主は誇顔に「舞鶴にヤ、テント好いのがオ、ヘン、内ぢや宮津ばかりておます」と答へた▲宮津は料理と菓子だけを名残りに沈睡しつゝあるが、之に引換へて舞鶴は旭日昇天の勢を以て、日々に膨脹しつゝあるのぢや、從來、横須賀、吳、佐世保の三鎮守府だけで、日本海には一の鎮守府もなかつたが、今や日本海に於る唯一の鎮守府は工事殆ど竣り本月一日を以て開應され、司令長官東郷平八郎氏は十六日を以て來着され、愈々天長節當日を以て開應披露の盛宴を催し、同日より三日間の祝祭を催す筈で、舞鶴町民は歡喜雀躍して其準備に忙しい模様である▲鎮守府は餘部に在つて、當西舞鶴を距る一里半、倉梯と云ふ處は、當地及び餘部と鼎足の形に爲つて居るが、此處に新市街が出来つゝあつて東舞鶴と稱して居る、所が門司の秋田某と云ふ者は、數年前から此處に新市街の出來るとを願ぎ付けて、倉梯の農民共を欺き土地を買占めて仕舞つた▲舞鶴に於ける物價は俄に騰り出した、水産物の如きは從來輸出の位置に在つたのが、頃日却て輸入の位置に立つ有様になつた、遊廓は宮津の株を奪つて、貸座敷六十戸、娼妓百五十に上り、

藝妓も百二十ぐらゐる居る、人力車は西舞鶴だけで百三三十輛さうナ▲宮津も舞鶴も極々宗教に冷淡な處で少壯者ばかりでなく、爺さん婆さんでも寺参りは、祖先の法事と盆正月位である、宮津の寺は淨土宗、曹洞宗、眞宗で耶蘇教信者と稱する者(眞に信者と云ふ程でない)は新教七八十名、天主教三四十名、希臘教二十名位との事▲今夜舞鶴新報社主眞下秋嶺氏を訪ひ、此家へ案内され、同氏及び逸見基氏、木崎浩三氏に訪はれて旅情を慰められた、

十月廿二日

丹波綾部

上田方にて

丹波丹後は宿屋氣質の上品な處である、茶代を遣ると遣らないに關らず、丁寧に道を教へ丁寧に次の宿屋を教へ丁寧に送り出す方ぢや、悉く爾うは行くまいが、丁寧に方が過半を占めて居る▲同志社生徒旅行隊が、一昨夜は宮津の筆屋に泊り、昨夜は舞鶴の山喜に泊まつた、今夜は小濱に泊ると云ふのぢやが、チト六ヶしからう、紀行など書くので無いから、朝晩は記者等より善く歩けやうが、共に歩いて見るのに記者より遅

脚である、如何して十二里ある小濱へ着けるものか、今夜は多分本郷あたり泊つたであらう▲今日は小山と田圃ばかり眺めて無趣味な路を歩いた、今年は何處も豊年の様ぢやが、丹後は浮塵子の害が甚だしかつたさうで、甚だ不作である、ソコでまだ青い稻を刈て居る向もあるが、農夫に向つて收穫の如何を問ふと「テントあきまへん」と言て居る▲當地の産物は養蠶が重て、生絲郡是株式會社は昨年の産額二千四百六十四貫さうナ、他に生絲賣買を業として居る由木田合名會社あり、又た並松木材合資會社もある▲羽二重を織る工女は大抵當地の者ぢやが、教師は前橋から來て居る人さうナ▲宗教は禪宗、眞言宗、日蓮宗、眞宗ぢやが、眞言の中にも臨濟宗と云ふのが一番多いさうナ▲學齡兒童の就學者は九分六七厘ぢやさうナが、學校から丁稚の歸るのを待つて居ると云ふ程では無いらし、

十月廿三日

丹波園部

滋賀家にて

綾部は福知山へ四里、舞鶴へ六里ぢやから、チヨット便利な地の様にも思はれるけれ

ども、舞鶴、福知山間の道路は別にあつて、其方が道が好くて近いのぢやから、綾部に用事の無い人は、ワザ／＼立寄りない▲ソコで綾部町民は僅に生絲だけで餘命を繋いで居ると云ふ鹽梅ぢやから、生絲以外の會社や銀行はドシ／＼倒れて仕舞ふのである▲宿屋の女中が話すには、藝妓は京都の古手ばかりであす、以前は大分仰山おしたが、銀行騒動がおしてから俄に減りまして、今日は十人とおへんわ▲成程爾うでもあらう、銀行會社などが振はないでは、藝妓を聘げて散財する者が無い、地方の小都會では銀行員會社員の外に散財でもしやうと云ふ人は無いから▲今朝、宿屋で栗を煮たとてドンブリに入れて持つて來た、取つて日數の經たない栗で却々旨かつたが、出立を急いだので二三個しきや食はざつた、山路へかゝつて退屈ぢやつた時、あの栗を紙に包んで持つて來れば宜かつたなど、意地穢いとを考へた▲山路と云へば、綾部から園部へ來るには四つの峠を越えるのである、園部へ近い處の峠は何でも無い都人士の足だめし位なものぢやが、七山峠、大原峠、檜峠の三つは、随分險峻な方ぢや、中にも檜峠は四分板を二十枚ほど付けた馬が苦しげに登降する險路である▲七山峠と大原峠の中間に大

原と云ふ小驛がある、戸數僅かに四五十軒で、宿屋はあたらしや、うをやの二軒だけあり、記者が休んだうをやに大粒の立派な栗を一斗五六升ほど荷籠に入れて居たから、此栗はなんぼ位の直段ですかと問ふた所が、一升七錢です、京都では一升十五錢にも賣れるさうですが、運賃が高うかゝります依て……先日京都の中學校の御方が多勢さん見えまして此栗を三斗買ふて歸なりましたと、山家なりに京都辯喋々妮々▲大原驛も昔は田邊(今の舞鶴)宮津等の藩主が通られたので、宿屋が十軒餘りもあつたさうぢやが、今日の寂れやうは實に酷いもので、應て消滅して木挽小屋ばかり残りはせぬかと危ぶまれる▲大原から大原峠と檜峠を越えると、三ノ宮村へ出るが、芋、大根、焼豆腐の副食物で食つた晝飯は旨かつた、主婦は頻りに米の黒いのを氣にして、冷飯ならモ少し白いのがあすと言つたが、記者は黒い方が旨いとと四碗食つて除けた▲三碗で止すだらうと思つて、道路に人と立話して主婦を呼びモ一碗と言つたので、案外と云ふ顔色して居つた▲先刻、園部警察署へ寄つて、例の證明録を出した所が同じ處を幾度も廻らるか、七月二十八日に龜岡へ見えて居るではありませんかと問はれ

た、それから記者が東の方の男は最早歸京したてしやうと口を滑らしたので、競争と云ふのではありませんかとて、記者の遅いのを怪むと云ふ様子ぢやつた、ソコで脚の遅いとは言はないて、拙者の方は調べる事があつたのでと胡魔化した、それから京都からの終列車は何時に着きますかと問ふた所が九時頃と答へて置いて、貴下は徒歩ぢやさかい必要がないてしやうと反問された、これには胡魔化さないても偏強の理由があるので、實は京都から尋ねて来る人があります、當署へ聞きに來たら、滋賀家か合羽屋へ泊つたと教へて下さいと頼んで置いた、

十月廿四日

丹波龜岡

改開樓にて

今日は朝から曇天で懸てポツリ／＼遣て來た、九時頃から船井郡役所へ行く積りぢやつたが、雨天に草鞋で役所へ行くと解いたり穿いたりか面倒で耐らない、のみならず記者は今日待つてるものが二つ三つある▲第一は電報、第二は在京都の友人、懸て電報も來た京都の友人も來たが、モ一つの物は正午にも來ず午後一時にも來ないので二

時に郵便局へ問合せに行つた、スルト「へい爾う云ふものは來て居る様ですが、特別配達の手續がして無い依て尙配達せずにあります」とイト冷かに答へた、ソコで記者は「特別配達料は拙者が出す」と言はざるを得ない、局員曰く「貴下では不可、差出人が出さなければ……」と斯くゴテ／＼言つて居つたが、懸て特別の取計ひを致しませうと記者の懇願を容れて呉れた、誠に早や有り難いとて▲在京都の友人後藤貞吉氏は、記者が出發の際、信州まで送つて呉れたのぢやが、今日は又た記者が圓部に宿泊したとを知つて態々尋ねて呉れた、實は昨夜の終列車で來る筈であつたのが、仕事の都合で乗り後れたと▲彼の靴音が橡側で止まり、記者が障子を開いて微笑した時は、如何に嬉しかりしぞ、信州の松本で別れる時は情婦にても別れる思ひがしたのぢやもの(薩摩隼人は曰はん臭いぞ／＼)▲午後二時半、記者は酔臥してる彼を起したが、彼は記者の靴を肩に掛けてズン／＼出掛けた、共に八木まで行くとか、龜岡まで行くとか言つたが、記者は彼が明日の仕事を妨ぐるを恐れて、圓部停車場前の茶屋で靴を奪ひ返し、彼を瀛車へ乗らして仕舞つた、爾うして雨中獨行の我は秋の雨を淋しくは感じなかつた、

二兩日中若くは十日以内に更に彼に逢ふとを得るとが判つてゐるので▲龜岡警察署の門は二度くゞつた、この警察署は記者が出發以來最初に入つた警察署で、其時は單に證明を取る爲めだけぢやつたが、頃日では多少の材料を取るとになつて居るから二度入つたのぢや▲同警察署で聞く所に據れば、龜岡には藝妓が二十三人居る、人力車は鐵道の無い時に二百輛以上あつたが今は百三十輛が少し缺けてゐる、狩獵税が高くなつた爲めに本年は出願が少いが、今日までに乙種三等が三十九名、乙種一等が一名、甲種二等が一名さうナ▲龜岡は今明日が氏神の祭禮なので、戸毎に紋付若くは鳩二羽を畫いた大提燈を吊して居る、明日晴天ならば御輿と山車を挽き歩くゲナ▲檜山以東は車夫の性質が善くない、車を勸めると謂はんよりは、客を冷嘲すと謂ふが正當ぢやらう、昔しは嗟來の食と云ふがあつたさうぢやが、今は嗟來の車がある、記者は幸に斯る車に乗る必要が無い▲八木と云ふ處は、桑酒櫻酒を醸造するので、記者も試に一杯飲んだが、チヨット飲口は甘くて後で藥のやうにチヨット苦い▲山本煙草と云ふ看板は到る處に見受けるが、純粹の山本煙草と云ふので無く、他處の煙草に山本の地名を冠し

ただけてある、山本は昔こそ煙草の産地ぢやつたが、今は餘り作らなく爲つて居るとの事、

十月廿五日

山城伏見

後藤方にて

昨日の陰雨に引換へ、今日は一天拭ふが如き好晴である、龜岡の若者共は狂喜雀躍して揃ひの襦袢(松子染)に、揃ひの兵兒帶(白縮緬)を後にダラリと締め、揃ひの頬被りして、揃ひの足袋跣足を荒縄にてチヨット縛り、御輿を擔ぎ花車を引廻るは可いが、花車に載せられた少年や子供が人形然として舞ひも踊りも太鼓たゞきもせぬので間が抜けて居つた、尤も記者の觀た時は御輿や花車の出掛けぢやつたから、追々曲藝を始めたのかも知れない▲篠村を過ぎて王子橋を渡り山家屋の前を通つたが、家族三人とも店頭に居つて、マアお休み成され御歸途ごかきでおすかと挨拶されたのでツイ立寄るとになつた、此家の娘さんは田舎に珍らしい美人ぢやが、態まも風も構はずに百姓片手間の下女代りとは惜いものぢや▲老坂の隧道を通り抜け、大枝過ぎて檜原近くなると、最早京

都が見えて居る、見えては居るが、爾う急には足が運ばない、桂村で晚い晝飯を食つたが、店の穢い割合に飯が良い、但だ其副食物を一錢五厘、二錢、三錢と皿に盛別てゐるので聊か興が醒める▲小さな飯櫃に盛つて呉れた飯を平けて、副食物は三錢のを一皿と鱈一尾食つた▲四時に此家へ着いたが、友人は出勤先から歸らない、二十三、四兩日の二六新報が机の脇に在るから、先づ我紀行を読み、次に呑牛先生のを読み、其次に血達磨先生のを読み、それから雜報に移つた、これが記者近來の讀新報法なんで、決して今日に始まつたのでは無い▲何時の間にか酒が來て居たので、獨りでぐびぐび遣り始めた、あたりは暗くなつたが老婆さん灯を點さない、闇中に飲んで居る、食つて居る、上つて來たのは婆でなく男である、友人に相違ないと思つたが、何とも言はずに下りて行た、彼は灯を點し來つて初對面の挨拶をしたが、闇中に飲食してゐる我に驚いたのであるとの話、始めて友人の同居人と判つた、

十月廿六日

京 都

龜屋にて

山陰山陽兩道をチョット通つて、直に比較して見るなどは餘り早まつた次第ぢやが、著しい點だけを列擧すると、斯うである、先づ山陰道を概評しやう、(一)地僻にして吏驕るの跡あるに關らず山陰道の警官は驕らないで善く人民と親和して居るのが多い(二)人に接し客を饗するのは濃厚な方であるが時として酒食ばかりを御馳走と心得て居る様に見ゆることがある、(三)一體に時間と云ふ觀念が乏しくて、餘り必要のないのに長座長談することが多い、爾うして秋季になつても晝寢する者が澤山ある、(四)書畫骨董などの嗜好は比較的進歩して居る方で、宿屋の硯箱や筆墨が佳いやうである、伯耆出雲は、茶の湯、生花など遣る者が多い、(五)遲鈍の如く見ゆるけれども、學術を重んずる方で、随分進歩的精神に富んで居るから、米子の菜肉冷蔵は三府に先ち、倉吉の生絲は三縣(長野群馬福島)より質が好いのである、(六)因伯但は自信自尊の念に富んで居る人が多いので、時としては自己の缺點までも自慢してゐる様に見ゆるとがある、雲石二州は自慢もせず、競争もせず、事業に左程熱しない、癖のない馬のやうぢや▲山陽道は如何であるか、(一)山陰道に較べると、多島海を受けて山水明媚なるに關ら

ず、人事が餘程殺風景である、生活の困難な上に虚飾を張るので、生存競争が甚しい、(二)其虚飾たるや衣服飲食に限るので、書畫骨董を玩ぶ餘裕が無い、宿屋の筆墨などは、一向ヒロイ物で、佳い物を出して置いたら盗まれて仕舞ふだらうと心配してるかの様ぢや、(三)生存競争の甚しい爲めに、大概今日主義で、學術を應用して永久の利益を計る者少く、目前を胡魔化して居る者が多い、(四)冷遇する様に見せかけて厚遇し、大きく吹聴して小さく出たり、所謂虚々實々の偽略に富んで居ると一部の土佐人と相近い、(五)掛引に長じて居ると同時に、器用な方で工藝などに向きの好い方である、皮相文明を最も早く造り得る者は山陽道人の特色で、キザ、ハイカラ、ヘナチヨコなどは山陽道に最も多い、(六)併し山陽道人は冷靜な方でなく、感情的の者が多いから、時々常識以外に逸脱する、常識以外に逸脱しながら、尙ほ利害の念を離れないのが山陽道人の特色である▲中國概評も先づ此位にして置いて、今日の事を少し書かねばならぬ、今日は伏見の後藤方を立つて、京都へ来たのである、京都日々新聞社を訪ふて吉田精一、井口彌男造、森正太郎、日野春翠四氏に逢ひ、日出新聞社を訪ふて、

中川霞城、今枝秀也二氏に逢ひ、京都新聞社を訪ふて、堀江松華、南部英太郎其他諸氏に逢ひ、大阪毎日の支局を訪ふて梁田政藏氏に逢ひ、大阪朝日の支局を訪ふて、若松永胤、権藤四郎介、山田茂諸氏に逢つたが、今夜は朝日、毎日兩支局の諸君が記者の爲めに晩餐會を催され、朝日は若松、権藤二氏、毎日は梁田氏の外に、來島武彦、鶴崎熊吉二氏が會された、何れも經驗に富める記者なので、紀行の書方、材料の取方等に就き、種々注意を與へられた、爾うして來島氏は最も記者の健啖に感服せられた▲龜屋主人は機敏なる耳目を以て、何處よりか記者を捜し出して、トウ／＼擒にして仕舞つた、爾うして誇つて曰く、朝日の記者さんより拙者の方が早く貴君を捜し出した▲今日午前九時半に府廳を襲ふたが、高等官は誰も來て居らなかつた、午後又襲ふたが、最早退廳して仕舞つて居た、今日は半屯てと聞いて、土曜日さへも忘れた我は暢氣過ぎるのであるか、忙し過ぎるのであるかと、我自ら我を怪んだ、

十月廿七日

江州瀨田

松屋にて

京都の空気が松江の其れと同じく催眠的である。けれども京都に於ては、電車あり、其汽笛、其煤烟、其輪聲に依りて、晝夢屢驚かざるは、誠に餘儀ない次第である▲京都の特色とも謂ふべきは、秩序齊整に過ぎて階級餘りに嚴、主人は坐つて食ひ雇人は必ず腰掛けて食ふ事と、丁稚小僧の頭が襦袢を戴いて居るとちや、十四五にもなつて襦袢を戴いて居るのは誠に變挺なものである▲今の所謂紳士紳商達が宿屋で茶代を拂ふのは大抵初めに出すが、京都の宿屋中には、如何に其茶代に對する待遇を爲さんかと心配しつゝある向が多いとの事ぢや、成程これは爾うなくてはならぬ、如何なる待遇を爲すかも判らぬ内から茶代を遣つて後から茶代に對するだけの待遇が無かつた杯とコボさるゝのは、宿屋にとつて迷惑千万であらうから▲京都の言葉はオ、スとオ、ン、居やはる、仕やはる、仰山など著しく聞えるが、一查公に向ひ此邊に警察署がありますかと問ふた所が、京都に警察署がありますかとでも聞き違へたのか「あるとも仰山ある、何處の警察と言はな判らへんがと」空嘯いて居つた▲宮津とか舞鶴とか云ふやうな處は、チヨット一警察署で、全体の人力車、藝妓の數など調るとが

出来るが、京都、大阪のやうに幾個の警察署ある地では、チヨット調査が面倒であるが、藝妓はザット斯うである、祇園甲部では、藝妓四百九十三、娼妓百二十八、祇園乙部では、藝妓九十、娼妓五百二十九、先斗町では藝妓二百六十五、娼妓三十九、宮川町では藝妓百二十五、娼妓二百七十、鳥原では藝妓三十四、娼妓三百三十一、上七軒では藝妓五十三、娼妓三▲人力車の數はチヨット判らぬが、一万が少し出るだらうとの話▲京都は言ふ迄もなく、松茸の本場であるが、今年は少しハツレの方で、八百屋の店頭に餘り溢れて居らぬ、隨て直段も随分高い方ぢや▲「他人ムケない、クラゝは苦い、水は冷たい淀川の」てふ俚歌の通り、京都人は一體に冷淡な方で、宿屋など一人の客を泊ないと云ふ習慣がある、所が龜屋の主人は、他の宿屋で断られた客を泊て殊に丁寧に扱ふので大に之を徳として居る役人などがあるケナ▲今日、京都日々新聞社の吉田精一氏が晝餐を共にすると、西洋料理發靜軒へつれられた、皿數が多いためサスの健啖先生平げ盡さざつた、發靜軒主人は至極淳朴な男で、記者に林檎數個を呉れた、油濃の料理食つた後口には詭向の品なんて、有り難く頂戴した▲後藤

貞吉、上野勇輔二氏外一二の人々記者を大津まで送らんとて、龜屋へ尋ね來り蹴上^{かきのぼり}で待て居ると言つたさうぢやつたが、吉田氏に送られて蹴上まで來た、記者は諸氏に逢はざつた、尤も雨の落ちさうな天氣なので中止したのかも知れない。

十月廿八日

江州水口 萬屋にて

江州の交通機關が整備してゐることは、草津、米原の二大停車場ありて、東北は岐阜、大垣、福井、金澤に通じ、東南は津、名古屋、四日市、上野に通じ、西は京都、奈良、大阪、神戸に通じ、金澤を除くの外は、汽笛一聲半日程を出てないのを見れば判る、况や船を以て湖上を縦横し得るに於てをや▲今は昔し、井伊掃部頭は三十五萬石の彦根に據り、本多隱岐守は六萬石の膳所に據り、加藤越中守は二萬五千石の水口に據り、堀田豊前守は一萬三千石の宮川に據り、一萬八千石の市橋下總守は仁正寺に據り、二萬石の分部若狹守は大溝に據り、一萬三千四十三石の稻垣安藝守は山上に據り、一萬石の遠藤但馬守は三上に據て居つた▲彦根の大溝たるとは言ふ迄もないが、膳所と當

地(水口)は五十三驛中に名高い處ぢや、所が今や膳所は繁華を大津に奪はれて瀬田の唐橋唐金擬寶珠のみ空しく存し、水に映る膳所の城は見るとが出来ない▲瀬田へ廻れば三里の廻り、ッザ／＼瀬田へ廻つた爲めに三里の廻りとなつたのみならず、今日は暗劔北と云ふのに瀬田から北の方草津を指した爲めだか、果然妙な事があつた、草津警察署で名刺と證明録を出すと、十分ばかり経つて署長様に喚ばれた、署長様の室へ推參すると、巡查が當警察署長閣下だと恭しく紹介して呉れた、記者は恭しく禮拜して椅子を與へらるゝを待つて居つた、新聞を見ながら待つて居つた、署長様は椅子を與へらるゝ前に訊問を始められた、貴下は如何なる目的を以て旅行して居るか、此證明録は通過證明録とあるからには單だスリット此町なら町を貴下が通られたとを證明するのでありますか、斯くて記者は一々答へつゝあつたが、矢張り新聞を見て居つた、署長様は唐突^{かたじけなく}に貴下は禮を知て居られる乎と問れた、記者は野人禮に嫻はず候てふキマリ文句を忘れてドギマキして居た、署長様は「抑も新聞記者は社會の木鐸である、拙者が職務を以て御尋するのに、新聞を見ながら片耳で應答せられるとは何事てしや

う、斯ても禮を知れる紳士と云へまじやうか、社會の木鐸と云へまじやうか、拙者は斯る方に證明してあげるとは出来ませぬ」と大々の威嚴を示された。ソレで記者も黙つて出るのは腹の虫が承知しないから、「各府縣廳各警察署では必ず倚子を與へられましたが、今は倚子を與へられず何か詰問せられる様に感じたから、新聞を見て居りました、草津警察署の證明がなくても困りませぬ」と言つて、ズン／＼出て來た、後で考へて見るのに署長さんと衝突するやうでは修業が足りないのぢや▲水口は山が近いので、年々狩獵の出願者の乙種三等だけで七八十名あるのぢやが、今年は未だ二十名しきや無い、これから追々出て來るに相違ないが、狩獵税が倍になつたので、今年は例年より少なからうとの事▲藝妓の現在數二十二、娼妓の登錄數二十三ぢやが、内三名は逃亡、三名は入院中で、現に店へ出る者は十七との話▲當地の米は、江州米の中でも上位に居るが、當地のみの名産は籐細工で、盛進株式會社と云ふのが有る▲當地から出た知名の士は、巖谷一六翁と山縣悌三郎氏さうな▲丹波から山城、山城から近江は言葉が大抵相似て居る、オーキニと長く大きく聲出して有り難うを小さく短かく

消えさうに言ふ癖がある、時としては有り難うを言はずにオーキニオーキニだけ言ふ者が有る、「賣てある出來てある」などのてあるがタール／＼と恐しく耳障りになる、「メッソウもない」は上方一體に通じて行はる、言葉ぢやが、殊に城州江州に多い▲昨夜雨を衝て、ワザ／＼瀬田の長橋を渡り湯屋へ行つたが、伯州橋津の宿屋で經驗した如く、宿屋の女中が相合傘で行くだらうと思つたに、彼は記者に番傘を與へ、自分は蛇目傘を差して案内した、

十月廿九日

勢州關

會津屋にて

『坂は照る／＼鈴鹿は曇る、あひの土山雨が降る』てふ俚歌には、誠に長閑な暢氣な春雨時分の氣象が溢れて居るが、今日は土山も雨、鈴鹿も雨、坂も雨で、帽子やツボンを通すもの冷かに、草鞋や足袋を浸すものは更に冷かであつた▲今郷と云ふ處で、四五の鼻垂小僧が遊んで居たから、水口で買つて來た五錢に二十個の大福餅を遣つた、オイ／＼と呼ぶと皆恐ろしがつて逃げやうとしたが、靴から出した竹皮包を見て傍へ

寄つて来た▲市場と云ふ處で、母親の背に負はれて居る四歳ぐらゐの子供が、記者を指して「コジ〜」(乞食々々)と呼んだので、其母親が「左様なと言ふと叱られる、眞葉さん〜」と教へて居つた、其隣家の主婦さんは大笑ひで、「子供てふもな遠慮がない眼前に彼様なと言ふて……」且つ愛憐し且つ訓誨して居つた▲鈴鹿峠へかゝつたのは午後二時であつた、去十八年一月廿一日に越えた時は屹立して居る部分があつたが、今は勾配を緩かにして車が通る、けれども東の方は矢張り勾配が急で、車夫から乗客に何卒此處だけ下りてつかさいと頼まないでも、乗客の方で險呑がつて下車して遣るやうな處が多い▲東坂は險路だけに奇景がある、巉巖の上に數本の松檜雲を帯びて立つてる處もあり、對面の峯嶺雨未だ收まらずして樵家の炊烟亂れ上る處もあり、深遠靜寂、人をして仙境に近きを感じしめる▲十八年二月に鈴鹿を越えた日も雪催しの陰氣な空合、今日も秋雨冥濛で陰氣、鈴鹿嶺と我れとは何の因縁で雨雪に遭ふのであらう歟▲坂下で車を勒める老翁があつて、關まで歸るのだす、ナンボでも思召て宜しい二錢でも三錢でも宜しいとて、うるさく跟いて来た、ソコで二錢や三錢なら車に乗らなくても

遣る、拙者は車に乗ると罰金取られるのぢや、ナンボつて五圓の罰金ぢや、罰金の百分の一、五錢だけお前に遣るから空車輓いて歸れとて、白銅を彼の前へ突付けたが、彼は旦那さんそれでは勿體ない〜とて取らずに逃げて行つた▲此家の座敷に、巖谷一六翁の書を襖にした室がある、四枚とも五言絶句ぢやが、其一枚に「秋風客衣冷、故不賦歸來、山中酒新熟、籬下菊方開」とある、起承二句の意味は記者の今の境遇に近い、但だ承句の歸來二字は去の字を抜たので語を成ない様に思はれる、▲關町の戸數は二千二百四十七、人口は一万八百九十九、宿屋の重なる者は會津屋、玉屋、團扇屋、料理屋の重なる者は伊賀清、折萬、菓子屋の重なる者は深川屋、此深川屋の「關の戸」てふ菓子は名物の一つで、加茂季應は「ふりし名をこゝにとりめて鈴鹿山世に音高き關の戸のもち」と書いて與つて居る▲關町は其昔、諸侯の參勤交代の際、交通頻繁なる上に雨に休み風に休む習ひで、女郎買ひと賭博は雲助仲間の最大快樂、東で小田原、西で關と並稱さるゝほど繁昌したのぢやが、今は中國や北國の伊勢參宮ぐらゐを相手に、漸く烟を揚げて居る宿屋が多い、女郎屋の如きも昔の十分の一と爲り娼

妓の數僅かに三十六、藝妓の數僅かに十三、密賣淫は平生餘り無いが、春季道者の通行する際は多いとの事ぢや▲道者と云へば、山陽道の道者ほど人の悪い者はない、殊に三備が悪い、淺黄の股引を穿いて、小さな行李を手拭か三尺帯で斜めに背負ひ、十人乃至三十人の一群に必ず二人乃至五六人の女を雜へて居るのは、問はずして三備の道者と判つて居る、其來るや先づ宿料を問ひ、四十錢と言へば、二十錢ぐらゐるに直切り始め、二十五錢で辨當つけてつかさいと出て來る、何卒三十錢でお泊り下さいと頼むと、了んく行かうくと出掛ける、ソコで宿屋の主人は大將チョットお待ち下さいと呼び返し、二十五錢では如何しても規則(勘定)に合はぬ、二十八錢でお泊り下さい、其代り大將の宿料は貰はぬと遣付ける、大將ナカく横着者で二三丁先へ行つて居る同行者を呼び、談判が出来なくと居る、總ては無いが三備の道者は先づ斯様な者ぢやさうナ、のみならず、彼等が立つた跡で座蒲團が紛失したり、床の間の置物や掛物が影を隠すことは珍らしくは無いケナ、三備に次て何處が悪いか、言ふ迄もなく播州、作州、藝州ぢや、長州の道者は襟に〇一印を縫ひ付けて居るが、宿

屋の競争しない山陰道を通つて來るので、上品であるとの事▲關町の宗教は、禪宗、眞宗、浄土宗が對立して居つて大抵同數である、

十月三十日 勢州津 聽潮館にて

今朝、會津屋を出ると直前に地藏堂が見えた、關の地藏とて有名なものぢやが、最早餘程荒廢して居る、開帳一人ならば三錢、二人以上ならば二錢宛とあつた様ぢや▲警察分署へ寄つた、玄關硝子戸越しに見えたのは、厚さ一寸五分乃至二寸位の帳簿五六冊で、其裁口にあいづや、たまや、うちわやなど記してあつた、表紙は見ずとも宿泊簿に相違ない、其中の一冊は昨夜我手を觸れたものである▲警部から種々の材料を得て警察署を出たが、五六間歩くと深川屋と云ふ菓子屋で、例の關の戸餅を賣つて居る、十錢の折を呉れと注文すると、十錢のはありません、六錢、九錢、十五錢ですと小僧が言つた、ソコで九錢のを買つて龜山町へと急いだ▲伊勢街道は關から直に津へ來るのぢやが、記者は龜山をチョット見たいからワザく寄道したのぢや、忘れもしない明

治十八年一月記者は龜山まで来て旅費が盡きて、ソコで古着屋へ入り所持の着物を賣うとしたが、旅人から古着を買ふのは警察で八釜しいからとて、古着屋の主人は記者を警察署へ同道した、警察では旅人が古着などを賣るには證人が入用から、今夜四日市へ泊るならば宿屋の主人を證人に頼むが可らうとの事ぢやつた▲今日龜山へ廻つたのは當年の古着屋が依然としてあるだらうか、當年の警察署が依然としてあるだらうか、當年の警部が依然として務めて居るだらうか、と云ふ好奇心も幾分かあつたが、龜山町の概況を警察署で聞かうと云ふのが重なる目的であつた▲纏て龜山へ着き警察署を襲ふたが、十數年の昔し道路の右側にあつたのが、今は左側で而も丁字街の角になつて居る、當年の警察署に較べるとチョット三倍の大さで、當年の警部は今でも居るか如何だか會つた所で判らない▲龜山町の戸數は千六百五十、人口は七千四百六十七、重なる産物は、繭、生絲、茶で、宗教は眞宗が多くて次は淨土宗、學齡兒童の就學は多い方で、例年の狩獵出願者は乙種百五十名ぐらゐる、藝妓二十二名、娼妓四十三名、密賣淫は少いが賭博は随分盛んに行はれるとの事▲龜山町より停車場の少し東を踏み切

り、棕本新田へ出て、それより松林中の伊勢街道を歩いた、松林は高野尾と陸合むつみあひとの間に丁り、纏て一身田に着いたが、此處で觀るべきものは高田山專修寺である、其建築の莊嚴にして古雅なる、山門の鴨居に菊葵の藏釘かくぎを打てる、觀る者をして先づ美感を起さしめ、次で信念を生ぜしめる▲七時當市へ着き、伊勢新聞社を訪ひ、加藤三郎、櫻木謙二、生浦慶成三氏に逢つたが、生浦、櫻木二氏は記者を此家へ案内された、一浴して饗されつゝある時、見えたのは伊勢新聞社主松本恒之助氏で、百方旅情を慰められた。

十月卅一日 勢州津 大觀亭にて

今日は生浦慶成氏の案内で縣廳、公園、拙堂屋敷跡などへ行つた▲古莊知事は師範學校へ行つたとかで、書記官森正隆氏に會ふとなつた、彼は手紙を認めつゝあつたが、チョット御免と急ぎ認めつた、彼のテーブルには既閱、未閱、至急の三箱（菓子屋の饅頭箱然たる箱）に書類を堆積し、箱以外にも雜書を置いて居つた、其雜書中に「一

年有半」があつたので、最早讀了りましたかと問くと、公務の隙に大抵讀んで仕舞つた、過日書肆へ續編を買つたら着荷早々買切れたさうで……と話し、今日の新聞で見ると中江先生危篤との事です云々▲記者が三重縣に於ける重なる産物の産額と價額とを聞きたいとの注文に應じて、彼は第四課長を喚んだ、第四課長は昨年分の三重縣勸業年報を呉れたが、それに據つて百万圓以上の價額だけを舉げると、米が千三百八万六千二百六十一圓、麥が百六十九万九千五百三十七圓、清酒が二百二十八万六千九百九十圓、紡績綿絲が三百二十七万六千七百九十八圓、蠶絲類が三百十万四千八百八十五圓、繭が百八十七万三千五百九十六圓、織物が百六十二万五千六百六十八圓、鹹水漁獲物が二百五十二万五千三百四十二圓、水産製品が百九十一万四千九百二十二圓、材木が百六十六万三千四百五十四圓、特用農作物が百廿五万三千二百七十六圓ぢや▲津警察署で聞く所に據ると津市の戸數は七千七百七十四、人口は二万四千八百五十、藝者七十六、娼妓百十九、車夫三百八十九である▲宗教は眞宗が最も多くて、次は淨土宗、次は天台宗、次は曹洞宗さうで、天台宗の天然寺に土井啓牙の墓、曹洞宗の四天王寺に

拙堂の墓があるケナ▲拙堂の屋敷(茶磨山莊)跡は茶臼山を負ふて東南に向つてゐる地ぢやが、其一部は參宮鐵道敷設の際買はれて仕舞つて、今は毎日火車鐵輪の往復を見、幾多の名士と學者を出入せしめ談笑せしめた山莊は、關西圖書株式會社々長後藤倍青氏に買はれて津市内に移され、遺つて居るのは小さな借家と櫻櫛、槭樹ぐらゐのものぢや、其槭樹の夕陽と相映發するのと其櫻櫛の秋風にバサ／＼煽られて居るなどは、何となく昔を詫ぶる様に見えた▲公園は茶臼山の東北に位せる岡陵で、黒松赤松の高きもの矮きもの假蹇せるもの、逶迤蜿蜒高低一樣ならぬ地に在りて、疎密其宜しきを得、内海と稲田と村落などの遠景頗る面白い、此公園は其昔藤堂侯の庭園であつたが、たび縣有となり、今は市有と爲つて居る▲四時頃、三重新聞社を訪ふて社主辻寛氏、編輯員東春平氏其他に逢ひ、辻氏に伴はれて新聞取次業瀬古治齋氏方へ立寄り、瀬古氏とも三人で大觀亭へ來た、聽て東氏も見えた、此家は昨夜の聽潮館と共に津市第一流の旅館兼割烹店で、昨夜の如く潮と共に生ずる明月を貪り觀るとは出來さつたが、飽にして懣なる者の絃を弾じ喉を弄し熱心に酒を勸むる在つて最も快く酔はしめた、但だ

其頃の陳腐にして一も採録するに足るものゝ無かつたは残念である。

十一月一日

勢州松坂

村上氏方にて

伊勢へ来て著しく感ずるのは、参宮道其他沿道の人が、多くは旅客に頼つて生計を立てて居る事である、伊勢の市町は大抵長くて幅が狭い、關でも龜山でも津でも松坂でも皆爾うである、土地の人は町の端から端へ行くのに手間取つて困ると言つて居る▲伊勢の子供は一瞬に旅客に馴れて居る方で、中には随分旅客を馬鹿にして冷かしたり擲擲かまつたりする者がある、大人は内心で馬鹿にして居つても、外面だけ丁寧である、宿屋料理屋の女中などが、未知未見の人の肩を拍ち膝を叩くなどは此國が最も甚しい、畢竟斯う云ふ輕佻浮薄の風を陽氣なりと言つて喜ぶ者が多いのに原因してゐるのぢや▲伊勢は津で持つ津は伊勢で持つの俚語通り、勢州第一の都會は津に相違ない、藤堂和泉守は三十五万石を以て茲に封ぜられ、松平越中守は十一万石を以て桑名に封ぜられ、石川日向守は六万石を以て龜山に、藤堂佐渡守は五万三千石を以て久居くゐに、増山河内

守は二万石を以て長島に、本多伊豫守は一万五千石を以て神戸かたべに、土方備中守は一万千石を以て薦野に封ぜられ居たるは、維新前の有様であつたが、津は大藩の割合に今日では名士が出て居らない▲三重縣の人物は、立見尙文、駒井重格、岡本武雄、小山正武(以上桑名)、故近藤眞琴、栗原亮一、藤田四郎、安藤太郎、森本確也(以上志摩)、小崎利準、加太邦憲、黒田鐵巖(以上鈴鹿)、故松本宗一、長井氏克、宮崎道三郎、齋藤事件の裁判長なる磯谷幸次郎(以上津)大谷嘉兵衛、矢土錦山(以上松坂)、鈴木充美、齋藤維雨(以上神戸)、中村雄次郎(波瀬)、尾崎行雄(川俣)、加藤増雄、岡崎正也、佐々木弘綱の諸氏ちやゲナ、先づ多士濟々と謂つて宜しい▲今日は東春平氏に阿漕浦の崩引、阿漕塚、結城神社などに案内せられ、藤枝町妓樓山半の菊を觀て別れた▲結城神社は神戸の湊川神社、越前の藤島神社と並稱せらるゝ所の名祠で、言ふ迄もなく結城宗廣公を祀つてある、境内は總て沙地で松柏鬱蒼自ら別天地を爲して居る、社殿は明治十七年の改築で莊嚴を極め、結城神君之碑銘は、文政年間津藩儒臣津阪孝緯の撰する所である▲東氏に別れたのが二時で、五時半に松坂へ着き、南勢新報社主村上光

實氏に逢つた、新報社樓上の晚餐會で面晤を得たのが松宮翠堂、服部朝霞、櫻井青瓢(以上新報社員)、下里延次郎(鎌田新聞舗主人)諸氏である、

十一月二日

勢州山田

神風館にて

今日は十時半に南勢新報社を立ち、同社諸君の案内で公園を見、山室山神社へ参り、飯南郡役所を訪ひ、岡寺へ寄り、蒲城館に撮影し、廣月樓で晚餐を催され、トウ／＼二時半になつて仕舞つた、二時半から六里近い路を歩いたのは日の長い時分には珍らしくなかつたが、此頃珍らしい事ぢや▲公園は城趾で、高い石垣の上から十里内外の江山を望むので、却々好風景ぢやが、多人敷込み合ふ節などは餘程危険である、石垣から轉ひ落つれば、痛いとも何とも言はず其儘絶命するのぢや▲郡役所では郡長橋本三郎氏、書記梅原三千氏、桑名人で十數年來面識ある長瀬親治郎氏に逢つた、飯南郡の重なる産物に關する統計は歸路までに梅原氏が抜萃して呉れる筈である▲山室山神社では、來る四日より本居宣長大人の百年祭を執行するので、松坂町の有志者は準備に

狂して居る、狂して居ると云ふと不穩に聞えるが、これは最も劃切な評語で、毫も懸直は無い、花火の下替古に二三人の死傷者を生じたるのみならず、富家へ深夜に押掛けて脅迫寄附を爲さしめた杯は、狂漢の振舞としさや見えない▲松坂は元來富豪の多い處で、小津清左衛門の如きは、其昔富豪番附に關脇となつて居る、長谷川治郎兵衛は小津に較べると小さいが、矢張り地方屈指の富豪である、三井は言ふまでもなく松坂から出て居る▲富豪の多い處は、寄附金募集者の多い處で、其多い寄附金募集者中には不正な者が随分居る、丁丑の役後、戦死者の爲めに碑を建てんとて、寄附金を募集した發起人共は、不都合にも募集金を消費して、半鶴の巨石、空しく寒煙蔓草に委し公園散歩者をして扼腕せしむるのみならず、薩隅戦死者の魂魄を迷はしめて居る▲岡寺には慶長、慶安などの年號を記入した繪額が上つて居る、三百年の雨沫煙煤を受け古色蒼然たる物ぢやが、無智蒙昧の徒が紙片を噛んで吹き付けるなどの不都合を演じて居る、尙文政年間長崎人の上げた油繪の額がある、▲廣月樓で脚絆草鞋など取るのが面倒ぢやから、椽側で諸氏と献酬したが、女中共は斯様な處で／＼と頻りに眩や

いて居つた▲齋宮まで來ると日が暮れた、明星から此地までは、明星の光て夜道を歩いた、此家へ着いたのが七時半で、三重實業新聞主筆川上彰愛氏、神都新聞記者安岡保太郎氏、伊勢新聞社山田支局藤山佐太郎氏、志勢通信社内野熊太郎氏、當旅館内岡村彦三郎氏に旅情を慰められ、十一時半まで話した、

十一月三日 勢州山田 五二會館にて

今日の天長節は實に類の稀な好天氣であつた、偶然天長節の日に兩宮を參拜する様になつたのが既に感謝すべき所である、况んや此好晴の日に遇ふに於てをや▲當地三新聞社と伊勢新聞支局の諸氏は、志勢通信社の内野熊太郎氏を推して代表者とし、今日は兩宮其の他へ案内せられ、明日は二見、鳥羽兩地へ案内せらるゝ事になつて居る▲内外兩宮とも、老杉古樟鬱然たる別天地であるが、内宮は五十鈴の清流に沿ふて、御山の小高い處に鎮座しますので一層深邃である▲正殿は兩宮とも南向て萱葺堀立柱で、屋上の兩端に北へ斜出してる木を榑風ちぎと云ひ、棟上に組み合せて列べてある丸木

を榑木と謂ふのぢや、内宮の境域は六十七町三反三畝二十七步餘外宮の境域は八十七町七反十四步餘さうな▲旅館の重なるものは、五二會館、神風館、宇仁館、高千穂館、松島館、十文字屋、藤屋、三日月太夫、澤瀉さわ太夫、福島御鹽しほ燒太夫、對岳樓、與可樓、吸霞園などである、太夫即ち御師は、昔から幣及び曆を配布するのが職業で、甲の地方は三日月太夫が配布する、乙の地方は澤瀉太夫が配布すると云ふ風に定つて居つた、ソコで其領地と云へば領地、顧客先と云へば顧客先から、參宮する者があれば、御師の家に泊る、けれども宿泊料幾許など云て授受せず、御師家維持費として授受した、神風館の如きも龍太夫と云ふ御師ぢやが、御師のみでは種々雑多の旅客を泊るに不便なので神風館と云ふ純然たる旅館を建て増したのぢやゲナ▲龍太夫の家中を見物したが、太々神樂奉奏者連名の額が幾百か掲げてあつた、大神樂は二十五圓、中神樂は十圓、小神樂は五圓で奏げるのぢやが、十名乃至三十名で十圓や二十圓の神樂を奏げて、塵々と廣告額を掲げて居る人達は實に無邪氣なものぢや▲龍太夫の檀家は下總、武藏、上野等にゐるのぢやさうて、檀家の地方に阿る次第では無いが、彼の地方は日本で一

番人氣の好い處で、旅行先から多くの買物して小包で送る者は彼地方の人に限る、名古屋から近畿を中心として山陽道一體は輕薄派です食客派ですと言つて居る▲今夜當五二會館に宴會を催されて、川上彰愛、中山朝之輔、藤山佐太郎、宮楠太郎、波邊正輝、内野熊太郎六氏が會され、濃厚なる西洋料理に健啖先生を満足せしめられた▲宴を終つて古市の備前屋へ行き、伊勢音頭と稱する踊りを見た、二十幾疊の座敷に同形の踊舞臺あり、二十名許りの娼妓が淺黄縮緬（源氏車と櫻花を白く染抜きたる）の着物に緋縮緬の帯を「や」の字に結び、踊りつゝ、舞臺へ登り来る、舞臺の前には六名の娼妓が左右に別れて、四名は三絃二名は胡弓を奏して居る、客は床を後にして列坐して居る、舞臺の朱欄と水平になつてゐる紅提灯（源氏車を白く染抜きたる）は踊子の登り来る少し前に繰り上げてゐる、踊ると五六分間、極めて單純な變化のない手振り踊つて一向要領を得ないが「伊勢參り大神宮へも寄つて来る」的の道者に見せるには澤山であらう、

十一月四日

志州鳥羽

大阪屋にて

昨日の好天氣に引換へ、今日は終日陰つて居つた、内野氏の案内で、午前は五二會館中の御座所を拜見した、これは東宮殿下と妃殿下が、昨年五月御成婚奉告の爲め太神宮へ行啓遊ばされた際、御座所に當てられた處で、三階諸客室中の一段高い廣間であるが、其正面は運動場として開放し、兩側に植木鉢（臺に載せて）が陳列してある▲兩殿下の御覽に供した中に、羯鼓踊と云ふのがあつた、これは二十四五人の壯漢が身に黑白若くは青白ダンダラ染のシャツを着、頭に赭熊の冠（高價なるは五十圓廉さも二十五圓）を被り、羯鼓に紐つけて肩から前へ掛け、腰に腰籠を纏ひ、兩手に一尺一二寸ぐらゐの棒を持ち、羯鼓を叩きつゝ、戰鬪狀の舞踏を遣るので、法螺吹く者と音頭取る者は白衣を着、ダンダラ染の袴を穿き、高張提灯を持つ者は、紺木綿の紋付着物に通常の袴であつたが此踊は、大に東宮殿下の御意に協ひ、清淨無垢な踊であるとの御詞を頂戴したさうな▲午後内野氏に伴はれ、伊勢新聞支局の内藤正氏に送られ、二見を経て鳥羽へ来た、山田から二見までの間は、平坦な暢氣な路で、春先の長閑な時分新婚旅行

でも遣るには詔向の處であるが、二見から鳥羽までの路は小さな坂と茂つた林が多い、内藤氏とは二見で別れた▲東二見は戸數三百十八、人口千八百五十四、西二見は戸數二百六十八、人口千四百六十四、宿屋が九戸で重なるものは太陽館と清瀆亭ぢや、貝細工小賣店が七軒、飲食店が十七軒、馬車が八輛、人力車が三十六輛、一昨年の宿泊人が三万八千六百三十四人、昨年の宿泊人が二万五千九百五十八人、本年の宿泊人は一月より十月までに二万三千三百三十三人▲鳥羽港は言ふ迄もなく遠州灘、紀州灘で疲れた船の休泊所なので、船舶の出入は頻繁な方ぢや、船舶と娼妓は密着の關係を有して居るから鳥羽には娼妓が多い、貸座敷四十一あつて娼妓は百三十二、これは近頃自由廢業で大に減つたので、以前は二百以上の娼妓があつたゲナ▲密賣淫の處分を受けた者本年になつて五人、賭博の前科者は凡そ三百人もあつて、中には四犯五犯の者がある、人力車は七十一輛、劇場は錦座、鶴鳴座、濱島座、宗教は九分九厘まで曹洞宗で浄土宗、眞言宗の門徒は二三軒あるばかりさうナ、

十一月五日

勢州山田

神風館にて

今日は内野氏の案内で、雨中の鳥羽、二見を見物した、鳥羽の鐵工合資會社は其規模こそ小さいが、其内部は善く整備し善く發達して居る、社長久保村氏は快く見せて呉れたが、時間の乏しい爲めに細觀するとの出來ざつたのは残念ぢや▲鐵工所の後に小高いのは城山で、九鬼、内藤、稻垣などの大名が前後相襲て居つたが、今は其城が無くて石垣ばかり残つて居る、休憩所は近年建築したのがあつて、其屋瓦の庇先に出てるものは、九鬼の鞆繪、内藤のさがり藤、稻垣の抱茗荷なまきりを交錯して用つてある、▲城山だけは海軍省の有ぢやが其周圍は悉皆鐵工合資會社の所有なので海軍士官などが城山へ登るには一々鐵工合資會社の許可を得なければならぬ、誠に不都合千萬である▲日和山は昔から船頭などが天氣を觀る爲めに登る山ぢやが、好晴の日に登れば富嶽は言ふ迄もなく、駒ヶ嶽、御嶽、白山、立山まで見えるゲナ、憾むらくは陰雨冥濛で、桃取、峯志、和具、菅島さへもハッキリ見えなかつた、眼前に見える相島さかのしまと縁起松えんぎまつだけは雲雨を帯びて、却て美觀を加へた様である▲二見ヶ浦の旭日は人口に膾炙してゐるの

て珍らしく無い、雨中の二見却て妙なりと言へば、負惜みと思ふ者があらうが決して爾うて無い、『朝霧の二見に想ふ神代かな』▲二見に幣や七五三繩を賣てるのは、奥野幸五郎と云ふ人で、春から夏へかけて毎月三四十圓の賽銭が上がるが、晩秋から冬になると毎月二三圓との話ぢや、七五三繩は大が一回二十錢、中が六十錢、小が一錢さうナ▲賓日館と云ふのは神苑會の別區に屬して居る、これは藤堂侯が神宮御警備として文久三年四月に築いた臺場の趾ぢやが、明治十九年十二月、神苑會の有に歸し、宏壯な館舎を新築したので、其館名は故有栖川熾仁親王殿下が命ぜられ、且つ自ら書かれたのぢや▲賓日館は、二十年三月に故英照皇太后陛下御宿所に充てられ、二十四年七月に皇太子殿下御避暑遊ばされた、館内に假徴古館を設けて古器物などを陳列し、風俗、美術、人類學、考古學等の参考となる好材料が多い▲伊勢參宮には種々の面白い話があるが、織田信長が僧は乞丐の徒なりと撥斥してから、徳川時代にも坊主の伊勢參宮を許さぬ時があつた、ソコで坊主は宮川から附鬻を買ふて參宮したゲナ、宮川の水で總ての參宮者は沐浴齋戒して行くとなつて居つたが、沐浴齋戒の代理を職業と

する者が出來て居つた杯は笑止千万ぢや、

十一月六日

勢州松阪

山川ホテルにて

本居先生の百年祭に列する積りて、五日の夕刻に歸つて來ると松阪で約束したが、雨中の鳥羽や二見で手間取つて、松阪に於ける未曾有の盛典に列し得ざつたのは遺憾千万である、讀者からの信任問題提出、編輯局からの譴責固より覺悟の前ぢや▲山田から齋宮邊までは、祭歸りの人に出逢はざつたが、櫛田邊からは、老人、若者、小學生徒、娘さん達或は單獨に或は隊伍を組みソロソロバタバタと蟻穴から蟻の出て來る様ぢやつた、ボン／＼と煙火の揚る音は近くなる、兩側の檐には朝日に匂ふ山櫻(紙製)を挿してある、何時の間にか松阪町字愛宕へ來て居つた、チヨット警察署へ寄つて出て來た時は、最早開くなつて警官の提灯は人群を押し分けて居つたが、踊屋臺は山櫻の提灯を吊して大道を横ぎり横丁へ入つた、併し踊子を載せては無く、最早も仕舞と云ふ氣色であつた、縁門は依然として名残り惜しげに聳えて居るが、群集は西

に東に散じつゝあつた▲南勢新報社を訪ふて社中諸君に遅かりしを恨まれ、山川ホテ
ルに宿泊して角田浩々歌客の手紙を得た、其手紙は昨夜歸阪する筈ぢやつたが、君
が山田から今日歸つて来ると聞いて、逢ひたくなつたので滞留して居るとの意味ぢやつ
た▲松宮翠堂氏と共に湯屋の暖簾をくぐつて一浴し、有志諸君が記者の爲めに催され
た宴席大海亭へ行つた、浩々歌客を始め二三の面識諸君あり、聽て來會諸君は揃つた、
村上東洲開會の挨拶を述べ、記者謝辭を述べ、浩々歌客雙對の美とか何とか拈つた演
説を爲し、各々商人たり記者たり官吏たり劍客たり豪傑たり好男子たりロヨットコた
ることを忘れて飲んだ、大妓は三味線を弾いた、小妓は舞ふた、公園の花火は此宴會の
爲めに興を添へた▲百年祭に幹旋尤も勉めた清水氏は、菓を贈られた、其菓に『分見
ばやしをりも花のよし野山なほ奥深く匂ふこずえを』と書てある、宣長と署名して▲阪
内川と云ふのが松阪町を東西に横斷してゐるが、これに架つてゐる大橋で山師が野心を起
すのは南に見ゆる白猪山腹の鬱蒼たる阪内官林ぢや、土居光華が牢へ入つたのも全く
これが爲めぢやつた▲阪内川は平時一縷の細流で利用が出来ない之を浚へて下流二里

の河口から船の来るやうに計畫したのは竹橋事件の岡本柳之助ぢやつたが、成り立た
ざつた▲松阪物貨の出口たる大口港は水が浅い、之を掘り割つて直に松阪町に達せし
めんとは松阪人の希望さうなが誰も企て得ぬとは残念ぢや▲三井の家は本町に在る、
去年まで銀行の支店があつたが其後閉鎖した、小さい建物ぢやが復太郎氏の所有ぢや、
先祖高安が江州から來て草鞋を脱いだ累代の故郷であるが、今は來迎寺の墳塋と此建
物ばかりである▲過日書いた小津、長谷川の豪富の外に長井と云ふのもある、小津の
主人は戀み半分に銀行を開いたが、他の兩家は古風な家憲を嚴守して今も昔に變らぬ
さうナ、長谷川の庭園はチョット洒落れてる▲松阪人て近來の傑物は家里新太郎氏で
ある、彼は佐幕の假面を被つて幕末志士の間に奔走したので安岡に斬られた、安岡は家
里の勤王の眞意を解したので、其遺骸を抱て慟哭したさうナ、

十一月七日

勢州津

加喜伊にて

伊勢に於て宿屋の最も發達して居るのは山田である、宿屋の發達して居る處は菓子も

發達して居るとは、風土觀察者が殆んど原則の如くに信じて居る所であるが、山田は聊か例外の觀がある、と云ふものは外でも無い、昔から山田へ入る者は八九分まで道者ぢや、道者を泊る宿屋は上等下等の室を設け、高直安直に應ずる待遇を爲し得るけれども、菓子客を見てから製造する譯に行かぬから、先づ多數購買者の味感と財囊に相應する様に製造するので、赤福餅、太閤餅などの名物は言ふ迄もなく、高等旅館で出す菓子も、東京名古屋などから輸入して居る物の外は餘り佳くない▲山田に次て宿屋の發達して居るのは津である、爾うして菓子は山田に較べると少しマシな方で、養老軒、金玉堂など云ふ菓子屋がある、金玉堂のは阿漕焼(此名は陶器にもある)阿漕の月、阿漕餅、浦千鳥、神園の梅、國府の餅などで、養老軒のは浦千鳥、伊勢の浦、養老昆布、懷中善哉、大空などぢや、善哉とは江戸の汁粉である▲松阪の宿屋は、山田と津に較べると遙かに遜色がある、回春樓と山川ホテルは松阪でこそ第一流ぢやが、山田の第三流旅館に敵する位さうな、所が菓子は津と山田に立ち優つて居るのがある、老伴と云ふのは、天皇陛下と英照皇太后陛下の御賞味に預つたとの事て名高い▲餅

は東京の振酢、大阪の押酢が兼行はれて居る、尾張、伊勢は東西(關東關西)趣味の交會所ぢやから、服飾に於て、食物に於て、言語に於て、交錯して居るのは當然であるけれども、伊勢の服飾、言語などは大阪に近い、最も紀州と似て居る、行てよいなはれ(行つていぢつしやう)と云ふ女の言葉、行きやんのか(行かないのか)出来やんのか(出来ないのか)など云ふ男の言葉、何れも紀州と同じである、紀州で盛に行はれるハシ(東京の子エ)を使はないだけぢや▲話が言語に移つたが、モ一つ食物の話が残つて居る、魚類の新鮮なとは鳥羽が第一ぢやが、彼地は料理が下手ぢや、山田は鳥羽に近いので鮮魚も得られる、料理も好い、松阪は魚類よりも牛肉の好いのがある、津は阿漕浦が近いけれども得る所は鱈其他の小魚が重て、鯉や鮪は取れない、鯛も甚だ小さい、牛肉は松阪の半直段ぢやが、半直段は半直段だけの代物なんて極々粗い、ソコで津に於て精肉(これは京阪及び伊勢の熟語)を賣れば、半直段の粗肉と競争するので、必ず失敗するゲナ▲過日備前屋て見た踊りは「さくら襖」と云ふ伊勢音頭ぢやつたが、少し長くて不明快な節もあるから、「重ね盃」と云ふ短いのを紹介しやう、「千代萬めぐりつ

させぬ八重霞、くむ長閑さは神風の五十鈴ならねど、いさぎよき流れの泉色も香もめでたまはれば、いそくと花に習ふてちらりと其處に情けの通ふ君達の心まかせに紐ときて、上の下のと取る手も狂ふ、豊かな御代にあひあふは、是ぞ價のなき寶、露もこぼさず素直なる竹の葉かけに汲みかさね、他かぬ契のあかしには、あけの唇ぬつくりと、月花深雪一番にかたぶけさ、げ亂れざし、肌も和らぎ氣も寛ろくは、言の葉種にいひ取れず、實にや妙なる神わざを給ひしみぎみたまうれし、うれしく何時迄も波々うくる敷の盃、これとても随分不明快な節があるが、其朦朧にして露骨ならぬ處に、十分の魔力を含んで居る▲古市の遊廓は上品の方ぢやが、近年出来た新古市と云ふ處では、地方の道者(殊に關東人て上方の風俗人情に不案内なる)を刺ぎ且つ絞るとの事ぢや、古市不案内の道者達は、先づ警察署、新聞社などに就て、詳しく聞くが可からう、

十一月八日 勢州四日市 吉高屋にて

昨夜津に着し伊勢新聞社から荷輝舎(加喜伊)へ案内せられ、同社の加藤、櫻木、國友三氏と晚餐を共にして居る時、新聞賣捌瀨古治齋氏が見えた、晚餐了つて曙座へ案内されたけれども、眠くてく何^を遣^つて居るのか薩張り判らざつた▲今日は十時半から瀨古氏に送られて四日市へと急いだ、上野村の桔梗屋で晝飯を食ふ時、給仕の娘が瀨古氏のパイプを啣えてスツバく遣り始めた、頑固な奴等は輕佻浮薄とか何とか評するかも知れないが、再び此邊を通過する時、スゲなく支度(晝の)を斷わられない爲めに、瀨古氏の語を借りて『ナカく開けてる』と褒めて置く▲七時半に當四日市へ着き、關西日々新聞社を訪ふて、社主前川龜吉氏、主筆本多直次郎氏に逢ひ、此家へ案内せられて晚餐を饗せられ、更に料理店「吾妻」で宴會を催された、會されたのは前川、本多二氏の外に館龜太郎、伊東豊三郎、水谷磯吉三氏と新聞賣捌業大井増吉氏で、瀨古治齋氏も列席された、伊東氏は杉葉又六と號する通人で、狂歌都々逸仁和賀踊、何でも遣られる、之と對抗し得たのは瀨古氏ぢやつた、「ナモ」「エモ」言葉の美人が二人見えだが、多辯の競争にはヒケを取らぬ方々と見受けた、其容貌のみを評すれば、一人は

東髪て圓顔て眼が窪んで色が蒼白くて裸體畫のモデル若くはラシヤメシに多い種、他の一人は額が廣くて頬が細くて少し赤味を帯びて、頭髮を桃割か何かに結ぶて搗母然たる種ちやつた、尤も少々老けてる方て▲遊廓は南町、北町、高砂を通じて貸座敷五十四戸、娼妓百七十四、藝妓七十、藝妓屋は一軒だけ、其他は貸座敷に置いて居る、人力車三百九十三、賭博前科者は二百五六十、宗教は西本願寺派の門徒が多く、耶蘇新教の教會一箇所あつて信者五六名ある、宿屋の重なるものは八百善、松茂、吉高屋、十九村屋、山田屋などで、料理屋の重なるものは八百善、八百與、吾妻、茂竹、會友亭などちや、菓子屋は國華堂と吾妻で、別段名の聞えた菓子は無いが、名古屋に近いだけに幾分か進歩して居る、

十一月九日

勢州四日市

吉高屋にて

津は島根縣の松江と風土人情の類して居る處て、其地寛濶、其人雍容と謂ふべき方ぢや、四日市は島根縣の米子と境を兼ねた様な處て、横濱神戸間に挟まれたる小横濱、

小神戸と謂ふべき形勢の地ぢやが、今日の儘では巨艦は十五六丁の海上に碇泊するのて、巨艦を横着するとの出来る境港には及ばない、メコで四日市築港は三重縣下の重要問題たるに止まらず、天下の重要問題とせねばならぬとの事ぢや▲今日の所て四日市港から出るのは、米、糠、清酒、油などが重なる物ぢやが、入つて来る重なる物は、肥料(中にも干鰯)大豆などである▲四日市製油場では、種油を製造するので、種油を更に精製して白々と云ふのを作る、一晝夜に潰す菜種が二百五十呎、一呎五斗入ぢやから百二十五石である、一昨年の原料消費高は二万六千四百十二石四斗八升て製油高は六千三百四十石、昨年の原料消費高は三万三千九百六十六石一斗六升て製油高は八千四百十八石さうな、菜種は伊勢、伊賀、近江、攝津、河内、越前及び北海道のを用ふのぢやが、越前の種は質が一番好いので大部分を占めて居る、北海道のは質が粗いので填め合せに用ふばかりぢやが、油分は割合に多いとの話▲今夜、勢州毎日新聞社を訪ひ、社主森永判四郎、加藤青洲、小野芳水、中田新太郎の四氏に逢つたが、「吾妻」て晚餐會を催され、昨夜のとは貌だけ異つてる「ナモ」「エモ」言葉の美人が見え

た、

二百七十二

十一月十日 勢州四日市 吉高屋にて

今日は勢州毎日の加藤、中田二氏、關西口々の長谷川氏に伴れられて、三重郡室山村伊藤家の酒、醬油、製茶、生絲、機業を參觀した、同家に於て潰す繭は年に一千三百石許で、一升の繭から十一匁五分の絲が取れる、繭一升から九匁五分解れるのが通常なので、十匁五分解れるのは上等と云ふのである、十一匁五分解れるに於ては上の又上、無類飛切たると言ふ迄もない、繭の良否は乾燥室の香でも判るので、我々素人にも良繭たるを感ぜしめた、同家の種紙を見るに大抵「又昔」と云ふので、蠶種検査人が有海と認めて切抜かしめたのは千中の五六である▲同家の機業は、羽二重、七子、素練其他であるが、三井呉服店の手を経て宮内省へ納められるのと、米國其他へ輸出するのことが重である、宮内省の方では地の厚い羽二重を用られるのであるが、外人は薄い方を好むので厚いのを下等品と認めて居るが▲三重縣の生絲は十年前までは質が

好くなかつたが、其後急足の進歩を爲して、三四年來は第一流の地を占め、佛伊諸國の機業家が以前横絲ばかりに用ゐて居たのが近頃縦絲つづに用ゐる様になつたさうな、鳥取縣(主に倉吉)と云ひ三重縣と云ひ精良な生絲を出して各々第一流の地を占むる今日、群馬福島長野三縣の如きは、種を締め直さねばならぬ▲伊藤家の茶は、大抵紐育桑港へ輸出するのぢやが、彼地では茶に着色するのである、ソコで手間賃の高い彼地に於て着色するのは不經濟ぢやから、總て此地から着色して送るさうな▲午後四時半から歸途に就き、六時前四日市へ着いて松茂樓に入つた、長谷川氏と中田氏は痛飲黨、加藤氏と記者は健啖黨で機鋒相當つたが、加藤氏は更に鮑福黨との事で包圍攻撃を受けやうとした▲松茂から此家へ歸る途で、三重村の二六愛讀者水谷徳之助氏に逢つた、同氏は三重村から態々一里半も出迎へられたので、記者を此時來着したものと認められたのであつた、聽て此家へ訪問せられ、百方旅情を慰められて、麥酒林檎等を以て酔後の我々を清く淡く饗された、

十一月十一日

勢州桑名

京屋にて

西に於ては肥後米、東に於ては伊勢米、隠然として旗鼓相當る焉、と社軒着て講釋するにも及ばない、平たく言へば兩大關ちや、ソコで此伊勢米が良の爲めであるか、四日市には精米會社が多い、精米組合に入つて居るのが十四個所あつて、白の數は少くて二十、多いのが七十との事ちや▲試みに一の精米會社を訪ふたが、六斗五升搗の白が四十、五斗二升搗の白が十四で、平均十時間て精げるとの話ちやから一晝夜に八千石八斗八升精げる勘定である、爾して一晝夜に消費する石炭(機械運轉の燃料)が千五百斤、男工十八人の日給が平均三十二錢、女工六人の日給が平均十七錢、機械運用者二人の日給各々四十錢ちやが、四十臼に就て小米^{ここ}二斗、糠十五俵出るゲナ▲機械搗は足搗に較べると光澤があつて結果が好いので、重に横濱と東京へ出る、爾うして酒造季節になると、半田、伊丹、西宮、御影其他へ出る、前述の糠と小米は如何するかと云ふと、糠は横濱東京などの肥料屋へ行き、小米は飴屋へ賣れるゲナ▲米は言ふ迄もなく伊勢米を主とし、之に次で美濃米、それから加賀米、越後米を填合せに用ふとの

事で、同じ三重縣でも伊賀米を餘り用はない、伊賀米は百三十二万圓ほどの總價額であるが、伊賀の農民が米に費す干緋代は僅かに八万圓、爾うして伊賀人が呉服小間物などに費す金額は三十万圓以上ちやゲナ、農民は一部分、呉服小間物類を消費するのは全體であるから、比較すべき場合でないが、必需品に少く費して、奢侈品に多く費すのが伊賀人の特色さうナ▲今日、四日市から桑名までの徒歩は雨に惱まされた、今日からは冬の雨なので随分冷たくツボンを浸した、伊賀の上野などに較べると北勢は雨が多い、特に桑名は多い、昨年の雨雪量は、桑名に於て一月が五八、二で、二月が二四、〇、それから三月が一二七、八、それから四月が三〇四、五、五月が一六八、四、六月が七三、九、七月が二三八、八、八月が一七二、八、九月が二五四、三、十月が一六一、九、十一月が一〇九、一、十二月が三九、〇、これを合すれば一六三二、八となるが、上野は毎月桑名より少くて、合計一二六三、二である▲四日市では京都以來、電話を聞いたのみならず、大井新聞舗から幾十の新聞を貰つて、新聞に餓えて居つた記者は新聞に食傷する程ちやつた▲當桑名へ着いて永野新聞舗を訪ふたが、主人父子の歡待一方なら

ず、直に此家へ案内せられ、晚餐を共にして旅情を慰められた、

十一月十二日

勢州桑名

九一にて

一關の地蔵に振袖着せて奈良の大佛婚にとろ』は、關の地蔵を誇張して居るのぢやが、『勢州桑名に過ぎたる物は金の鳥居に二朱の女郎』は、大に桑名を侮辱して居る、桑名は僅々十一万石の城下であつたが、幕末の偉人白河樂翁の出た處、今日に於ても從六位諸戸清六と云つば誰でも知つちよる三重縣下第一流の富豪、關西屈指の富豪がチャント控へてゐる哩、のみならず、西に於て馬關、東に於て桑名、何れ劣らぬ定期米取引の盛な處で、日本國中に東京と大阪を除けたらば、桑名、馬關に及ぶ土地は無いのぢや▲斯る土地柄であるに因つて、生活の程度は三重縣下で一番高いと謂つても可い位で、絹の羽織或は半纏で懷ろ手、勝つた負けの得意失意を複雑な笑ひに隠してブラリ／＼妓樓料理店へ入る先生多く、随つて宿屋料理屋などは灑掃が行届いて、床の間でも椽側でも廁の中でもテラ／＼して顔が映る位が多い、地方では珍しい清潔好の

處と謂て宜しい▲桑名の湯屋は如何なものかと入つて見た、清潔好の處だけに湯屋の構造は立派なもので、京都以來チョツと得難い湯と感じた、斯う云ふ立派な湯屋で二時間も三時間も磨く美男美女(中には自稱もある)が多いから、桑名には艶種つやねが多い譯ぢや、名古屋から三而探訪の艶筆先生が三人も五人も出張して鵜の目鷹の目夜目も寝ずに出没隠見して居るのは道理である▲桑名米穀株式取引所は今日のところ仲買人二十一名、日々の取引高一万石内外となつて居るが、取引停止の紛擾前は却々賑ふたもので、一時は仲買人四十名、取引高平均二万石、人氣立つた日は三万石に上つたともあるゲナ▲鍋屋町で廣瀬與左衛門氏を訪ふて、鍋釜製造を見た、此家は慶長年間に開業したので、鑄物瑛瑯は三十年前に始め、銅鐵瑛瑯は三四ヶ月前に始めたが、衛生試験所では▲の商標を見れば安全なりと認めるほど信用して居るゲナ、此位の鍋釜屋は名古屋にさへ無いさうで、販賣先は重に三重愛知岐阜の三縣次は大阪京都福井靜岡の四府縣で、滋賀長野二縣へも少しは賣れて居るとの事▲當地は土地柄だけに賭博犯は多い、併し密賣淫は少い、貸座敷は七十四、娼妓は百五十七、藝妓は七十五、料理屋

は四十二で重なるものが船津屋、大津屋、宿屋は五十九で重なるものが京屋、九一、鍵治、劇場は廓座と中橋座、狩獵免状は年々二百以上ちやが、本年は乙種二等三名、乙種三等二十三名、これから追々願ひ出るであらうが、狩獵税の高くなつた爲に幾分か減る模様ぢやゲナ、既設電話百六十五、未設電話百七十九、都合三百四十四の加入者で、来る十六日から遠距離の電話が用はれる、學齡兒童の就學は多い方で、宗教は西本願寺派が多部分を占め、天理教會、聖公會の會堂はあるが、其信者は寥々として晨星の如しとの事、

十一月十三日

尾張名古屋

志那忠支店にて

言ふまでもなく桑名は、長良、揖斐二川の河口に當り、上流から送つた材木は、此地から四日市港へ入つて、各地へ送られる、特に木曾川を下り来る御料材は長島の東側から桑名へ入り、同處に整理せられて東へ上るのである▲さて桑名は材木の通過する處、定期米の取引劇しき處、宿屋料理屋女郎屋は光澤ぶきん掛けなやうに清潔な處、

金の華表のある處、従六位諸戸清六さんの住つてゐる處たるに止まるかと云ふに、ナカノ以てこれだけに止まらない、時雨蛤の名物たるとは言ふまでもなく、桑名盆がある、桑名箒がある、特に萬古焼は今てこそ四日市に株を取られて仕舞つたが、桑名が木家本元なんて、桑名の南方一里餘の細生、小向二村の山から出る土は、萬古焼の原料として、日々桑名、四日市其他へ運搬されて居る▲桑名の料理は、ナカノ凝つたもので、鰯漬を掃漬して握鮓形の肴を拵えるとか、鰯の殻と肉を剝いて薄皮ばかり川ふとか、種々様々の小器用な事を遣つて見せる、菓子屋は四日市の國華堂に對して花屋と云ふのがある、これと云ふ名高い菓子は無いが、花屋の菓子と云へば贅澤な先生達も満足する事になつて居る、東京の風月堂の様なもの▲過日、伊勢志摩出身の人名を擧げて、桑名の分は、立見、駒井、岡本、小山の四氏だけ書いたが、大阪控訴院長加太邦憲氏は鈴鹿でなく桑名であつた、久松義典氏も桑名ぢやゲナ▲今日は永野利右衛門氏に送られて、揖斐、長良二川を渡り、長島で水田の稻を刈りつゝあるを見た、寒空に水田の稻を刈るのは如何にも辛さうで氣の毒であるが、此邊の稻は植付けさう

すれば成長するので、施肥其他の勞は極々少いゲナ、但この水田に作つた米は旨味が無いと云ふ事である▲纏て木曾川の渡頭で永野氏と別れた、併せて勢州に別れた、輕舟一棹伊勢に對する感謝の爲めに重く感じた、津に於て松坂に於て山田に於て往復二回の歡待を受け、四日市に於て桑名に於て厚遇されたる記者は、殆んど伊勢を冷靜に批評し能はざる程になつた▲關西日々新聞の杉葉又六氏が「逢ふて嬉しと思ふたぬしも明日は悲しい後ろ影」と唄ふてSの絲に合されたのは、今尙ほ耳底に存して居る、

十一月十四日

尾張名古屋

志那忠支店にて

尾張は越後と共に女寶國を以て聞えて居る、七寶の産出が多いか、女寶の産出が多いか、天秤に懸けて見たならば、恐らく女寶の方が餘程重からうとは花柳通てなくても知て居る、名古屋の新聞が賣れるのは、尾參兩國と伊勢の北部だけぢやが、名古屋女が「ナモ」ニモ」言葉を以て横行濶歩して居る區域はナカ／＼廣い、爾うして何處にも名古屋女排斥の聲なく、名古屋物ならイクラでも引受けます、一手專賣の看板を掲げて十分に

販路を擴張し、遠く歐米諸國まで輸出致したう御座いますと歡迎して居る仲買人が多いから、纏て名古屋女株式取引所と云ふのが出来るかも知れない、唐人の言つた天下父母の心をして男を生むとを願はず女を生むとを願はしむ云々は、最も適切に名古屋へ當嵌る警語で、男子が生れると餓鬼ぢや／＼と棄物扱ひにし、女子が生れると身分不當の服裝をさせ、種々様々の遊藝を仕込み、左團扇の準備おさ／＼怠りない者が随分多いとの事ぢや▲さりながら、尾張は武藏野の廣きと共に廣く、人の胸懷も自然潤大な方で、信長秀吉の血管に流動した血は今も幾分か尾張人士の血管中に存して居ると見え、政見を異にして居る新聞記者が公共事業に歩調を揃えろとは毎々ある、一堂に歡飲するともある、新聞購讀者も随分多い方で、新愛知は二万二千、扶桑新聞は一萬三千五百、中京新報は一萬三千、東海日々新聞は八千、齋藤新聞は二千、大阪朝日は一千、大阪毎日九百、報知は六百、二六は四百四十、萬朝は四百二十、時事は四百十、東京朝日は三百七十五、日々は二百、讀賣は百二十、中外商業は百、其他百以下の分も種々あるとの事、名古屋の宿屋は二百四十三、木賃宿は六十九、下宿は八十九、貸

座敷は百七十九、娼妓は千二百五十四、藝妓は千二百六十四、藝娼妓雇人日入は七十四、車夫は千四百六十一、車夫の親方八十四、狩獵免狀は甲種十三、乙種五十二である。

十一月十五日

參州岡崎

淺傳樓にて

明治十八年一月廿三日の朝、四日市の井筒屋源七方で二圓だけ都合して貰つて、其内から宿料廿五錢、利息十錢（荷物取扱料を含む）、熱田までの船賃十二錢を拂ひ、然然として木賃旅行をした我は、熱田から直に東上したので、巍然たる金城を横目に見たばかり、六十五万石の城下、三府に亞ぐ大都會を見得なかつた、其後毎々汽車で東海道を往來するが、大抵停車場前で一泊し、翌早朝立つので、廣小路邊七八丁の間を歩いたとはあるが、市中見物は今回碧浪鬼頭氏に伴はれて歩いたのがお初である、是れ深く同氏に感謝する所ぢや▲新聞賣捌朝日屋主人林逸氏は店員高木伊三郎氏をして記者を知立町まで送らしめたので、今朝九時志那忠支店を立ち高木氏と共に歩いたが、靴を

同氏に持つて貰つたので、何か忘物した心地もし、小春日和の暖かな所から眠氣も催した、眠りつゝ話しつゝ歩いたのぢやが、高木氏が笠寺觀音は此邊で名高い云々の語に眠氣を醒して同寺へ參り、談資茶屋に休憩して支那忠主人に貰つたサンドキツチを菓子に代用した、通り掛つた一少年にサンドキツチを一切れ食へと勧めた所が、赤い髭が生へると困ると辭退した、田舎者でも却々氣の利いた挨拶する哩▲高木氏が立派な料理屋で並餐しやうとの好意から鳴海町で支度し損なつた、知立町までは未だ三里餘りある、大分空腹になつて來たので前後と云ふ處で穢い駄菓子屋兼飲食店へ飛込んだ、主婦の曰く御飯は今無うかりました、それでは餡饅包を食はうと食ひ始めると、主婦は籠から釜を下した、チョット蓋を取つたが、湯氣が立つて飯らしく見えな、あれは何ぢやと聞くと、麥飯で家の者が食べるのですとの事、麥飯でも可いからと高木氏と一碗づゝ食つた、それから知立町へ來て岐阜屋に入り大急ぎと御馳走の字義に負かぬ饗應され、高木氏は刈谷停車場、記者は東海道何れも曇つて暮れ易い空を急いだ▲記者は岡崎まで尙二里あると云ふ處から、真闇の中に稻片付けつゝある農夫

を頼みに歩いたが、廳で大聲に詩吟しつゝ来る二人に出逢つた、提灯に二六と大書してある、これは岡崎行脚俱樂部の諸君が出迎へられたので、明治用水の碑など闇中に案内された、廳で興參新聞社主大久保柳太郎氏の出迎へられたのに出逢つた、大濱茶屋に於て十幾名の行脚俱樂部員諸君の出迎に逢ひ、萬歳を呼ばれて恥ぢ入つた▲ペラ／＼と降り始めた、シト／＼と降り出した、提灯を携へられた二十名許の人に左右前後簇擁されて歩く記者は嫁入でもするやうに、嬉れしく耻かしく氣遣しい複雑した感か胸一ハイであつた、淺傳樓に着て一浴し、行脚俱樂部の茶詰會に旅行瑣談を試み、龍城館の宴會へ出席したが、來會されたのは十四氏で、儀式張つたることなく適意に飲み、適意に食つて散會した、昨夜何處やらの大記者先生が八字髯を拵りながら返盃は如何したと迫られたなど思ひ出して忌々しくもあり、可笑しくもあつたが、今夜の宴會で悪感を一洗して仕舞つた、

十一月十六日

參州岡崎

淺傳樓にて

『五万石でも岡崎様は城の下まで船が着く』てふ俚語の通り菅生川へは依然として幾幅の布帆が上下して居る、併し音に名高い龍城は唯だ礎石を存するのみで、國破山河在の感に耐へない、此礎石の上に家康の銅像を据ゑやうと言ふ者が多いさうな、城趾は公園と爲つて居るが、東照宮と映世社を合祀した小祠があつて、幾株の楓樹は方には紅葉し盡して一層寂味を加へて居る、元帥侯爵山縣有朋が忠義護邦家と書いた巨碑があるが、これは征清役の戦死者を合葬してあるのので、礎石は討死者の村々より寄附し々々村名を刻してある▲六所神社は家康が出陣に必ず參つた宮で、此宮へ參つて出陣すれば必ず勝利を得たと云ふ事ぢや、此宮の石段は勾配が却々急なので祭禮の時だんずりを擔ぎ上げるに却々骨が折れるゲナ▲龍海院は是字寺とも稱するので、家康の祖父清康が「是」の字を握つたと夢みて寺僧に占はせた時、「是」の字を分割すれば日下人となる即ち天下を握るてふ吉夢なりと答へ、寺領を貰つて朱印地となつたとの事、此寺には酒井雅樂頭の菩提所があるので、毎年八月舊姫路藩主が參詣するさうな▲參州は一體に花崗石の多い地なので、岡崎町及び額田郡には石工が随分多い、併し花崗石の

産額と價額は詳かでない、ガラ／＼紡績と云ふのは、通常の紡績より簡易で水車で遣る仕事ぢやが、額田郡だけが十二万鍾で年々七十万圓乃至百万圓の收入あり、有名なる三河木綿は近年衰へて居ると云もの、額田郡で七八十万圓から百二三十万圓、米は同郡本年の收穫九万石乃至十万石、養蠶は年々十二三万圓から十七八万圓の間を上下して居るとの事、宗教は眞宗大谷派が多く、郡内六万八千餘の人口に二百四十幾個寺あり、學齡兒童の就學は男子ばかりで百に付て九十七、二分と爲り、男女平均すれば九十三、六分となるゲナ▲三龍社と云ふ生絲會社を參觀したが、市街を離れて山林に近く衛生には宜い所ぢや、同社は二十九年に創立し、三十年七月から業を取つて居るので、繭は本國及び近江、美濃、駿河のをを用る、産額は一ケ年五百捆、一捆五百圓とすれば二十五万圓、一捆六百圓とすれば三十万圓（讀者曰く簡短々々）、工女は四百名、日給五六錢より二十錢、食料は會社の支辨、休暇は一日と十五日、休憩は喫飯後三十分間ぢやが、冬はそれすら與へない、併し名僧來れば其説教を聴かしめ、名士來れば其演説を聴かしめ、面白い芝居や落語を買切つて工女に娛樂を興へる、のみならず

傳習工女なる者は三年乃至五年期で、夜分に裁縫習字を教へるから、最初は自分の姓名を書き得る者が僅か三四名ぢやつたが、今は姓名の書けない者は無いさうナ、

十一月十七日

參州豊橋

千歳樓にて

矢矧川、菅生川の堤防は、人家の屋頭よりズット高い、其河床は庇よりズット高い、ソコで一朝暴雨あれば、岡崎町の二部及び矢作村などは水底の蛙たるを免れないのである、河床が高くなれば橋を高く架けるは當然なので、十數年前まで橋と水平の高さに突起して居つた岩が、今は橋よりズット低くなつて居る、言ふ迄もなく橋は元の儘でなく其後架け換へたのぢやから▲淨瑠璃姫の足跡と云つて、菅生川の岸際なる樹下岩根の水中に存して居る愛らしい足跡も、今は土砂と水に摩擦せられて漸々其痕跡を消滅しやうとして居る、誠に惜い事である▲伊賀八幡宮と云ふ名祠は、河近く鎮座ましますのぢやが、堤防の高さ聽て華表の高さに及ばんとして居る、祠宇は家光時代に建てたので、朱漆塗飾、家光的趣味を發揮して居るが、樓門の方は家康時代に建てたもので、

古色蒼然、沈雄深奥、幾分か家康的趣味を發揮して居る▲參州屈指の巨刹なる大樹寺は、三河親忠の建立に係り、舊六百石の朱印地であつた、門前に家康鎧掛の松あり、境内に親忠以來徳川譜代諸大名の碑がある、此寺には家康に縁ある寶物が多いので、中にも御貫ノ木と云ふのは、深く龍中に納め神として祀つてある、これは一本の貫ノ木能く大敵を潰えしめたからぢや、當時の和尚は登譽と云ふ人て膂力絶倫であつたが、祖洞和尚の降魔杖と云ふのは、長さ丈餘、太さ一尺、殆んど柱のやうな物ぢやが、同和尚も却々の腕力家で、一向宗の亂、此杖を提げて門外に奮闘したので、刀痕歴々として存して居る、往昔三河武士の強かつたとは、此等緇衣の徒が強かつたのを見ても判る、今のハイカラ先生達は大に鑑みねばならぬ▲質樸剛健であつた三河武士は、何時しか岡崎女郎衆、岡崎女郎衆、岡崎女郎衆は好い女郎衆などと艶いた節で唄ひ始め、武士で持つた岡崎を女郎衆で持つ様にして仕舞つた、爾うして今は其女郎衆さへも淋れくして、貸座敷値かに九十三、娼妓値かに百八十となつて居る、三河人士たるものは此積衰積弱の餘に卷土重來の策を講むなければならぬ▲岡崎の料理屋は二

十七八軒で、重なるものは淺傳樓、龍城館、花形、喜盛樓など、宿屋は三十一二軒で、重なるものは丸藤、桔梗屋、鍵屋、大島屋、木賃宿五十一、下宿屋七、蕎麥屋は坂登(東海道第一と稱す)、有名なる八丁味噌の製造元は大字八丁の早川、太田二軒、菓子は備前屋のきさらぎ、三徳屋の淡雪、劇場は寶木座と三銘座ぢやが、近日花角力を遣るとて、劇場中に土俵を拵えて居る、二座中の何れであつたか記憶しない、新聞は興參新聞、三河商工新報、三河之實業の三種ぢやが、日刊は興參新聞だけぢや、藝妓は八十八、本年の狩獵免狀は甲種四、乙種五十三、額田郡の人力車二百八十四、大八車千二百、馬車二十三、運送馬車一千さうナ▲岡崎電燈會社は水力電氣を用ゐて居るが、其水源は額田郡瀧脇村の山中に在るのぢや、大きな瀑布があるのでも無く、溪流を集めて高所より直下せしめ、人造瀑布を拵えて居る、爾うして岡崎の電燈點火數は二千百六十三さうナ▲淺傳樓の廣間に久保田米僊が盲目後に書いた富士がある、これは新築を祝したので、金仙が鶴を畫き添えて居る、今の同樓主人は淺井賞平氏ぢやが、同氏の父上は米僊と意氣相投合しさうな人物ぢや、今朝手から行李辨當を詰めて記者に

與へたが餘程凝つたものである▲小泉、宇都野二氏と本宿村法藏寺を見物して、御油町へ來た、同町萬屋まで豊橋から出迎へられたのは平松市藏、中村彌十郎二氏で、記者は前二氏の手から後二氏の手引渡された、小泉氏は新聞賣捌業で用序でに更らに十餘丁同行された、昔し彌次、喜多が狐に魅まれた御油の並木は今尙ほ醜然として晝でも暗い處ぢや、

十一月十八日

遠州白須賀

笹屋にて

東西兩京の中間に位せるに於ては、名古屋も岡崎も豊橋も濱松も同じ様であるが、名古屋岡崎は六分以上關西趣味、濱松は八分以上關東趣味なので、東西兩趣味を半分づゝ混和して居るのは豊橋である、豊橋人は頭髮から面皮から腰部から踵まで關東人種とも付かず關西人種とも付かぬ怪物で、特に舉止、言語、音聲など、關東的に刻返つた處もあり、關西的にデレリとした處もあつて、殆んど端倪すべからざる代物ぢや、先づ過半は東西の好趣味を混融した紳士淑女で、東西の惡趣味のみを採用して居る人は極

々少い▲吉川通れば二階から招くてふ吉田時代に較べると、殆んど總ての點に於て進歩し膨脹して居る豊橋は、醜業婦賣淫窟だけ縮小して居る、而も此處に旅團の置かれである爲めに、五十四の貸座敷、百七十八の娼妓は僅かに餘命を繋ぎ居る▲藝妓は百四十九、人力車は二百二、料理屋(飲食店を含む)は百三十八で重なるものは千歳樓、醉翁亭、更科、宿屋は百二十九で、産物の重なるものは納豆、竹輪、筆などぢやが、近在からは多く薯が出て川越の其の如く、到る處吉田芋と書いた看板を見受ける▲昨夜は平松、中村二氏の外、小坂井まで出迎へられた三新聞社員諸君及び有志諸君に簇擁せられて豊橋へ着し、一個の醉漢且つ管巻き且つ鼻歌唄ふ者の交り來るを橋頭七日月の光微かなる邊に失ひ、千歳樓に浴し食し宴會に席末を汚し、下手な旅行談を聴て貰つた、席上議論あり、俳話あり、天狗煙草禁止演説あり、劍舞あり、素謡あり、餘興として自ら出席したる落語家あり、藤波蛙流氏の贈られた二句は『小春日や宮路に暮るゝ七日月』と『行程幾里雪は都の土産哉』、葛城亦夢氏の贈られたのは『健脚の爪先に散る落葉哉』石川球外氏のは『長き夜の秋の句なんど聞し給へ』、淺岡昇旭氏のは『笠取

れば日は暮れてけり雪の道』煙巖氏の詩は『歸鬢秋寒貢菊香、尊鱸江廓又斜陽、龍行虎步仗霜劍、燕雨鴻煙滿錦囊、奇骨半生驚薄俗、名言一夕說觀光、想他來日來城子、青眼高歌邀覆觴』ちやつた、兩聯不敢當々々々であるが、錦囊二字は不妥當らしい、

十一月十九日

遠州入出

丑孫方にて

遠州へ來ても尙參州まきの事を書かねばならぬ、尾參は東洋第一流の英雄を出した地だけに名所舊跡が多いが、豊臣の方は僅か二世で亡びたので其名所舊跡は保存せられず、徳川の流れは十五世に及んだので、其名所舊跡が保存せられ誇張せられ終に錯を生じたのぢや、記者は岡崎行脚俱樂部諸氏の案内に頼つて、岡崎附近の名所舊跡を紹介したが、尙記し漏して居る分が多い▲家康産湯うぶゆの井と云ふのは、岡崎の西入口なる右側に在るが、立派な厚板で屋根を構へてある。夜中案内されてバツキリ見得ざつたのは残念ぢや▲安倍の晴明が掘つたと云ふ井は、伊賀八幡宮へ行く道の右側に在る、これも屋根が構へてあるが、却々善く湧く井で、附近二十戸許は此井水に頼つて居るケナ、

晴明が住つて居た家と云ふのは、逆尺町の北側に在つて大な家ぢやが、今は瀬戸物商が住つて居る▲小泉、宇都野二氏に案内された法藏寺は、古色蒼然たる建築で、石段上り口の左側に清水がある、これは家康が手習水に用つた水との事ぢや、上記し來る所は、案内者諸氏も記者も一々信ずる譯でなく、傳聞の儘を案内され、案内された儘を記したのである▲法藏寺の所在地なる本宿村に、法藏寺團子と云ふ串焼團子がある、記者は此團子屋に休んで淺傳翁の拵えて呉れた行李辨當を食つたが、家が穢いのと團子焼く老爺が穢いので、名代の團子を食はずに仕舞つた▲昨朝は千歳樓へ訪問された杉浦氏の扇面に『神苑の芝生に散れる紅葉哉』草枯れの古戰場過ぐ夕日哉』など云ふ駄句を書き、石川球外、岡田撫琴二氏の俳論を聴き、藤波、平松二氏に訪はれて、午後立つたが、警察署で手間取つた爲めに、藤波氏に約した通り參陽新報社を訪はざつたのは不本意千万、偏に寛恕を請ふのである▲去る十四日の紀行中に名古屋新聞の賣れるのは尾參二州と伊勢の北部云々と書いたが、美濃の東部と南部、駿遠の西部へも賣れるケナ、相手が同業者の事ぢやから、殊に念を入れて訂正し置く▲昨夜來雨、今日

の午前は風、午後より風に雨を加へ、新居より舞坂への渡舟は危く見えた、風雨にも寒暑にも感謝するのは樂天の樂天たる所で、大に感謝した、殆んどアーメン的に感謝した、理由なく感謝したのでなく、天が記者の旅行の隠居老爺の如く平穩無事なるを憫み、記者の紀行文の平凡報告の如く、銀行、會社、役所、學校、宿屋、料理屋、人名、數字の行列なるを憫み、氣象崢嶸、天馬騫空的の紀行を書かじめん爲めだらうと感謝した、感謝したけれども、其危く見ゆる渡舟には乗らないで、新居より田圃路を辿つて入出村まで来た、言ふ迄もなく濱名湖を一周する積りなのぢや、此間の行程餘り遠くは無いが、忽ち湖畔に路を失ひ、忽ち河湖に橋を捜し損ひ、蝙蝠傘の骨を折られ、糸だての紐を吹きちぎられ、帽子を吹き取られ、我體軀さへ一度は河中（幸に水なかりし）へ一度は田中へ吹き墜された程ぢやつた、

十一月二十日 遠州濱松 花屋にて

昨夜の宿屋丑孫てけ厚い眞鍮の火鉢を出したが、其縁に『爲兩親菩提寄附者室町住出

羽大椽宗味作、貞享元年子六月吉祥日興國寺』と鐫つてあつた▲丑孫方の女中は力士の様に太つて居るから力が強いだらうと寝めて遣つた所が、大に力自慢を始めた、ソコで男と相撲取つたところがあるかと擲擲つたが、サスガ田舎者だけに顔赤めて伏目になつて居つた、これが悪擦れた女ならば『貴郎の様な瘦法師なら三人や四人來ても負けません』とても答へて訥辯の我を逡巡せしめるのぢやが、二十五六にも爲つて悪擦れて居ないのは、其貌の裏天的なるにも困らうが、田舎の頼母しい所ぢや▲入出を立つて知波田、下尾奈、鶴代などを過ぎ三ヶ日て晝飯を食ひ、今朝認めた郵便物を三ヶ日郵便局で投函した▲知波田、下尾奈間はチョツとした坂で、都人士を辟易せしむるに足るが、徒歩旅行者に抵抗するだけの力は無い、三ヶ日から東濱名村を過ぎ、引佐峠へかゝるが此處も大したとは無い、けれども青萍大先生をして戯でない戯ぢやなど、正誤せしめる位の價值はあるかも知れない、以上二坂の外に小さいのが、尙二つ三つあつたが、四五足の草鞋を破らないので、我紀行文未だ活氣を發しない、さりながら昨日天に感謝したのを取消しは仕ない、坂路の高卑長短に關らず、登れば則ち湖上の風景

凡ならず、一坂自ら一坂の眺望ありて、變化百山、晴好雨奇、况して昨日の雨は風を加へて横まに湖上を過ぎたので、百千の機女風に向つて絲を亂したる如く、孟母幾隊機を断つ如く、風が縦か雨が横か殆んど辨ず可らざる有様ぢやつた▲氣賀警察署へ寄つた所が、一警部は二六新報を愛讀して居るとて見せられた、而も濱松へ行くには馬車があるかと教へられた、二六新報を借讀しつゝありし記者は、標題の六字「徒步競争旅行」を指示し、彼は成程左様かと合點した、山靜似太古、日長如小年、氣賀あたりでは人情自ら恬淡で、劇職に在る人でも仙風道骨を備へて居る、齷齪として會社や役所へ出入し器械的に數字を列べて平凡役人的の報告を書き、隱居旅行、コンマ以下旅行罵倒されてる奴の氣が知れない哩▲新居風には渡を止して、氣賀の無いやうに廻らんせ、いくら今から掛川でも呑牛さんにや金谷せん、樂天とも言はるゝ男が馬鹿げたとを言つてるぢや無いかと笑つた者がある、顧みれば八朶の芙蓉屏顔を夕日に向けて、マア、マアに笑つて居つた、記者の足は、何時の間にか中川、三方原、曳馬の三村を過ぎて濱松町へ入つて仕舞つた、濱松新聞の相佐新次郎氏と新聞賣捌林彌十郎氏を訪ふ

て此家へ案内された、

十一月廿一日

遠州濱松

大米屋にて

『遠洲濱松狭いやうで狭い』とは昔の事で、今は狭いやうで廣い處となつて居る、東西二京の中間に在つて、商業の盛なのは名古屋、工業の盛なのは静岡、爾うして工商業共に盛なのが濱松である、先づ濱松工業の一斑を紹介しやう▲第一が大日本樂器株式會社、これは明治十九年の創業で、重にピアノを製造して居るが、株式會社となつたのは三年前である、販路は内國七分、外國三分、大賣捌は東京の共益社と大阪の三木書店さうナ▲頃日樂器製造の最も盛なのは米國で、疾くに佛境二國を壓倒して居る、これは米國に原料の多いのと職工賃錢の幾分か廉いの原因して居るケナ、所が濱松に於ては、勿論米國よりも賃錢が廉い、爾うして米國の製造に較べて劣らない、であるから近來は米國から注文がある、樂器製造に於て世界獨歩と稱せられて居る米國から注文を受けるのは、明かに其代價は彼よりも廉く、其品質は彼に劣らないとを證して居

るので、最も有望なのである、ソコで原料の騰貴、賃金の騰貴等に因つて、代價を高くせねばならぬ必要が早晚起りはせぬかと云ふに、先づ十年や二十年の間は其必要は起らない、原料は櫻が四分、姫子松が四分、黒松が一分、朴ぼが一分で、荷作り箱には椗と梅を用ふが、原野を買入れて殖林に着手して居るから、十年二十年の見込は立つて居る、職工の賃金は如何かと云ふに、同社では分業的であるので、他へ行けば四十銭位の日給しか得られない者に七十銭位遣つてゐるので、近き未來に於て左程増給する必要は無い、今日迄の所では、社長山葉寅楠、副社長樋口林次郎二氏の縁邊から高等の職工を用ゐる、其他は確かな保証人ある少年を本人の希望によつて入合せしめ、見習生として遣して居るが、何れも世間へ出て通川の出来ぬ仕事を習得した上に、賃金は割合に宜い方なので、從來一回も同盟罷工に類した振舞は無かつたとの事ぢや、して見ると原料と賃金に暴騰を來すの思は極めて少い、一つの杞憂は外國と戦争の始つた際に樂器の賣行順に減少するが、如何に斯る時變に處すべき乎と云ふに於て、ソコで職工をして日用具若くは戦時用具を作らしめる工風もしつゝあるので、森町に木工

會社を建て山葉社長が毎々入浸つてゐるのも浮氣ては無いとの話▲さて樂器會社は、米國と對抗するに足る程の手を持つて居ながら、何故にドシ／＼外國の注文を受けて大輸出を爲すやうに業務を擴張せぬかと云ふに、同社の職工は數年の學習を要するので、他の職工の様に一時に増減する事が出来ない、爾うして外國の注文者は、百臺とか百五十臺とか注文するが、甲の注文者には今月中に出來上ると約束し、乙の注文者には來月中と約束し、丙の注文者には再來月と約束する、彼等は我事情を知らないで、大日本樂器會社など威張つて居ても、僅か百臺か二百臺のピアノを製造するのに二ヶ月を要し、三ヶ月を要する乎、意氣地のないものだと嘲る、注文者は多くても、注文者自身は己れのみ注文と思つて居るからぢや、斯る嘲笑を受けるのが厭なので、餘り外國へは吹聴しないさうナ、

十一月廿二日

遠州見付

井澤屋にて

大日本樂器株式會社の爲めに力癩を入れ過ぎたので、帝國製帽株式會社、日本形染株

式會社、濱松時給漆工場などを、見付まで来てから紹介する様になつた▲帝國製帽株式會社で一日の製造高が三十一年度は四十ダース、三十二年度は四十三ダース、三十三年度は四十八ダース半ちやつたが、それで職工の数が年々増して居るかと思ふに却て減つて居る位なんで、労働時間とても依然として増して居らない、して見ると職工の熟練と監督の行届くのが主なる原因で、毎日の製造高が増して來たに相違あるまい▲同社で用ゐる羊毛は一日平均百五十英斤位で、一英斤は一圓二三十錢の物さうな、此羊毛が眞綿の様に柔かに滑くなつて機械から繰り出されて來るのを、一工女が半楕圓形（即ち縁なし帽子形）の回轉しつゝある機械へ手敏く巻き付け、適度の厚さに爲つた時に抜き去る、傍に一人ありて一々これを整理し洗練部へ送る、洗練部より壓搾部、壓搾部より乾燥部、乾燥部より摩擦部、而して染彩部、日干部、縁付部、裏絹部、リボン付部、磨飾部と云ふ様に渡り渡つて漸く一個の帽となるのちや、以上の順序中に記し誤り記し漏らした所もあらうが、先づ大要は斯う云ふ具合である▲同社の職工は百二三十人で男女相半ばして居るが、男工は最下が二十三錢で五十錢以上の者が多部分

を占めて居るから平均四十二三錢と爲り、女工は十二三錢より二十七八錢迄ちやが、これも上の方が多いので平均二十三四錢と成さうな、労働は午前六時三十分^{まで}に始まり午後六時に終るのちやが、正午から三十分間が休憩時間となつて居る、平生は一日と十六日だけが、休業ちやが、暑中には日曜を休むとに爲つて居る、賞與法は如何かと云ふに、平常勤務心得方の賞、技術上の賞、皆勤の賞の三種に分け、皆勤の賞には一ヶ月皆勤、一ヶ年皆勤の二種ある、年末には誰彼の差別なく心付を遣るが、これは等級頗る多く方法甚だ複雑であるとの事▲製帽會社の分工場には製絲部と機織部がある、製絲部に於て一ヶ年に潰す繭は、九百石乃至千三百石位で、繭一升到は絲九匁五分ぐらゐ取る、爾うして其生絲は我國で重に福井邊へ行き、外國では重に米國へ行き縦絲に用ゐられるが、製絲部の工女は七十人計りて、絲十匁に付き三錢五厘以上の賃錢である、機織部の工女は五十人計りちやが、これは幅の廣い物を織るのでなく、十八臺のリボン織器機が動くのを監督して絲の切れた時に繋ぎ線織器械其他を見廻る位で、自ら織らないのである▲日本形染株式會社で始めた松風印大島染と云ふのはチヨト面白い、從

來の形染と云ふ物は八寸乃至一尺位の形紙を用つて染めたので、細かい柄になると器用な職人でも五反乃至七反位しか染め得なかつた、のみならず八寸乃至一尺毎に形紙の織目が見えて實に不體裁な物ぢやつた、所が池谷七藏と云ふ仁が三年間研究して發明した形染は、真鍮薄板の形拔器械を筒形にして其の中にロール形の糊付器械を嵌め兩端に周圍三寸許の小車を付けて長い臺の上に展べられた木綿の上を回轉せしめるのぢやから、十人ばかり居れば一日に千反ぐらゐる糊付が出来る、糊付の出来たのは之を乾かして染め、半日か一日干して、河水で糊を洗ひ落して仕舞ふ、糊の落ちた處は勿論白く抜けるので、薩摩飛白、久留米飛白に類した物も随分ある▲今日までの柄数はチヨト三百許りもあるが、形拔器械は日々新奇なのが造られつゝある、糊は糯もちこめを用ふのぢやが毎月二百五十圓許の糯を要する、糯も糊の中へ混和するのぢやが、これは小紋糯と稱し三年以上経過した糯で、毎月七十圓位に上る、其他は石灰及び藥品を少しばかり混和するのぢやゲナ▲同社の男工は三十、女工は二十五、其他は見習五十ぢやが、男工の日給は三十五錢乃至一圓、女工の日給は二十錢乃至三十錢、見習は十錢以上さう

ナ、労働は朝六時に始まり晚五時に終るのぢやが、午前九時より十時迄の間に二十分、十一時半より十二時まで三十分、午後も時を見計つて二十分、總て一時十分程の休憩を興へるとの事▲同社の賣捌は、東京で本石町の森五郎兵衛外數軒あるが、三井呉服店や白木屋などへは森から遣つて居るゲナ▲濱松蒔繪漆工場には一大發明家が居る、古今東西色漆の種類は朱黒青黄等に過ぎない、所が紀州黒江の井上楠之助(號爲山)氏は塗物の産地に生長し、十四歳の時より三十年間研究の結果、三十幾種の色漆を發明した、爾うして彼が出京して漆工社會に多少の名聲ある某に謀る所あるや某は他へ話すは不利益なり我に話さぬは卑劣なりとホコトンの詭辯を揮つて、愚直なる職人に秘密を打明けしめ、秘密を聴き了つた後は、兼て預かつて居つた井上氏の息子を虐遇して放逐したとか、

十一月廿三日

遠州見付

井澤屋にて

昨夜當地へ着き、警察署と中遠日進社へ立寄つた、日進社主小長谷勝之助氏は早速此

家へ案内せられた▲静岡縣下で葉煙草を多く作るのは、磐田郡の見付附近と富士郡の大宮附近なので、大宮と常見付に葉煙草専賣支局がある、今日小長谷氏と専賣支局庶務課長山本九十郎氏を訪ふて、葉煙草の倉庫其他を見せて貰つたが、頃日は葉煙草收納の季節なので、日々二百名以上の收納者あり、荷車の人足など多勢附隨し來る爲め支局門内千人以上の群集を見ると珍しからず、事務の煩雜一方でない、今日新嘗祭で煩雜な事務を徹活に取扱ふ手際を御目に懸け得ないのは残念であると山本氏の話▲葉煙草を土葉、中葉、本葉、天葉と分けて居る、土葉とは其名の如く最も土に接近して居る葉、天葉とは梢(?)て天に接近して居る葉、其中間か中葉と本葉なんて、天葉の次に位して居る本葉が一番味が好い、茶ならば天葉が好いのであるが▲最初政府が葉煙草専賣を官業とした際、本葉を買ひに來た者には直に本葉を何貫目出して遣ると云ふ風に、一々分類して置く考であつたが、幾萬捆の葉煙草を取扱ふのに迎も分類して倉庫へ入れることは出来ない、倉庫の敷を幾倍し、局の地所を幾倍し、職員を幾倍したならば分類して置くことが出来やうが、巨額の經費を要するから到底行はれ無いゲナ▲葉煙草

の等級は三十六等に別けてあるが、静岡縣のは十二等以下である、磐田郡のは最も淡泊で癖のない烟草なので、何處の煙草に混和しても其香味を混亂しない、隨て喫用者に不快の感を催さしめないとの事ぢや▲磐田郡の重なる農産物は米が十萬五千七百五十六石、麥が五萬九千二百石、葉藍が十六萬五千九百九十三貫、葉煙草が十五萬八千九百三十三貫、甘藷が百六十四萬六千十一貫位なものぢや、甘藷の如きは目方が重いから、目方はかりでは比較が出来ない、試みに作付反別を調べると米が七萬反弱、麥が三萬五千四百反餘、其次が甘藷で七千反餘、葉煙草と葉藍は四千反餘である▲煙草の話は何處かへ外れて仕舞つたが、専賣支局の次に見たのが、東海煙草株式會社である、同社の巻煙草は錨印を商標として居るので、其品質香味等によつて一號より十號位まで別けてある、男工二十幾名、女工百幾名を使つて居るので、規模は小さいが、正直で勤勉で堅固らしい、錨印と云ふので海濱の喫煙者に歓迎されるゲナ▲見付尋常小學校長島倉幸吉氏を訪ふて、同校の五階に備へ付けある太鼓を見た、此太鼓は却々來歴がある、元龜三年家康が三方原に敗れ退いて濱松城に據つた時、信玄は勝に乗じて追

躡した、所が城門が明放されてあつて、太鼓が地響きのする様に搦れて居る、ソコで一世の梟雄たる信玄も伏兵あるかと疑はざるを得ない、且つ疑ひ且つ懼れて背進して仕舞つたので家康もホット一息胸を撫で下した、此時太鼓を搦つた先生は酒井左衛門尉忠次であつたとは讀者諸君が疾くに御承知である、記者の眼に映じた太鼓、即ち其太鼓なので、市川團十郎が嘗て新宮座に世擲太鼓功よはやくわいこうのふせしを演ずる際、此太鼓を借りたいと申込んだけれども、學校の物を劇場へ貸すとは出来ないと拒絶した、其後更に俠客清水次郎長に頼つて懇々借用したいと申込んだが又拒絶した、左衛門尉の靈魂の入つてる太鼓を爾う輕々しく貸して溜るものかと校長の大氣焰▲午後三時過から山本、平野、松下三氏と共に磐山原の自轉車競走を見物に行つた、周回十四五丁の場を四人の自轉車乗りが三周したが立派に勝つたのは豊橋の村山氏、忽ち先ち忽ち後れ最後に四五間だけ後れて居たのが夏目氏であつた、

十一月廿四日

遠州掛川

山口樓にて

濱松以東の風俗、人情、言語が、八九分以上、關東的なる所以を考へて、其原因を詳にし得ざつた記者は今日其重なる原因を聞くとを得た▲維新前は新居に關所があつて決して婦女を通さなかつた、若い男が二人連て伊勢參宮でもすると、此奴例の驅落だらうと疑ひ、乳房ちちを見せろくと入釜しく検査した、ソコで萬已むを得ざる要事ある、婦女は姫街道と云ふのを通つた、姫街道とは濱松より氣賀、氣賀より三ヶ日、三ヶ日より富岡、爾うして豊橋へ出る道、即ち過日記者が半分だけ通つた道ぢや▲言ふ迄もなく、風俗、言語などは、政治、法律、經濟、工事等と性質を異にし、七分以上は柔性の勢力に支配されて居る、であるから婦女の通行を禁止して、萬已むを得ぬ場合にも大迂廻せしめるのは、風俗、言語の流通を堰止めると同様で、新居より東と西は支那朝鮮と大差が無かつたのぢや、宜なる哉劃然として別天地の觀あると▲見付て紳士の細君を觀察した、彼女は客に向つて曰く「夫は植木氣狂あぢかひで御座いますよ、植木いぢりが始まると止とどまは御座いません、貴君方の入あッしやることア判つて居ながら、今日も彼の通り始めて居ます」、更に夫を呼て曰く「良人モ一好い加減にして入あらつしや

いナ、お客様が待つて居らつしやるのに……』主人馳て座敷へ上り來るや、彼女は「ア、く足が濡れてる』とて足拭を抛り出した、東京に於ける一種の細君は、其感化を見付あたりの家庭にまで及ぼして居ると謂つても可いでは無いか▲今日は松下、平野、山本、田島四氏に送られて見付を立つた、田島氏は洋服、烏打帽子、麻裏草履で、脇に折カバンを夾み、先づ洋服屋の注文取と云ふ打扮、山本氏はヒョロ長い軀軀で矢張り洋服ぢやが、帽子は鼠色の縁廣で其縁先をチョッピリ上へ刎ね、脚絆、草鞋、宛然工事監督者の觀あり、平野氏は紋付の木綿羽織、黒帽子の縁廣を目深に被り、菓子（松風）の小包を後頭に負ひ、唐紙の半截をクル／＼巻て持つてるなど、如何見ても偽筆の書畫でも賣り歩きさうな風躰、中にも松下氏は太縞の着物、細縞の羽織に、焦茶の中折帽子で、古着屋の手代然として出掛けた▲路は袋井から左折して萬松山可唾齋へ向つた、可唾齋は應永年中に惣仲天閻和尚が開いたのて、三尺坊威徳大権現を祀り、故熾仁親王殿下の書かれた「秋葉總本殿」の金字額を掲げ、曹洞宗屈指の道場、東海道第一の名藍と號して居る、此山の霜楓は今方に二月の花より紅と謂ふべきものぢや▲

可唾齋から油山へ行つたが、同山は行基菩薩が開いたのて、南無薬師瑠璃光尊は天平勝寶元年に行基の作つたものさうナ、薬師と云へば言ふ迄もなく眼病の救主なんて、隨て此山には清水がある、瀧がある、瀧は極々細いもので、斷水するともあるが、斷水すれば何處からか引て來る様になつて居るゲナ▲油山から雨催しの空となつた、油山と掛川の間あたりから寒雨面を撲つて來た、今朝晴天であつたのて、記者と同行された四君何れも傘を持たれない、記者だけは蝙蝠傘を持つて居るが十九日の風雨に骨が二三本折れてる奴ぢやから役に立たない、併し記者は「糸だて」を以て幾分か雨を凌ぎ得た、四君は氣の毒にもビッシヨリ濡れられた、所が掛川へ一里許りの垂水村に於て雨は霽れた、夕陽背を照して濕衣は半ば乾いた、而も路は泥滑に風寒く、手指麻痺し、足指稍痛きを覺えた、記者は當地へ着て直に小笠郡青年會幹事長宮川正氏に此家へ伴れられ、同氏及び松浦喜八氏（青年會幹事）馬淵貞吉氏（叢文堂株式會社員）と快飲したが、氣の毒で耐らないのは寒風に吹かれつゝ、夜道を見付まで徒步して歸られた四君である、記者は最も長く四君の高誼を記憶するに相違ない、

十一月廿五日 遠州金谷 石橋樓にて

駿州と遠州は同縣下に在つて、稍人情風俗を異にして居る、ソコで遠州は進取氣象に富み、駿州は保守退嬰の傾向ありと評する者がある、記者は容易に其言を信じないで二州から出て居る人間を查^{しら}べ始めた、遠州の方は如何いふ人が出て居るか、岡田良一郎、岡田良平、一木喜徳郎、金原明善、江間俊一、松本君平、神谷鶴伴、内田遠湖、松島十湖等である、駿州の方は如何いふ人が出て居るか、江原素六、島田三郎、角田眞平、山路彌吉、角田勤一郎、遅塚金太郎等の面々ぢや▲遠州の東部から駿州の西部にかけて、一二の方言がある、「ヤツキリする」は東京の「癩に觸る」、「ツラ」は東京の「だらう」、「エレ／＼ゴセツポイ」は東京の「ヤレ／＼セイ／＼した」即ち何か面倒な仕事が付いた時に出る言葉ぢや、古老の傳ふる所に據ると、東照公様が台徳公様に天下をお譲り遊ばされた時、エレ／＼ゴセツポイと仰しやつたゲナ▲小笠郡青年會では昨日小笠山に於て同郡から今回入營する者の爲めに歡送會を開いたが、疾風枯葉を拂

ふ邊に數百人を集め、勇壯活潑痛快淋漓の辯を揮ふた宮川氏は大得意ヅラ▲今日は馬淵貞吉氏に案内されて、東海訓盲院、警察署其他へ行つて、訓盲院に於て厚紙に鈍錐で作つた凸出星形文字（星の數と位置を以て文字の符號を作る）を見て盲人指頭の鋭敏なるに驚いた、但だ漢文直譯體の歴史など教へて居るのは餘り功益が無ささうに思はれた▲馬淵氏の手から小笠郡東山口村の青年會員鈴木正一、榛原幸藏、加藤清作三氏の手引渡されて、掛川を出たのは二時半ぢやつた、彌次、喜多が盲人の肩に扶けられて渡つた場所を見て彼等の意氣地なさを笑ひ、親鸞上人の手に畫かれた佛像を見て其の眞偽に惑ひ、夜泣石を見て嘗て東京まで行つて來た御苦勞を慰藉し、日暮れてから林叢を探つて中納言中御門宗行の塚を見た「昔南陽縣之菊水汲下流延齡、今東海道之菊川宿西岸亡命」と刻した碑でもあるかと思つたら、單だ「宗行卿之塚」と刻して文久三年癸亥二月水府源進建之とあるばかりぢや▲新道から一二丁入れば可いと云ふ事ぢやつたが、十一二丁入つたので舊道へ近くなつた、五六丁歩いて菊川宿の端れへ出たが、大月皎々として高く昇つて居る、東坡の後赤壁賦など思ひ出して、路の無い

林藪に迷ひ入つた事も少しは興味ある様に感じた、案内された三氏は、斯様な事は始めて、いやうと氣の毒さうに言われた、併し記者は此位の事で、呑牛血達磨那珂博士の夜行當時に比肩し得やうとは思はない、記者の長所は平凡に在るのぢや、他の諸君が逆も耐へ得ない平凡境に處して着々事務を執りつゝ歩いて居るに在るのぢや、何とか文學士とやらは我等を評して旅行でない、フラツキぢやと言つたさうぢや、有難く頂戴したいが、記者の如きはフラツキとまでも行かないのぢや▲七時に金谷へ来たが最早渡舟が出ない、島田へ泊る豫定が狂つて仕舞つた、

十一月廿六日

駿州藤枝

柿傳樓にて

昨朝、掛川の山口樓へ小包が届いた、何處から何を寄越したかと調べて見た所が濱松の大米屋が高襟的シャツを寄贈したのである、記者は豫て關西人を濃厚と想ひ、關東人を淡泊と想つて居つたが、關東的趣味の濱松人が善く物を呉れるのは何故だらう▲兎に角高襟的シャツを貰つて、手袋を修めなくなつた、併し立派なのを買ふとが出来

ない買はうとしてもチョット得難い、今朝金谷で買つたのは卅五錢のである、從來日本服で懐手、手袋の必要を感じなかつた我は、手袋の必要を感じずる様になつた、情け無い事ぢや▲島田町へ来て例の警察署を襲ひ、警察署を出て半丁ほど歩くと、三四人我を待受けて貴君は樂天さんかと尋ねられた、ソコで神戸吟風、五條禎治(新聞賣捌)、石間英太郎三氏と名刺を交換し、記者の出發前草鞋料を贈られた山本文造氏方へ石間氏に案内され、一茶して二氏に甘露亭と云ふ料理屋へ伴られた、島田へ来れば斯く饗さるゝとは豫め判つて居たから、昨夜着すれば歩行時間を縮めるともなく萬事都合が好かつたのぢやが宗行卿之塚は我最後(昨日に於ける)の三四十分間を奪ひ、大井川の渡舟は我に三十分の猶豫を興へざつた爲めに、我は夜の仕事を晝間する様になつた、饗應を受けるのが夜の七時から十一時までにて及ぶとも我は快く飲み快く談話を聴くが、晝間二時間の饗應を受けるのは行程三里を奪はるゝのぢやから我は悶える、のみならず尻が落付かないから談話をするとも聴くとも出来ない、併し從來晝餐を受けたとは幾度もある、今日の様に悶えた事は無い、今日は何故に悶えたか、今夜静岡へ着する約束が

あるからちや、違約するが我に取つて苦痛の甚しいものぢや、ソコで静岡へは明晩行くと打電して貰つたが、打電したからユツクリ談話を聴いて居ると云ふ譯に行かぬ藤枝にも待受けて居る諸氏があるので▲以上記し來る所は、實にツマラヌ興味のない事ぢやが、人目から愉快らしく見ゆる旅行者の裏面は斯云ふ事もあるかと合點する讀者があらう▲山本氏と清水幾造氏に送られ、枋山と云ふ處で藤枝の歡迎者山口鹿治郎氏に逢つた、纏て前二氏に別れたが、彼我ともにユツクリ話し得ないのを大遺憾とした、

十一月廿七日

駿州静岡

大東館にて

昨夜、藤枝の柿傳樓に於て晚餐會を催され記者の旅情を慰められたのは、笹野宗次郎、山口鹿治郎、佐藤鐵藏、勝見鎮吉、伊藤靖三五氏と、新聞賣捌業鈴木幸五郎、池ヶ谷淺一郎二氏である、山田氏は『音信ないのを腹立ながら主の顔見りや笑ひ顔』てふ都々逸と『健脚の旅行家來る小春かな』てふ俳句を贈られた▲今日、山田、佐藤二氏の

案内で、蓮生寺と洞雲寺跡、警察署等へ行つた、蓮生寺は熊谷蓮生法師自作の壽像を祀つてあるので、住職は恭しく其山來書一卷を讀みたる後、徐に籠を開て參詣者に拜ませる、其山來書讀誦の時間確かに二十二分二秒ばかりぢや、蓮生法師の詠に曰く、『とにかくに我往生の大事をば勇み進みてさきかけをせよ』▲洞雲寺は昨年の春か一昨年の冬焼けたのぢやが、某記者が探涼に來た時誤まつて蓮生寺が焼けたと書いたゲナ、記者も卒聞瞥見の儘を書いて居るから、毎々某記者の様な間違を遺つて居るだらう▲藤枝町の後の小山は、山上が平かて富士を見るに適して居るから俗に富士見平と云つて居る、昔し足利義教は富士へ登る勇氣もなく此處で眺めて、終生の誇として居つたゲナ、我々も百五十日位の徒歩旅行を大旅行の様に思つて居ると、義教と同様の嗤ひを遺すに相違ない▲山川、佐藤二氏に鮮屋へ伴られ、次で警察署を襲ふたが、内勤の某氏は統計に關する材料を呉れた後で、藤枝町俳人(舊派)の名まで書て呉れた▲山田、佐藤二氏に藤枝の町端れに別れ、岡部宿で明治十八年一月二十七日に泊つた木賃宿小平井屋を懐かしく思ひ、有名な宇津谷峠を越え、丸子宿を淋しく感じ、日暮れて寒き安倍

川橋を渡り、静岡呉服町へ来て静岡新報社を訪ひ、島田錫吉氏に逢つて此家へ案内された、此の家の主婦が偶然に二十六番へ御案内中せと女中に命じたのが大層氣が利いて聞えた▲今夜此家に附屬してゐるホテルで晚餐會を催はされ、静岡新報社の島田錫吉、岩間彌熙、下山五平、關岡鏡川四氏、静岡民友新聞社の菊池彌二平氏及び偶々新報社へ來合せたる齋藤井上東吉氏が出席され、西洋料理で健啖先生に満足を與へられた、

十一月廿八日 駿州静岡 大東館にて

静岡へ来て英氣頗る頓挫した、敵手が歸京して審判までも済んだのが重なる原因たること言ふ迄もない、のみならず最早百五十日の旅行となればイクラ旅行好の記者も倦まざるを得ない、静岡まで来て最早東京へ歸つた心持に爲り積日の疲勞一時に出たのであらう歟、呑牛子の静養時代云々は決して牽強附會でなく我にも當筈あてままるやうぢや哩▲今日は下山五平氏に案内されて縣廳と警察署を襲ひ、淺間神社境内其他を歩いた、知事の志波三九郎氏病後の事とて幽靈然、書記官永井環氏未だ四十路には届かないが

頭は清淨に禿て居る、參事官吉村源太郎氏風采揚らず給仕然として小さくなつて居る、書記官はチョット腕の利きさうな男で意氣頗る盛に秋山君とは同じクラスに居つた杯と話し始めた、知事はチョット横柄に見える男で徒歩旅行かと鼻の先であしらふ風ある上に、何か緊急な相談ありとて參事官をして記者を官房外へ伴れ出さしめたのでグット癪に觸つた、ソコで參事官と應接間て出放題を喋舌つた、彼の迷感想ふべしぢや、彼は嘗て櫻井法學士と同僚であつたゲナ▲淺間神社はナカ／＼立派な建物である、安永三年と天明八年と二度焼けたので、普請好の家光が建てたのは無いが、駿府城代松平信濃守が幕命を奉じて、享和三年工を起し文化十一年に竣工したのが今の建物である、當時これに費した總額は、金九千七百十五兩一步、米六百六石七斗六升五合、銀七匁八分九厘ぢやつたさうで、當時米の相場は一石が一兩ぢやつたゲナ、後水尾天皇の御製に『賤機せんたがの山もうごかぬ君が世になびく名古屋の森の松風』とある、

十一月廿九日 駿州富士川 谷屋にて

大東館の二十六番室は立派な室とは言へないが、二六に因みあるので記者を満足せしめた、其懐かしい二十六番室を立つて傳馬町通(即ち東海道筋)へ來ると、道の兩側から疊や箆等長持を出し、雑具を雜陳して大掃除を造つて居る、疊をたたくやら塵芥を抛り出すやら全然往來止の有様であるのに、肴屋、八百屋及び肥桶の車は其間を縫ふて通る、前程を急いで居る記者はムシヤクシヤして耐らないが、道知ぬ處で脇道へ入るのは面倒臭いので、塵芥の中を十丁ばかり歩いた、町端れへ來ると富嶽巍然として雲表に秀て、日輪辰牌より煦々の光熱を送り、忽ち我塵襟を一洗して仕舞つた▲斯くて富士を眺めつゝ五六丁歩いた處で、『中村さん』と後から呼ぶ人がある、晝餐會て歩行時間を奪はるゝことを大苦痛として居る記者は戰慄して振り返つた、所が例の反齒のニヤ／＼顔の井上東吉氏が遠州から一番流車で着いたとて呼吸遽しく追駈けて來たのである、下山五平氏も二丁ほど後れて駈け付けて居られる、記者は深く二氏の厚誼を謝し、四五丁共に歩いて踏切で別れた、別に臨んで井上氏は一包の小饅頭を呉られた、道々食るも可、子供に遣るも可とて▲十一時半に江尻町を通つたが、警察署と新

聞賣捌所へ寄るとを見合せた、警察署へ寄れば三十分以上を費し新聞賣捌所を訪へば晝餐を饗せられて二時間近く要する、爾うすれば富士川町へ着くのが七時過ぎとなる、寒いのに晩くまで歩くのは大閉口ぢやから、誠に遺憾千万不本意至極ぢやつたが江尻素通りをキメた、袖師村で、數名の子供に小饅頭を與つたが、何れも欣喜雀躍して親の所へ見せに行き、親が態々追駈け來て禮を言ふもあつた▲興津町は江尻町に較ぶると、規模が小さいけれども、有名な海水浴場なので、東海ホテル、一碧樓、三清館など云ふ旅館兼料理屋がある、明治十八年(讀者曰く又出たか、ウルサイ)一月廿八日の朝、伊豫の千個寺詣及び尾張の土方希望者と岡部の小平井屋を立ち、其晩泊つたのが興津の龜島屋か何屋かであつた、毎晩木賃にばかり泊つて居つた者が、偶々普通の宿屋に泊つたので、風呂の立派なのと膳部の好いのに茫然として居つた、而も宿料僅かに十五錢ぢやつたので、物價の廉い當時とは云へ我をして其宿屋の主人を大義俠家大慈善家と思はしめた、今日其大義俠家大慈善家を尋ねやうかとも思つたが、道の南側ぢやつただけ覺えて居るので、何屋ぢやつたか薩張判らない、馳て甲州路への

岐路に立て、當時千ヶ寺詣が重い佛壇を背負つて此處から行つたとを憶ひ出した▲興津から山井までは東海第一の勝區と駿州人の誇る處だけに、右は碧波萬頃、布帆出沒し、左は巉巖絶壁、正面に芙蓉千仞の雪を控えて居るので、恍々惚々の間に足が進んで居る、高山大嶽に一種の魔力があつて我を吸引するのでは無からう歟と思はるゝ程ぢや▲蒲原町は富士が見えないで、甘蔗ばかり繁つた處ぢやが、同地の塗物は、模様が隆起して地が低くて水にも火にも強いので名物になつて居る、併し其製法は極々秘密にして二軒だけで作つて居るから、誂へても直には出来ないゲナ▲四時半に富士川町へ着き、新聞賣捌實業社主齋藤常次郎氏を訪ふて此家へ案内され、同氏及び渡部薫次郎氏、鹽川宇吉氏と晚餐を共にした、

十一月三十日

駿州吉原

高砂屋にて

本日午後、鹽川宇吉、齋藤常次郎(代理)、谷屋伊平三氏、及び吉原町より出迎へられた杉山市太郎、早速舎新聞店員秋山幸吉二氏と富士川町を立た、眼には芙蓉千仞の雪

を眺めつゝ、耳には氣取學堂、粗忽青萍相携へて旅行した當時の珍談を聴きつゝ歩いたので大愉快ぢやつた▲富士製紙株式會社第一工場を參觀しやうと思つたが、第二工場の方を見せると云ふので、態々一里の廻り道をした、同社外交係佐藤長十郎氏は門外へ出迎へて居つたが直に技師黒川道見氏をして工場内へ導き種々説明せしめた、今實物を讀者諸君に見せないで説明だけを記した所で要領を得ないから略して置く▲同社一二兩工場の一ヶ月製紙高三百四十万ポンド、一日の石炭支消高九万斤、一ヶ月溢襖使用高百二十万斤、一三兩工場の一ヶ月木材使用高三千本、職員并に職工は三工場合せて千〇二十二二人、職工賃錢一日平均男三十三錢、女十二錢、休日は毎月一日と十六日、三大祭日と正月三ヶ日ぢやゲナ▲紙の原料は植物質、動物質、礦物質に大別し、中にも植物質が一番多いので、植物の果實より採れる木綿類あり、植物の皮より採れる亞麻、麻、三椶類あり、植物の葉より採れる芭蕉絲類あり、植物の根幹枝より採れる木材類あり、動物質の方は、羊毛、駱駝毛、牛馬毛、鳥の羽毛、家蠶類、野蠶絲類、礦物質の方は石綿類ぢやゲナ▲堀内竹工場は竹行李を製造して居る、昨年の産額は七八萬

圓、今年の産額は十七八萬圓、職工百五十許、男工の日給平均五十錢、女工の日給平均三十錢、休日は一日十五日と正月三ケ日、休憩は正午より五十分間ぢやケテ▲曾我神社及び曾我兄弟の卒塔婆を晚烟模糊の中に巡覽したが、老杉長松轟然たる孝烈の遺跡に雪の崇嶽を背景として居るので、人をして自ら崇高の感を惹起さしめる▲今夜吉原町の有志諸君各々紋付提灯を手にして堀内竹工場前まで出迎へられ、記者を簇擁して此家へ案内され、直に晚餐會を催されたが、出席されたのは、川島延太郎氏外十七氏で快飲快酔十時半散會した、席上最も勢力のあつたのは米穀、楮、三榎其他の殖産興業談で、從來の宴會には聴き得ざつた實用談が多かつた、來會諸君中に實業家が多かつた故であらう▲大宮に於ても池谷邦之助、久保田福次郎、中込源次郎、鹽川信太郎四氏及び新聞賣捌所醒眠堂主一ノ瀬玉吉氏の主唱で記者を待受けられたさうで、特に一ノ瀬氏は富士製紙會社まで態々出迎へられた、同地は記者の友人浩々歌客の郷里なので行つて見たいが満腹ぢやが、吉原町の諸君に違約するところが出來ないので「大宮は順路でないから御待ち下さると思ひ設けませんして何卒どうぞ悪しからず」と詫び入つた、併し吉原の宴席に於て始終大宮の有志諸君に對する氣之毒の感が胸裡を往來して居つた、

十二月一日 豆州三島 相模屋にて

今日吉原を立つて鈴川までの道に所謂左富士を觀た江戸より西行する旅客は大抵富士を右にのみ望むのぢやが、此邊の道路彎曲の爲め富士を左手に望み得るので左富士と稱して居たのである、故に京都から東行する旅客に取つては右富士と謂て宜しい▲鈴川驛へ來て何人の頭にも浮ぶのは何故吉原驛と命名しなかつたかと云ふとぢや、岡崎でも藤枝でも伊賀の上野でも停車場へは遠いので、停車場所在地には、それ／＼の地名がある、けれども皆其所在地名を以て停車場に命名しないで、岡崎驛、藤枝驛、上野驛と命名して居る、何故に鈴川ばかりは數十戸の漁村を以て堂々たる吉原驛を踏付けて仕舞つたであらう▲鈴川の砂山は白砂青松、悠緩なる勾配を蔽ふて居るので、納言參議の遊び場所に適して居る、此處に富士製紙會社の社宅がある、例の外交係佐藤

長十郎氏は此社宅へ我々一行を案内した、一行六人は高砂屋より持つて来た折詰を食つて、纏て佐藤、内田(稱三氏の嚴君)、川島(延太郎氏)三君に別れ、下駄の人、麻裏草履の人は、草鞋に改めて歩かれた▲健康家揃ひの事とて、何時の間にか原町へ来た、原は長くて穢い處ぢやが、一軒だけ立派な家がある、それは植松と云ふ名家で、其庭園には故有栖川熾仁親王殿下の御手植の松、東宮殿下御手植の松、及び徳川十四代家茂將軍手植の松がある、其他の奇木珍卉は一々枚擧するとが出来ない、一花一葉に觸るゝを禁ず必ず一吟を留むべし云々の庭規に従つて、記者は『御手植の松に紅葉の散りかゝる』てふ月並的俳句を記して置いた▲我々一行が庭園を見物してゐるうちに、三人の見物者が新に見えた、豈に計らんやこれは沼津の新聞賣捌蘭契社主人代理中島辰郎氏、同社員平山岩太郎氏、及び小松鹿太郎氏であつて、記者を出迎へられたのであつた、於是乎一行四人は七人となつた、それから記者の長男と二童子が来た、一行十人となつて脚力大に減じた、纏て沼津町の西端れの茶店へ来たが、外岡金聲、立木喜一(相摸屋主人)兩氏及び記者の細君が居つた、此處で平山氏は沼津へ宿泊せしめんと

主張し、立木氏は歓迎會の準備成れりと主張し、互に一步を譲らぬ氣色であつた、記者は三島有志者の準備を水泡に歸するを氣の毒に思つたので、沼津へは明日歸ると約束し、妻兒をガタ馬車で相摸屋へ送り、立木、小松諸氏と某家(小松氏の知人)の提灯を借りて急いだ、三島の津田守三氏は自轉車で來り迎へ自轉車で報告に歸られた、闇中の一里半を甚だ遠く感じつゝ、三島へ來り歓迎會場魚半へ着て、未だ一浴せずして着座、渡邊萬介氏開會の辭を述べて記者に旅行談を促し、記者は極めて簡短に瑣談を結了し、次いで獻酬廢止の動議(記者の請求を容れて)出て、一同盃を手にして起立し、樂天君の健康を祝すとして一吸された、快飲快酔九時半に散會、

十二月二日

豆州三島

相摸屋にて

函嶺の峻、獵川の清、人をして伊豆に三島あるとを忘れざらしむるに足るのぢや、今日の午前は雨勢強くて外出に不便ぢやつたので、妻兒に紀行以外の旅中談を聴かせ、來訪諸君に三島の狀況を聴き、午後此家の主人立木氏と駿豆電氣株式會社を襲ひ、仁田、

費川二氏から田方郡函南村字平井の發電所其他の談を聞いた▲三島高等小學校長清水吉彦氏を始め、職員永野長太郎、渡邊綱雄、山田順太郎、村瀬繁作四氏から昨夜「白牡丹」を贈られた、「私は煙草を喫みません」と言つて返す譯にも行かないので頂戴した、渡邊氏は今朝訪問されたが、同氏と村瀬氏は故村瀬巴山氏の甥であると話された、それで記者は高等小學へ來て旅行奨励談をせよと注文され、喋舌るとは下手ぢやと斷わるのも却て氣取るやうで悪いから受して置いたのぢやが、費川、立木二氏と共に掛けて、十三分間の大演説を試みた、其大要は讀書、算術、作文、習字何れも大切であるが、身體が弱くて二十歳や三十歳で死んで人間と生れた甲斐がない、皆様は纏て軍人、實業家、政治家、其他種々の人となられるのであるが、それには十分身體を強くして置かねばならぬ、私は七月の一日から今日まで百五十日餘り旅行して居るが、瀛車にも人力車にも乗らない、近頃のように便利な世の中で瀛車にも人力車にも乗らないのは馬鹿げて居る様だけれども、出立前に頭が痛んだり腹が痛んだりした私が其後頭痛も腹痛もしない様になつたのは旅行のお蔭であらうと思ひます、併し八百

里や九百里は小さい旅行である、皆さんは二千里三千里の大旅行をして身體を強くし、日本の光を世界萬國の上に輝かすことを心掛けられたいものです、静岡縣は日本第一の高山もあり、箱根八里の山道もあり、富士川、大井川、天龍川もある、先生に率ゐられて修學旅行をせられるも宜し、皆さんが日曜毎に遠足せられるも宜し、成るべく瀛車にも馬車にも人力車にも乗らない旅行をして身體を強くし、二十や三十で死ぬ様にせられよ、先づ斯うであつた▲養牧舎へも行つて見たが、主人津田守三氏が不在で談話を聴き得ず、牛乳搾る有様だけ見て來た、

十二月三日

駿州沼津

杉本屋にて

妻兒は歸京した、記者は沼津へ逆戻りした、心此に在らずして被歡迎器械となつて居る、關中に遠いと思つた三島沼津間は、新聞讀みながら甚だ近く感じた、黄瀬川橋は何時の間にか通り過ぎ、松並木も通り過ぎ、纏て黒瀬橋の際へ來たから、眞直に沼津へ入らないで、黒瀬橋を南へ渡つた、言ふ迄もなく牛臥へ行く積りである▲田圃道を行

くと十數丁、楊原村へ出た、牛臥は何處かと聞くに、牛臥の何處へ行きますかと反問した、三島館へ行くのぢやと答へるとケツンな面して一の路を指示した、五六歳の小供が記者を指してコンシツラ(乞食だらう)と言つたが、其母だか姉だか『お止しッ』と撲つ真似して制した▲應て牛臥山下へ行つたが、門に牛臥仙洞三島館と云ふ看板が掛つて『別荘御入用の方は御申込被下度』との貼紙がしてあつた、門を入つて行くと一二丁、別荘と云へば云はるゝ様な家が幾つもあるつて一番奥が三島館ぢやつた、犬が吠えたので少し引返し坂路を登つた、路盡きて門あり大山別邸とか何とか書いてあつた、某新聞に大山侯夫人を殺すとは書かざつたが、其意味を以て市出三虎的の記事を掲げた時、時事、萬朝等の記者が御苦勞にも此處まで探訪に来て大山夫人を笑倒せしめたと杯思ひ出して、獨りて笑止さに耐へなかつた▲今日は探訪しやうと云ふ目的もないので、牛臥は先づ斯様なものかと大瀬岬を一睨してズン／＼沼津へ來た、永代橋を渡つて淺間神社へ参り、祠官神尾氏の藁屋根が神代的に古びてるのを珍らしく感じ、横丁を抜けると蘭契社平山岩太郎氏の兄上牧氏が蘭契社へ案内された、平山氏應て歸り

來られて、今貴君を迎へに行つたが道で逢はないので牛臥へ廻られた事と思つて、彼方へ向つた、學校生徒が見掛けたと教へたので歸つて來ました云々▲ソコで平山氏と海濱を散歩し、大倉組木工場を一見した、同所は天城山の縦板を狩野川から流して取寄せ、印度行の茶箱を拵えて居る、年々縦板の消費高五六十萬枚、職工十五六名で平均賃錢四十錢ぢやケナ▲今夜、淺間湖畔の開花樓で宴會を催され、來會されたのは、市川銓吉氏外二十一氏で、中島氏開會の辭を述べられ、記者旅行瑣談を試み、献酬廢止は風俗矯正會に於て疾くより實行して居ると市川氏の動議忽ち成立した、各自適意に飲み適意に食ひ、談論縱橫諧謔百出した、應て記者が飯を注文すると、例の健腕を揮へよとて酒を強ひなかつた人が飯を強ひに來た、ソコで記者は今夜は澤山食ひませんと斷つた、果然何故と詰問された『沼津食はずに原は吉原』ですからと古い洒落を持出して、旅行談に喝采しなかつた諸氏をして喝采せしめた、

十二月四日

豆州修善寺

衛生館にて

名古屋以西畿内を中心として山陽道一帯の人は、其言葉遣ひが忽ち丁寧と爲り忽ち粗末と爲る、何か相手の弱點を發見した時は著しく輕侮するらしく見える、參遠以東の人は表裏の別少く、言葉遣ひなども丁寧と粗末とが餘り目立たない、其人物評など酷評も少く諛評も少い▲遠州人は駿州人に較べると、男性的、物質的、實行的である、駿州は遠州に較べると、女性的、精神的、批評的である、濱松邊の人は時間を費し金錢を費して宴會など催さんよりは實用品を贈るが雙方の利益なりと考ふるが如く、吉原沼津邊の人は善く他の境遇心情等を察する様に見える、記者が静岡へ來て英氣頓挫した云々の文字、未だ新聞紙へ出ない前に、「最早東京へ歸られた心持がしましやう修善寺か熱海で二三日静養されるが宜しからう」と説いたのは、醫師牧氏である、紀行書く方が歩行よりも辛いてしやう」と言つたのは贊川氏である、此等の言は淺人の口から出ない、淺人は宴會は徹頭徹尾愉快なもの、筆先の仕事は手足の仕事より氣樂なものと考へて居るので、宴會に列する爲め紀行を書く爲め行程が少くなるは大懶惰者と看做すのである、兎に角、駿州人は批評眼を具して居る者が割合に多い、其實行に短なる

は八方に眼が届くので顧慮躊躇するからであらう▲今日は沼津から近道して修善寺へ來る筈で、北豆新聞會社の井澤氏と黒瀬橋畔に別れたが、前程晝支度の場所不明であつた爲めに矢張り三島へ向つた、三島の西口から右折して田圃路を通つたが、西風の強いのが糸だてを吹きまくり、帽を吹き飛ばし、行步頗る艱んだ、大場、韭山、田中、大仁と車、馬車に脇目も觸らず、大仁に日暮れ、修善寺の案外遠いのをかこちつ、六時二十分頃一點の燈光を頼りに到着した、風力は幾分か衰へたが、寒氣は餘程増して來た、久し振りに温泉に一浴し一杯を傾けたが、宴會に慣れた故か淋しく感じた、

十二月五日 豆州湯ヶ島 落合樓にて

半島國は他と交通の少い部分が多いので、大抵一種の風俗を保存して居る、安房、志摩、伊豆など皆同様で、中には幾分の美風もあらうが、先づ弊風汚俗を保存して居ると謂つて可いのである、試に伊豆に於ける北端の三島と南端の下田を比較すれば、前者は他郷人との交通頻繁なる爲めに、他を見習ふて進歩發達しつゝあるけれども、後

者は自ら別天地を成して居るので、風俗壞亂的の事が餘程多いケナ、志摩^{ミト}の的矢^{マサ}では、良家の處女が嫁入前の純潔を保ち得るもの百に二三との事で、下田の如きは的矢に較べて少し可い位ぢやから、百に五六の純潔處女ありと見て宜しからう、但だ斯る土地に取るべきは、輕薄狡猾等の惡風に染むとの少いのである▲修善寺温泉は征清役後に繁昌し始めた、豆相鐵道もそれが爲めに出來た位で、流車の便を缺いて居る熱海に較べると餘程客を引着け易いが、繁昌は春から夏へかけて四五ヶ月間で、其他は固然寂然として居る、構へを大きくせねば春夏の客を引受けるとが出来ない、大きくすれば客足の少い季節空室と空手(雇人の)を持って餘す、ソコで修善寺の大きな温泉宿は一万圓乃至三万圓の負債して居る者が多いとの事ぢや、温泉宿營業も亦難い哉の歎を發せざるを得ない▲昨夜泊つた衛生館の主人は、以前仙臺邊で中學教師を遣つて居つたさうで、チヨット談話の面白い男ぢや、彼は茶代廢止に就て或經驗家の意見を紹介した、其實夫子自らの意見かも知れないが、チヨット面白い節がある、蓋し從來茶代を出さず或は宿泊料の二三割ぐらゐる茶代を出した旅客は、一二の例外もあらうが先づ金廻り

の悪い側の人と見て差支ない、之に反して宿泊料と同額若しくは宿泊料に幾倍する茶代を出した旅客は、金廻りの好い人に相違ない、今茶代を廢止して宿泊料を五割高くすると、金廻りの悪い旅客の負擔を重くし、金廻りの好い旅客の負擔を軽くする譯ぢや、のみならず、以前茶代を出して威張つた旅客は、茶代を廢した後も威張る、茶代を出さない爲めに溫柔^{オトナ}しかつた旅客は、宿泊料の高くなつた爲めに威張る、収入は増さないで威張る人ばかり殖ては宿屋營業者の立つ瀬が無い、先づ斯う云ふ意見ぢやつた▲修善寺には進歩黨臭味の温泉宿が多いので、政友會臭味の者は衛生館主人外二人だけぢやケナ、宿屋の主人は政黨政派に關係しない方が得策であらうに、修善寺は妙な處ぢや哩、

十二月六日 豆州三島 梶屋にて

駿豆は記者か故郷に次で懐しい國である、我親族の或者は、沼津に三島に伊東に熱海に下多賀に前後二十八年の星霜を送つて今は亡人^{ナカヒト}となつて居る、或者は静岡に微官を

守ると十餘年、老鶴の舊園を戀ふ態があつたが、終に世俗の所謂榮轉なるものを屈辱と感じ、決然として去つた、我家族の或者は八歳より十四歳まで沼津に住んで小學教育を受けた、であるから沼津三島は歓迎がなくても我は青眼を以て對せざるを得ない、况や有志諸君十二分に歡待し、百方我旅情を慰められしに於てをや▲斯う云ふ次第で、記者は伊東へも下多賀へも熱海へも行きたく爲り、湯ヶ島から直に伊東へ行かうとしたが如何しても足が進まない、何故箱根を越えぬか箱根サカ越し、キラぬかと詰問する聲が何處からともなく聞える、ナニ箱根は明治十八年一月三十日に雪の中を越した、三十年十月十一日に下駄がけて越した、と我記憶は明白に保證して居るけれども、公人として越えたのでなく證明録に書いてあるので無いから役に立たない、現に沼津の某氏の如きは、修善寺へ行って伊東か熱海へ行けば箱根を越えないで済むと微晒した、箱根を天下無雙の險坂とでも思つて居るのか、徒歩の競争に負けたとは云へ、自ら進んで數個月の徒歩旅行をしゃうと企つた者を箱根さへ越え得ぬ者と看做すは餘り情けない、情けないけれども世間と云ふものは斯うしたもので、己れを知らぬ者に

對するほど面倒なことは無い、お姫様でも越すやうな箱根を越して見せなければ、木賃旅行を夢想だせぬ者と罵倒されたと同じ辱に逢ふかも知れなへので、又も三島まで引返すとした▲中狩野と下狩野の間は道普請最中で、高い崖から石や土塊を崩し落して居る處あり、十五貫目乃至三十貫目位の石を路上にゴロゴロ取散らして宛然石の展覽會を開き、人をして曲線に縫ふて通らしめて居る、險呑で耐らないのは、ランプ商などが迂路して半ば溝へ落ちて居るノ形の丸木橋を渡り、米俵を背負つた男が一たび石隧道際へ下り、更に其上を跨り越さうとする有様などで、下手な輕業見るやうに冷汗背を濕すのである▲今日は強風で、狩野橋の上から帽子を飛ばして仕舞つた、濱松製帽會社の贈品僅かに二週間で水上の泡と消えたのは残念ぢや、北豆新聞店で此事を話した所が、井澤氏は關西旅行に少し被つただけの帽子を呉れて此家へ案内され、晚餐を共にされた、

十二月七日

相州宮ノ下

奈良屋にて

昨日の強風に引換へて今日は餘程溫和な天氣ぢやつた、津田、小出、井澤三氏に送られ、小出氏の天台山別荘へ立寄つた、同別荘は函嶺の尾に位し、小高い松林中に建てられ、宮嶽を近く北に仰ぎ、天城山を遠く南に望み、眺囑絶佳である、のみならず、饗された柿、蜜柑、夏蜜柑など、何れも小出氏自作の物で、新鮮の光澤に満されて居た、ソコで記者は靴中へ、津田氏はポケット中へ、井澤氏は袂へ、貰つた果物を詰込んで、農園を參觀した、農園は南受けて日當り頗る宜く、梅、櫻、桑、蜜柑など何れも十分の春を盡蓄して居るが、特に梅は蕾の模様正月に開きさうである▲聽て三氏に別れて坂へかゝつたが、敷石が邪魔になる位なもので、坂の勾配はお姫様が歩くに相應してゐるのぢや、『お姫様でも越す様な坂を越さずにや讀者が承知せぬ』と大層讀者諸君を侮辱したやうな鼻唄を迂鳴りながら歩くと、向から來る人が帽を取つて辭儀した、これは歡迎者か十二萬讀者の一人か何れにしても今の鼻唄は耻かしいと悔んだが、辭儀した先生は『誠に恐入りましたが、私は未だ朝飯を食へません、何卒此紙をお買ひ下さい』とて淺草紙を出した、ソコで淺草紙は用らないと斷り、十錢だけ報謝した、彼の男は懷を探

つて『藝娼妓雇人口入營業新高松屋横塚カツ』と云ふ名刺を出し、『此御方が大變憐み深い御方で、紙を仕入る金を恵まれました』云々▲敷石路に飽きたので少し横路へ入つて見たが、枯草に胡坐かいて人參をガリ／＼噛つて居る先生があつた、記者を見て巡査とも思つたか、平身低頭何卒御免下さいと詫入つた、ソコで又少々報謝せざるを得なくなつた▲山中宿から少し登つた處で、後から追抜けた先生があつた、服装は穢く手拭に握飯だか何だか包んで肩に掛けて居つた、此男は諸國の蒲鉾屋を渡つて歩くのぢやが、沼津にも四十五日居つたとの事で、記者が沼津で歓迎されたとも知つて居た、『向島の勞働者大懇親會には豚を貰つて來た仲間です』云々▲蒲鉾職人は聽て『せつたい茶屋』へ入つて仕舞つたが、上から降りて來た人が、『貴君は樂天さんですか』と尋ねられた、記者は左様ですと應へて名刺を渡したが、『私は二六の愛讀者で……唯今名刺を持ちませんが、三田松坂町三十六番地栗原清助と申します』とて丁寧に旅情を慰められた▲聽て記者は箱根町の白木屋へ入り、櫓火に當つて居る旅客等に蜜柑を分ち、晝飯を食つて山上の寒さに戰慄した▲幾たびか我を顧盼せしめた宮嶽は元箱根村から

見えなくなつて、我は蘆ノ湯を指し一望茫々たる枯芒を分け行く身となつて仕舞つた、多田満仲や曾我兄弟や虎御前の墓、何れも眞偽不明であるが、枯芒の中に兀然として一種の詩趣がある、岩に刻した大地蔵は特に面白く覺えた▲蘆ノ湯に異装を笑はれ、小涌谷、底倉、宮ノ下へと降りた、湯本まで降りるのは譯は無いが、湯の微温いのは困るから宮ノ下へ泊つたのである、

十二月八日

相州小田原

齋藤緑雨方にて

箱根七湯中で最も高襟的なのは宮ノ下であらう、碧眼紅毛の美人が三々伍々打連れて散歩してゐるのは此邊である、藤屋の如きは重もに外客を相手にして居るので邦人を冷遇すると噂されて居る、奈良屋は之に反して重もに邦人を相手にして居るので外客は餘り泊らない、本年になつて外客の泊つたのは三四名ぢやが、何れも日本料理を食つたとの事ぢや▲今日は十一時に宮ノ下を立つて一時二十分に小田原へ來たが、柚餅、鳥賊、鹽辛、紫蘇卷梅干などの看板は到る處目に觸き、「うるらう」と云ふ看板は特に目

立つて居る、長州で食つた外郎が此處にもあるかと思つたが、菓子屋でなく藥種屋と判つて聊か失望した、失望の眼は纏て天獄羅屋に移り、殆ど無意識に入つて仕舞つた▲天獄羅屋を出て綠新道を尋ねると、郡役所の横丁を教へて呉れた、教へられた通り郡役所の横丁へ入つてマゴ／＼して居ると、後から人が來てコチラへ來玉へとて此家へ伴れて來た、今日は平塚まで行けまいとの事でトウ／＼泊るとになつた、晩に酒を飲むのはドノ位と主人が聞くから一合と言つたら、ケチな酒飲みだねエと笑ひ、君は健啖を誇つてるねエと嘲るなど、記者の「酒量の少きは君子なる所以、食量の多きは豪傑なる所以」てふ主張を打消さうと試みた▲小田原の鮓を食つて見玉へ、小田原の菓子食つて見玉へ、不漁だから小田原の鰻を御馳走しやう、先づ斯う云ふ風に「小田原の」と斷る處に主人の細心が見えて居るけれども、記者の勞れて居る頭には、十分に主人の親切を咀嚼玩味し得ないであらう、

十二月九日

相州平塚

今井別荘にて

箱根を越えて相州へ来ると暖室を出て氷室へ入つたやうである、警察は江州の草津ほどでなく、椅子ぐらゐは興へるけれども、冷淡で倨傲で迂濶で新聞記者の質問に答へるなどは職掌以外だから如何でも可いと云ふ意味を顔面に大書してゐる者もあつた、役所以外の人を訪問しても、團坐蒲を出さず、火鉢を出さず、名刺の表裏を丁寧に検査して不精無精に挨拶する人がある▲ソコで平塚町は例外ぢや、平塚海岸は平塚停車場から六七丁ほど南である、東に江ノ島を始め總房の諸山を眺め、西に大磯の高麗山を近景として其上に巍然たる富嶽を望み、南に伊豆大島及び眞鶴崎を見るのぢやが、一躰に砂地で善く乾き、空氣は海風に洗濯されて始終清潔である、此海岸を開墾し始めたのは平川徳五郎氏で、明治廿九年二月五日に着手したゲナ▲今日は十一時頃から縁雨氏に町端れまで送られ、國府津で晝支度して、三時頃大磯へ来た、町端れの茶店から親子で迎へて旅情を慰められたのは、平塚の龜井半兵衛氏で、一昨日は湯ヶ島よりの電報を湯ヶ原（即ち湯河原）と讀み違へて、五時まで此の茶店に待つたと話された此處に小憩して、大磯新聞賣捌擴進社を訪ふたが主人不在、路に自轉車を下りて二六の愛讀

者なりと挨拶されたは岡田守三氏ぢやつた、聽て此家へ案内されて、今井政兵衛氏外七氏と晚餐を共にしたが、大磯の岡田守三氏は林檎を携へて訪はれ、酒席に加盟された、擴進社長小泉良圭氏は風邪にて出席し得ざるは残念なりとて麥酒半ダースを贈られた、

十二月十日 相州鎌倉 三橋方にて

東京大阪などでは不漁と言つても何處からか魚が来るけれども、地方で不漁と云へば十日以上魚を獲ないことがある、都會の人が漁場を羨んで何時でも鮮魚を得る様に思ふのは大間違て、毎朝八時か九時頃に魚を買へば可、若し其時に買ひ損へば、如何なる珍客が來ても魚を供する事が出来ない▲紀州の和歌山などでも、毎日漁獲した中から市中及び近在の需用高だけを残り其他はドン／＼大阪京都神戸などへ送つて仕舞ふのぢや、であるから和歌山に於て俄に宴會でも催す時は、大阪から魚を逆輸入するのである、堂々たる和歌山市でさへ其通りぢや、小田原、平塚は推して知るべしは無いかな、

コで相知の人に向つてさへ不漁だから鰻を御馳走しやうと断る位なのに引換へ不漁とも何とも言はずに焼卵、八頭芋の旨煮を下物に饗應された平塚有志は、新聞記者を餘りに通人視したのであらう歟、新聞記者の敏迂を試やうとしたのであらう歟▲藤澤警察署長若松氏はチョット面白い人で、證明録に署印を捺さないで捺印を捺し、ハ、ハ、ア倒さまぢやつたかと大笑した▲藤澤町の子供二三人手を出して記者に『お呉れ〜』と迫つた、千金丹賣りとても思つたのであらう、

十二月十一日

相州横須賀

三富屋にて

記者は去る二十九年の夏、五十日間ばかり鎌倉に滞在したとがあるが、其後は臆の道切同様薩張り鎌倉へ来たとがない、ソコで五年前の鎌倉が深く心底に沁込て居るから、今日の鎌倉が著しく變化して居るのが分る、當時は西洋風の建物絶て無かつたが、今は所々に洋風がある、昨夜泊つた三橋でも西洋間と云ふのを設けて居る、兎に角鎌倉の進歩發達は驚くべきものぢやが、裸體で湯屋から戻る澁紙肌の男を見受けない様

になると同時に、麥島、雲雀などの趣味が漸々無くなるのである▲材木座で進藤亭と云ふのを訪ふた、これは五年前に滞在した家である、横山と云ふ人が泊つて居るかと思ふと、主婦はケマンな貌して、昨夜泊つた客は一人だけでしたとて、纏て火鉢の抽斗から出して来た名刺は横山天涯茫茫氏の名刺で、『十日夜鎌倉着と聞き倉皇終列車に乗り鎌倉へ参り候に不着、誠に遺憾千万、僕は是れより葉山へ参り本日歸京候べし、何れ御着京の上緩話可致候』と鐵釘的文字を列べ、裏に中村修一君としてある、記者は『コリヤ拙者に宛てた名刺です中村と云ふのは拙者です』と言つたが、却々容易に名刺を渡さない、ロク／＼讀めない癖に名刺を熟親して引込めやうとする、ソコで記者は其名刺は拙者が貰つて行くと奪ひ取つて来た、斯う云ふ次第で五年前の話も出なく爲り、記者は鎌倉の進歩に驚くと同時に進藤亭主婦の老朽に驚いた、五年前まで働き盛りぢやつた主婦が、何故斯う暫くの間に惚けて仕舞つたのであらう歟、記者は豫て横山氏に端書を出して、十日夜は鎌倉進藤亭に泊ると言つて置いたのぢやが、都合によつて三橋へ泊るとに爲り、早速同氏へ打電した、けれども電報は同氏が出立後に着いたので斯う

云ふ行き違ひを出来た▲光明寺境内を歩いて、堂宇の依然莊嚴なるを喜び、光明館が五年前は工事に着手したばかりぢやつたことを思ひ出し、八幡宮へ詣つて大銀杏の黄葉落盡したのを惜み、纏て金澤道を行きかけたが、横須賀へ行くには迂路と聞て、名越の方へ引返し、二つの隧道（鐵道の墜道ではない）を過ぎ、逗子、葉山を歩いた、葉山御用邸の前から下山橋を渡つて數丁行つたが、三崎の方へ行く道と聞て引返し、一縷の電線を頼りに野路山路をたどり始めた、出發以來地圖を頼りに歩いたのぢやが、神奈川縣だけは地圖なしに歩かうとするので、度々道に迷ふ次第ぢや▲一人の道伴みまわが出来たので、共に近道を歩いたが、山野を歩き慣れて居る彼は宛然猿の如く記者が小便して居る間に二三丁行き過ぎた、彼我の距離は見る／＼四五丁となつた、我は彼の後影を追ふて行つたが坂一つ越して道が岐れてる處で、彼の影は見えなかつた、記者は眞直に降りたが、漸々路が狭くなるので怪しく思ひ、引返して左へ入つた、これが本當の路で纏て本道へ出た、薄暮横須賀へ着き、新聞賣捌進文堂を訪ふて此家へ案内された、進文堂主飯塚竹次氏は出京中ぢやつたが、歸宅勿々來訪されて旅情を慰

められた、

十二月十二日

相州鎌倉

三橋樓にて

日本の安寧鞏固を保つ要素は多いが、横須賀軍港は其要素中の重なるものに相違ない、此軍港は年々歳々膨脹しつゝあると言ふ迄も無いが、今日では戸數三千九百二、人口一万六千九百三十八である、横須賀を賑かならしめて居るものは、水兵、職工、藝妓の三尊であらう、横須賀人が艦隊を待つと大早の雲霓に於けると一般で、艦隊一たび來着すれば、呉服店販ひ料理店販ひ、其他總ての社會一時に賑ふと云ふ有様である、チョツと調べて見たが、貸座敷十九、娼妓二百七十八、藝妓百三、待合十二、料理店が五十で、重なるは開陽軒、吾妻屋、常盤、旅人宿が五十七で、重なるは三富屋、玉野屋、鈴木屋、衆樂館、下宿屋は二十三、木賃宿は十五、飲食店は百九十七、人力車は三百九十七、狩獵免狀は甲種三等七、乙種二等十二、同三等百三十九、劇場は春若座、立花座、寄席は高倉亭、谷川亭、豊竹亭ぢや▲横須賀造船所の規模の大なるとは

言ふ迄もなく海内無雙で、重なる工場は、鐵船製造場、鍊鐵場、鑄物場、旋盤部、組立部、製罐部、船具部、模型部、据場等で、他に倉庫、石炭庫、諸艦船貨庫、鎮守府倉庫、水溜などあり、重量の物品はクレインを以て之を上下する様になつて居る▲今朝、飯塚竹次氏及び湘南新報記者藤本豊磨氏が訪はれた、造船所及び警察署へ案内せられ、飯塚氏と杉本友衛氏は廳で開陽軒へ記者を伴ひ行きて、西洋料理の晝餐を饗された、飯塚紫陽氏が記者に贈られた和歌は『旅衣やつれし姿それならで盡せる筆の花や床しき』藤本湘峰氏の記者に贈られた和歌は『旅にして何ねざらひの暇もなく都に歸る友をしぞ思ふ』『峠路は木枯寒く霜を吹く心して行け旅の若人』『長浦や長くも暗きトンネルを一人や君の越えて行くらむ』である、午後一時過二氏に別を告げて、所謂十三峠を越え始めたが、金澤へ出るのを間違へて逗子近く來た、ソコで餘儀なく又も鎌倉へ泊るとになつた、

十二月十三日

武州金澤

東屋にて

昨夜『シャインアスアサクマテ二六』てふ電報が來たので、今朝は今かくと待ちつゝ紀行を書て居つた丁度紀行を書て仕舞つた時、伊藤筆五郎君が惠然として見えた、言ふ迄もなく互に健康を祝して社中社外の談話に及んだが、血達磨先生の人物を始めて伺つた▲記者は廳で伊藤君に浴湯を勧め、『御晝食の支度を致しましやうか』と女中が氣を利用して尋ねに來たのを幸ひ、廉くて早くて旨い物を持つて來いなど、キザなどを言はずに、器械的に領いて頼みますと言つた、伊藤君が湯を出て暫く立つと膳が來た、酒は記者元少量、伊藤君は更に少量なので、二人に一本で十分ぢやつた、伊藤君は直に眞赤になつて、此通り手まで赤いと醉に偽なきを證明した▲廳で晝飯も仕舞ひ、午後一時から立つたが、門外まで送つた女中は伊藤君のいと白きと樂天の却て黒きとを評したであらう歟、茶代を置かない客な厭な客と評したであらう歟兎に角噓の出なかつた所で見ると譽めたのでも毀したのでもなからう、記者が二度まで三橋に泊つたのは、鹽湯の沸つのと、食物の好いのと、夜具の好いのと、モ一つは御世辭の様ぢやが、御女中様方の清麗で丁寧な事が原因であらうと思はれる、讀者曰く書く事が無いな

らしし玉へ宿屋や女中への追従は聴きたく無い) ▲伊藤君と停車場へ行つて郵便物を投函した、東京への發車には尙一時三十分ある、ソコで八幡湖畔を漫歩して公孫樹論を始めた、公孫樹論は決しないで他の談に移り、追々金澤道へと進み、坂東三十三札所の一なる某寺の前で別れた▲記者は寂しく感じつゝ、朝比奈の切通を急いで、東海の蒼々たる上に眞帆片帆を望み、聽て近いやうで遠く遠いやうで近い金澤へ来た、金澤文庫の跡などは如何でも可いが、此家は記者が明治二十二年の七月二十一日の夜八時半頃門を叩て泊つた家ぢや、總宜樓と云ふ八釜しい名は付て居るが東屋の方が通りが好い、中島無外翁の書いた「晴好雨奇」てふ扁額が掲げてある、

十二月十四日

武州横濱

小田原屋にて

金澤八景など、吹聴されて居るだけに、金澤の風光は鎌倉の上に位して居る、鎌倉は山麓に少しばかりの平地があつて、其處へ波濤か打寄せて居ると云ふだけのこととて、材木座邊から富士の見えるのが景物ぐらゐるのである、金澤と來るに海水灣入して湖の如

く爲り、嶼或は半嶼の蒼翠滴らんとするもの、倒まに影を水中に蘸せるなどは宛然畫中の景である、如何にも天開書圖即江山ぢや、▲東屋の女中に新聞を見せた所が、大隅太夫の肖像を見て『立派な御顔だことホ、、、』と笑ひ出した、拙者の顔とドチラが立派だと尋ねると、『貴郎のも畫にかいた上で較べなければ判りせん』と眞面目腐つて應へた、爾うして彼は新聞は木版で捺すもので御座いますかと聞くから左様だと應へ、此邊の者に似合はぬと思つて、原籍年齢等を問いたが容易に答へない、終には『序でに御手の筋と申たくなります』と憎まれ口を叩いた、總て都人士が田舎者に乗せられるのは此處ぢや、新聞は木版で捺すのか筆で書くのか知らない位ぢやから、如何にも迂闊遲鈍な者と思つて相手にして居ると、却々惡擦れた方面があつて、ズドンと土俵外へ投げ出す、都人士諸君は記者に鑑みて田舎者に油斷なさらぬが肝要である、去る仁の曰く、詩人は田舎を天國の如くに思つて居るが、田舎者の強慾、狡猾と來たら都人士の及ぶ所でない、都人士の強慾は判つて居る所があるが、田舎者は盲目的に強慾だからチエと▲今日は八時半に金澤を立つて、午後零時三十分には神奈川縣廳へ着いた、最

早時間外だから証明を得難いだらうと思つたが、早速證明して戴くことが出来たのは、誠に以て難有い仕合で御座いました▲萬朝報社支局を訪ふて黒澤敬太郎氏に會ひ、貿易新聞社を訪ふて北原録藏氏に會ひ、毎夕新聞社を訪ふて佐藤虎次郎氏に會ひ、京濱新聞社を訪ふて中藤次郎氏に會つた、中藤氏は前垂掛で編輯して居られたのでチョット面白く感じた▲今夜當地三新聞社及び萬朝報社支局の諸君が日盛樓で晩饗會を催され、縁雨先生に嘲られたる健啖先生を満足せしむるに西洋料理を以てせられた、來會されたのは、萬朝報の曾我部市太、黒澤敬太郎二氏、貿易新聞の水澤專吉、北原録藏二氏、毎夕新聞の野澤藤吉、東清次郎二氏、京濱新聞の富張元一、磯清二氏ぢやつた、富張氏は却々の氣燄家で、空氣の良否、瓦斯の多少、人間の身軀に何等の影響あるべき、神經の作用に過ずと主張され、徒歩旅行でも自轉車旅行でも一日だけ旨く遣り得れば、一個月なり一個年なり十個年なり旨く遣り得らるゝ、埋だと論ぜられた、ソコで記者は一語を贅し、『一鈔間遣り得れば一分間遣り得られる、一分間遣り得れば一時間遣り得られる』と大賛成を表した、富張氏は左様々々と益々氣燄を吐かれた、曾我部氏は冷靜

の態度を以て反對されたが、富張氏の熱したる耳には入らざつた様ぢや、

十二月十五日

武州横濱

小田原屋にて

横濱へ來て旅情索然として仕舞つた、工場や停車場や電燈會社や晝夜間斷なく石炭の烟を噴き出すので、記者は頭痛を催した▲漆器輸出を以て聞えて居る栢山商店々員吉池祐次郎氏が來られて、諄々と漆器に關する談話を聽かされたが、頭痛に惱んで居る記者は、十分に同氏の談を聽き得ざつた、のみならず同氏に對して禮容を缺いたのは誠に不本意千萬である▲併し同氏の談話中に一つだけ我記憶に存してゐるのがある、それは布を貼つた上へ漆を塗る事の困難で、維新前の漆工は巧く之を遣つて除けたが、明治産れの漆工は之を遣り得る者極めて少いと事ぢや▲吉池氏が歸られてから、鴻文堂の使が來た、これは社から電話がかゝつたのでmを持つて來たのである、記者の頭痛は頗る癒つた様ぢや、吉池氏が鴻文堂の使より後ちとて見えたら、記者は禮容を缺かざつたかも知れない、▲夕方チョツと散歩に出て、歸路佐川鋼太郎氏に逢つた、佐川氏に次

て天涯茫茫氏が來訪された、同氏は却々氣焔家で、例の通り勞働問題、社會問題に力
 癩を入れ、頃日は宗旨違ひの明治陰謀史を研究して居るとの事ぢや▲神奈川縣廳で勸
 業年報を請求したが、三十三年のは編纂中で、三十二年のも餘分が無いと言つた、ソコ
 て餘儀なく勸業課の某氏から三十二年の勸業年報を借り重なる産物の産額と價額とを
 寫し取つた、それに據ると葉煙草が五十一万九百五十六貫、甘藷が千二百七万九百
 六十貫、蘿蔔が七百二十三万八千十貫、青芋が三百七十一万八千七百六十貫、馬鈴薯が
 二百六十三万九千七十一貫、牛乳が三千五百三十五石九斗八升六合、漁獲物が百二十六
 万九千九百九十八圓、漆器が三十五万九千二百九十五圓、絹織物が二十五万二千八百
 五十四圓、粳米が三十一万二千五百四十六石、大豆が十三万六千八百八十八石、小麥が
 十一万五千七百三十二石、糯米が四万二千七十二石、菜種が四万四千二百二十六石ぢ
 や、

十二月十六日

武州品川

品川館にて

小田原屋へ泊つたのは萬朝報社支局の紹介に頼つたのであつた、萬朝報と云へば言ふ
 迄もなく茶代廢止會の根城である、故に小田原屋では其積りて待遇たらしむ、特に
 御女中様は二嚙一笑を吝まれ、寡言なる記者が三たび唇を開けは一たび唇を開かれる
 と云ふ割合ぢやつた、斯様な處へ茶代を置き心附を置くのは面當らしく見えるから
 ヤであるけれども、二泊と一晝食で僅かに一圓七十錢なので、財布の剩餘金が聊か
 邪魔になる、ソコで徒歩旅行者には不似合な大奮發をして茶代二圓と下女心附一圓と
 を置き、「一金二圓也、右御茶料として被下置難有受納仕御禮奉申上候也」てふ請取證と
 共に手拭風呂敷を貰ひ、剩へ蜜柑一皿を貰つた▲十時半に小田原屋を立ち辨天通へ來
 て犬に吠えられた、神奈川でも鶴見でも吠えられた、犬の吠ゆるは言ふ迄もなく怪む
 からで、犬の怪むのは人の怪むのを證して居る、滋賀縣では最も多く犬に吠えられ最
 も多く宿屋に斷られ、最も多く警官に睨(藪では無い)まれたが、神奈川縣は如何しても
 滋賀縣の次位たるを免かれない様ぢやつた、特に縣吏の威嚴は滋賀縣應以上ぢやつた
 ▲鶴見と川崎との中間で、二丁ほど向ふから「樂天君!」と呼んだ者がある、其聲は聽覺

えのある聲で、其態度歩き振りも見覚えがあつた、これは百四十四日間記者を苦めたる勁敵呑牛將軍で近眼ながらも眼鏡を懸て居るので早く記者を見出した、記者は眼鏡を懸て居らざつたので呼ばれた後漸く心付たのぢや▲呑牛將軍と共に川崎の旗亭に一飲して、互に紀行文以外の奇談を持出したが、其豪なるもの危なるもの艶なるもの、總て我は彼に及ばざつた、蓋し東北は奇境多き上に凡境をも奇化する呑牛子が行き、西南は凡境多き上に奇境を凡化する樂天が行つたからぢや▲此家へ着いたのは四時半ぢやつたが、先刻君等に逢ふ積りで行かれた那珂博士に逢はざつたかとの問が出た、記者と呑牛子は品川の新開賣捌齋藤定次郎氏の來訪に接し、懸て一浴したる後、川崎から引返された那珂博士に初晤した、那珂氏に次て北隆館支配人福田金次郎氏が見え、それから社の小野松二郎、木村信行、柘植福馬三氏が見え、此の家の主人淺古庄吉氏幹旋頗る勉め、宴飲方に酣、隱藝百出と云ふ際に血達磨先生が見えた、記者は血達磨先生に初晤して其丰儀の豫想に反せるを奇とした、呑牛將軍と記者は最も早く醉倒して、臥床へ逃込んで仕舞つたので、後から如何なる大隱藝が演ぜられたか、大氣焔が

吐かれたか、一向判らざつた、社長からの特使として小野瀬不二人氏が見えた、

十二月十七日 歸京

綠雨先生の書齋で筆端の窘縮した我、財布の空乏に半日の頭痛を贏得した我は、今朝目覺めて少年音楽隊の太鼓と喇叭に氣絶した、それで七時半に立つ豫定が狂つて八時四十分になつて仕舞つた▲輪頗先生と血達磨先生とは文人的旅行を遊ばされたので、御歸京當時も矢張り文人的ぢやつたが、呑牛先生と我とは大に賣捌上に功勞があつたので府下の各賣捌から大々の歓迎された、東京諸新聞賣捌同盟會、及び東京新聞賣捌十五區組合から各々二旒の歓迎旗と少年音楽隊を寄附されたのは、敗軍の將とは云へ販路擴張の勳功は呑牛將軍に譲らないからであらう歟、記者は四旒の歓迎旗を二六〇二旒にして戴きたかつた▲賣捌諸氏を列擧すると、稻垣新聞堂、今井勉強堂、伊藤見珍堂支店、富田新聞鋪、蟹江日本館、中島萬文堂、中尾新聞店、納所正導社、村田本郷堂、野村見珍堂支店、矢野新聞店、八木正信堂、松本衆樂社、松下新聞堂、櫻井東

山堂、北村明進堂、宮澤日成堂、守屋新聞堂ちやが、我は明治十八年の九月から二十年の六月まで納所正導社^{せうどう}で御世話になつたのである、徒歩旅行をする程の健脚家になつたのは、全くとは言へないが七分通り正導社の御蔭であらう▲躰て鎗屋町へ入り北隆館に歡呼し、日本橋へ來て七月一日の早朝火災保險會社の樓上に別盃を飲て雨中發足したとを憶起し、十一時歸社して茶碗酒に社外の歡迎諸君に別れ、晝飯後吞牛子と共に工藤寫眞店に撮影した、





出立、北村明雄堂、宮澤巨鹿堂、守屋新聞堂やが、我は明治十八年の九月廿三日
年の六月まで前所正導社で御執事なつたのである。従事旅行する程多岐脚案にな
つたのは、全くとは言へないが七号通り正導社の御殿であらう。本職で繪屋町へ入りた
り、當時は對呼し、日本籍へ來て七月一日の早朝大災難協會社の機上にて原釜を飲で國中
にたるとも憶起し、一時歸郷して茶碗酒に社外の御遊遊君に別れ、貴領後存生すと
其に五心為真成に撮影した。

明治三十五年七月六日印刷
明治三十五年七月九日發行

(定價金三拾五錢)

著者

東京市芝區南佐久間町二丁目十七番地
中村修一

發行者

東京市麹町區富士見町四丁目八番地
高濱清

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
戶上義章

印刷所

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舎第一工場

發行所

東京市麹町區富士見町四丁目八番地
俳書堂
(電話番町七四八)

子規著俳書

俳諧叢書第一篇

俳諧大要

既刊第四版
定價貳拾錢
郵稅貳錢

俳諧叢書第二篇

俳人蕪村

既刊第三版
定價貳拾錢
郵稅貳錢

俳諧叢書第十一篇、二篇

俳句問答

全二冊
定價各冊拾錢
郵稅各冊四錢

俳諧叢書第十三篇

俳句界四年間

定價參拾錢
郵稅四錢

俳句を學ぶものゝ爲に説く事
丁寧周到に子規の進歩の跡を
叙したる者にして亦同人の進歩
の跡を叙したる者、即ち俳諧
の大道なり。

蕪村は古今の俳傑なり。本書
は著者が多年研鑽の結果を公
にし、蕪村をして九鼎大呂よ
りも重からしむ。

子規子が「日本」ホト、ギス
等に掲載したる問答の俳話
を輯む。上巻には「俳句問答」
「試問及試問の答」、下巻には
「或問」「隨問隨答」を收む。

明治廿九年より三十二年に至
る四年間は、我新俳句進歩の歴
史を劃す。之を指導し鞭撻し
たる著者が批評を輯めたる者
にして實に此四年間の俳句史
たり。附録として著者が鳴雪、
飄亭、碧梧桐、虚子四俳家を品
騭したる四章の文字を添ふ。

發賣所

東京見
市四町
麴目丁
區八番
富地
士地
俳書堂
電話七
番八
町

春 夏 秋 冬

●明治新俳句の類題句集●

<p>子規選</p> <p>春之部</p> <p>碧梧桐、虚子選</p>	<p>夏之部</p> <p>碧梧桐、虚子選</p>	<p>秋之部</p> <p>碧梧桐、虚子選</p>	<p>冬之部</p> <p>碧梧桐、虚子選</p>
--------------------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------

<p>●既刊第三版</p> <p>定價廿五錢</p> <p>郵税貳錢</p>	<p>●既刊</p> <p>定價廿五錢</p> <p>郵税貳錢</p>	<p>●既刊</p> <p>定價廿五錢</p> <p>郵税貳錢</p>	<p>●既刊</p> <p>定價廿五錢</p> <p>郵税貳錢</p>
----------------------------------------	-------------------------------------	-------------------------------------	-------------------------------------

明治新俳句の類題句集としては、既に民友社より發行したる「新俳句」の一編あり。是れ明治二十八年頃の俳句界を代表する者にして、爾來五尾縮、此間幾多の變遷を経、新聞「日本」ホト、ギス等に掲載せられたる句各季幾十万の多きに上る。此間正に二三の句集無かるべからざりしに其學無うして、今日に至り、新俳句第二の句集として、漸く愛に「春夏秋冬」あり、之を「新俳句」の例に徴すれば、宜しく幾千頁の大冊たるべきなれど、選者の精嚴なる標準は、僅に各季千三百余句を選ぶ。以て如何に其句々金玉にして如何に我が明治俳句の精華たるかを知れ。春之部は子規子の選になり、夏之部以下は其病重き爲め碧梧桐、虚子の兩人代つて之を選ぶ。春之部は第三版に逸し、夏之部は殘部既に多からず、秋之部は選抜を終りて、刊行近きに在り、冬之部亦遠からず出版すべし。苟も俳句を嗜む者、明治俳句の何たるかを知らんと欲する者は一讀せざる可からず。

東京見市町四丁目番八番電話(七四八) 所賣發 俳書堂

古 人 句 集

<p>俳諧三佳書</p> <p>●第三版</p> <p>定價廿五錢</p> <p>郵税四錢</p>	<p>太祇全集</p> <p>●第二版</p> <p>定價貳拾錢</p> <p>郵税二錢</p>	<p>几董全集</p> <p>●第二版</p> <p>定價貳拾錢</p> <p>郵税二錢</p>	<p>召波樗良句集</p> <p>●第二版</p> <p>定價貳拾錢</p> <p>郵税四錢</p>
---------------------------------------------------	--------------------------------------------------	--------------------------------------------------	----------------------------------------------------

俳諧三佳書は同人が常に棄て難く運座の席にも郊外散策の時にも懐にする三個の書「猿蓑」「續明鴉」「五車反古」を集めたり。以て元祿、天明二盛期を代表せしむるに足る。太祇、几董、召波、樗良は天明の俳壇に立ちて、蕪村如來を圍繞せる四菩薩なり。蕪村元帥の馬前に武者震ひして立ち、はだかつたる四將軍なり。天明の俳句を研究せんとする者は、俳人蕪村、蕪村句集講義を讀め、既に俳人蕪村、蕪村句集講義に據つて蕪村如來の面目を明にす、乃ち此三書により四菩薩の句法を知らざる可けんや。

東京見市町四丁目番八番電話(七四八) 所賣發 俳書堂

寫生文

美文を書くには寫生といふ事が尤大切だ併し單に寫生といふだけではわがかりにくい吾黨が寫生とは斯んなものであらうと試み來つた者を輯めて「寒玉集」を編んだ

子規、碧梧桐、虛子文集 ● 既刊

寒玉集 第一編 定價卅五錢 郵稅四錢

鳴雪、子規、四方、太、青々 ● 既刊

碧梧桐、處子、鼠骨文集 ● 既刊

寒玉集 第二編 定價卅五錢 郵稅四錢

子規、虛子選 ● 既刊

寸紅集 定價卅五錢 郵稅四錢

寒川鼠骨著 ● 既刊

新囚人 定價卅五錢 郵稅四錢

「新囚人」とは鼠骨が新聞社の代表人として獄に入り十五日間臭い飯を食つた間の觀察を所謂寫生的にさうして獄に十五日間白く書つた者である獄中の事情は此書に由て極て明白に描れてある社會教育宗教文學の方面から此書は重きを置かれてゐる

東京市見附町四丁目八番地 發賣所 俳書堂 (電話番町) 七四八

燕村句集講義

春之部

第二版 定價參拾錢 郵稅四錢

夏之部

既刊 定價卅五錢 郵稅六錢

冬之部

第二版 定價參拾錢 郵稅六錢

秋之部

近刊

几童燕村句集を選むに當り之を前後の二編に分ち小祥大祥二忌追福の爲とするよし其跋に見ゆ。而して現存する處の燕村句集は即ち其前編なり。鳴雪子規二先輩を始め同人等始めて此集を得てより日夕愛誦して今日に至る、其研鑽玩味の餘成る所のもの即ち此燕村句集講義なり。明治卅一年冬より始めて卅四年秋に終る殆ど三歳の間根岸子規の廬に會して冬之部、春之部、夏之部を輪講し終り、其都度雜誌ト、ギスに掲げたる者、各輯めて一卷となす。秋之部も亦輪講を終りたれば出版すべし

東京市見附町四丁目八番地 發賣所 俳書堂 (電話番町) 七四八

三 叢 書

俳諧叢書

賣す。詳しくは別項「子規著俳書」の廣告を見よ

虚子著

俳句入門叢書

近刊

鳴雪、碧梧桐、虚子等評釋

俳句評釋叢書

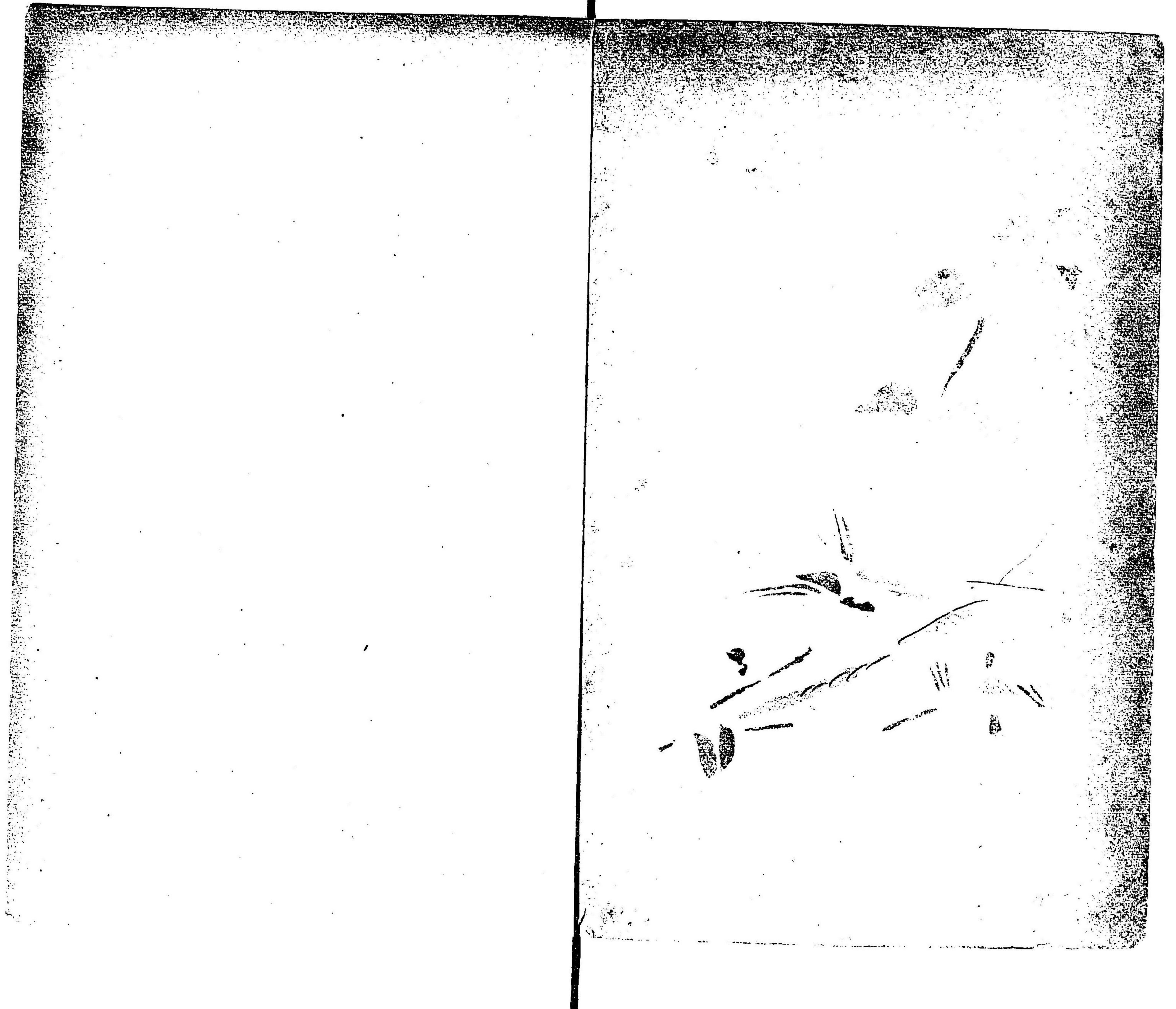
近刊

釋を待たずんば金玉と誤らる。第一行せんとする微意是在り。第一評釋ものせらるべし(定價等未定)

俳諧叢書は俳諧に關する同人の著者を刊行し又時に有用と認むる古俳書を翻刻するものにして、既に第十三篇迄を刊行し、發行人の著者に「俳句入門」の著あり。當時此種の著者に無かりし爲め幸に讀者に君の迎ふる所となりしと雖今に於て之を見らる私に耻づる處多し。今其句上の智識を此書に陳且つ識者之批評を乞はんとす。菊判半裁全十二冊、定價一冊金貳拾五錢、郵税共一錢、六冊前金壹圓五十錢(郵税共)十二冊前金貳圓(郵税共)一錢、標準を以て其味見入るの解釋を異にす。古入金の句とば瓦礫の解釋を同様に識者之瓦礫の解釋を以て、堂の俳句評釋を以て、續明を以て、

發賣所 東京市見附町四丁目 富地番八目 俳書堂 (電話番町) 八四七

96
16



96

16

